
幻想のナラトロジー

かざむき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想のナラトロジー

【Nコード】

N8318M

【作者名】

かざむき

【あらすじ】

菅原直己はとある日の放課後、待ち合わせのはずの教室から、想いを寄せている少女、千坂夕莉を偶然発見する。成り行きのまま追いかけた先で出会う、不思議な存在《幻想人》。やがて直己は、幻想を狩る存在《執行者》への道を踏み出す。その時から、彼と彼女の運命が少しずつ動き始めた。

Introduction

三階まで続く階段を駆け上がると、正面からの夕日が目に入った。菅原直己は眩しい夕日に目を細めながらも、決して背けることはしなかった。放課後で閑散とした廊下を見回して、いつも授業を受けている教室へ向けて歩き出す。

胸が高鳴っていた。

何日も前から、今日はあの娘に告白すると決めていた。

高鳴る期待を押さえながら、直己は毎日のように訪れる一年三組の教室に入った。夢見ヶ丘高校に入学し、この教室で授業を受けて二ヶ月弱。未だ慣れきっているとは言えなかったが、友人もできて高校生活はそこそ順風満帆である。

……むう、まだ彼女は来ていないか。

辺りに誰もいないことを確認してから、教室の窓にぼんやりと映る自身を眺め、直己はにやりと笑みを作ってみせた。校則を躲せるくらいにほんのり染めた茶髪と、どこか少し軽さを感じる外見が、窓に映って反射する。

直己が彼女に恋をしたのは、つい一ヶ月前ほどのことだった。

もともと容姿端麗な彼女は、学年でもちよっぴり有名な存在だった。だから、その頃は興味の欠片すらなかった直己も、少しだけ覚えてる。

あまり人付き合いが良さそうには見えなかったが、だからといって誰かに危害を加えるようなタイプ……というわけでもなく。一言で表すなら、孤高の存在というやつだろう。積極的に誰かと関わろうとするわけではなく、だがなぜか目立ってしまうような人物。

とある男子生徒曰く、

「彼女は幻想で出来ているんだよ」

今となってみると、なるほどなと思う。

人間が美しいものに惹かれるというのならば、さしずめ彼女は幻

想だ。実際、その幻想を追いかけて何人かの男子生徒が撃沈済みになっているそうだし、願わくば、直己はその仲間入りは避けたいところだった。とは言っても、幻想には無謀も付き物なわけで。

だが、叶わないと知っていても。

人間はどこかで、無意識のうちに、“幻想”というものを追い求めているに違いない。それだけはこの短い期間で、直己の実感した一つの事実だった。

ふと時間が気になって、直己は教室の時計を見た。

午後五時。時間はぴったりだった。

見事に誰一人いない教室を見回して、軽く嘆息する。

ま、こんなもんか。半分くらいは諦めてたけどさ。適当な言い訳を脳裏に浮かべ、教室から出ていこうとしたその時、直己はすっと動きを止めた。

「……あら？」

夢見ヶ丘高校の校舎三階、そこから見下ろした体育館裏の近くに、とても見覚えのある姿があったのだ。

遠くからでも、一目で把握できた。

あれは今まさに約束をすっぱかした彼女——千坂夕莉の姿だった。

昼休みに待ち合わせの約束を取り付けておいたのに、まさかすっぱかされるとは思ってもみなかった。あらゆる意味で想定外である。ただ彼女が待ち合わせをすっぱかしてまで、あの場にいたことは単純に気になった。

体育館裏の方へと近づいていくと、微かな会話が聞こえてくる。

つい反射的に物陰へ隠れてしまい、そこで直己は自嘲に満ちた呟きを漏らした。

「おいおい、俺はいつからこんな卑しい人間になったんだ……」

これじゃ、まるで不審者じゃないか。

しかし、そんな直己の心情など露知らず、体育館裏での会話はしばらく終わりそうになかった。何よりも、その会話はどうも妙なの

である。単なる雑談には聞こえないのだ。

物陰に隠れながら距離を縮めていくと、徐々に直己の耳にクリアな音声が届いてくる。

「何度も言っているでしょう。我々は闘争など望んではないのだと」

まるで紳士のように落ち着いた口調だった。少なくとも、その低い声色からして男性のもので、ぶっきらぼうな喋り方をする夕莉のものではない。

「ふん、戯言を」

この嘲笑するような台詞は、夕莉のものだ。

「……私たちには闘争しかないというのに、よくもそんなことが言える。あなたほど聞き分けのない馬鹿は見たことがない」

直己が物陰からちらりと顔を出して、会話の様子を伺ってみる。もう完全に不審者かどうかなどは失念してしまっていた。

朴訥ながらもいつになく饒舌な夕莉に驚いていたが、直己はそれ以上に——もう一人の話し相手に驚いた。正直なところ、何かの冗談かとも思っただくらいだ。

夕莉と話していたのは、白ウサギだった。それもチョッキを身に着けており、二本足で立っていて、挙句の果てに懷中時計まで握っている。まるで童話の世界からそのまま抜け出てきたような、そんなファンシーな白ウサギだったのだ。

「それは光栄ですね。……では、いつも通りアリスによろしくとお伝えください」

まるで淑女に向かってそうするかのように、白ウサギは流麗な動作で一礼してみせた。

「御免被る。何、あなたは逃げるつもりなの？」

「闘争を好まない主義なのですよ」

「……何か問題でもあると？」

「お嬢さん、闘争も何も、まずは辺りをちゃんと確認しなくては。先ほどから観客がいるようですよ、ほら」

そう言つて、白ウサギはメガネの奥にある特徴的な赤目で、隠れている直己の方を見る。

心臓を鷲つかみされた気分だった。

「観客、ですって？」

白ウサギに釣られ、その視線を追いかける夕莉と、物陰からの直己の視線がぶつかった。

いつも学校で見えてきたような、何事にも動じない彼女の瞳。しかし、今回ばかりは、そんな夕莉の瞳にも動揺が掠め去っていったのを、直己は確かに見た。

「あなた、昼休みの……いつから、そこに……」

正直、直己はそこでどう答えるべきか迷った。

だが何かを口走る前に、白ウサギが言葉の全てを攫っていった。

「ふ、ふふ……さすがのこの状況では、闘争も何もないでしょうねでは、今回は幕引きといたしましょうか。互いに好都合ではありませんか、わたしにとつても、あなたにとつても」

「……勝手にすればいい」

憤懣やるかたない表情をしていたが、それでも夕莉は挑発的に返していた。

「ではお構いなく。お嬢さん、今度会えるときは殺し合いができることを——説に願っています。それは、よい時間を」

過剰なほど丁寧な社交辞令を残すと、白ウサギはまた一礼をして去っていく。

背を向けて去っていく白ウサギのことを、直己と夕莉はじつと見送っていた。しかし、その姿が見えなくなると、夕莉は鬼気迫った顔をして歩み寄ってくる。すでに嫌な予感しかしない。

「……いつから見てたの？」

前髪をぱつつんを切り揃えた少女、千坂夕莉が元々のツリ目をさらに釣り上げ、厳しい面持ちをして問いかけてきた。

「闘争がどうか言つてた辺りからだ」

「私はあなたの名前を知らない。教えてくれる？　できれば学年と

組も」

「一年三組、菅原直己」

「どうして、ここに来たの？」

「……待ち合わせに来なかった千坂さんの姿を、たまたま見かけたから」

すると、夢見ヶ丘高校で孤高の少女は、気に入らないとばかりに鼻を鳴らしてみせる。

……ああ、すっげえ状況悪いなあ。

さすがの直己も、この状況では告白がどうか言えるほどではない。つい先刻まで高鳴っていた胸の鼓動が、恋の予感ではなく単なる緊張で脈打っているのが何とも言えなかった。

「……そう、確かに待ち合わせに行くことができなかったのは謝るわ。でも、仮にそうだとしても、人の行動を逐一監視するような行動を取るのとはどうかと思うのだけど」

「仰るとおりです……」

あまりに正論過ぎて反論できない。

「それと、さっき見たことは忘れて」

「さっき見たこと？」

直己がそう鸚鵡返しに問い返すと、夕莉は自らを呪うように長い長い溜息を吐いてみせる。

「白いウサギがいたでしょ？」

「ああ、あれのこと。確かにびっくりしたけど……あれがどうかしたの？」

「——あれはね、幻想人って言うのよ」

そう発した直後、夕莉が両手で直己のことを突き飛ばした。

それはあまりに突然すぎた。突き飛ばされて尻餅をついてしまい、何すんだよ、と悪態を吐きかける直己だったが——喉元に突きつけられたものを目にした途端、それは引っ込めた。

いつそんなものを手にしたのか、夕莉のはレイピアのようなものを握っていた。

「ごめんね。残念だけど、この話はここでおしまいなの。続きはない」

どう考えても凶器としか思えないそれを見て、直己は焦り出す。
「え、ちょ……ま、待ってくれ。その、要するにだな……何でこんなことになっているのか、まず教えてくれないか？ まじめにさ、殺されるほどのことしたわけ？」

「別に。目撃者を消すのが規則だから。……でも、一言くらいは聞いてあげる」

ゾツとするくらいの殺意をまといながら、夕莉はそう告げる。

こ、これは殺される——その時、直己は本気でそう思った。目前の夕莉から発せられる殺意は、まるで氷塊を連想させるくらいに冷え切っていたのだ。

ごくり、と唾を飲み込んで直己は叫んでいた。

「……キ、キミが好きだ！！」

ザアツ、と夢見ヶ丘航行の校舎裏にある雑木林から、カラスたちが飛び去っていった。まるで世界そのものが止まってしまったかのような沈黙が数秒続き、そして——

「——はあ？」

夕莉から返ってきたのは、洗礼のような一言だった。

「ふうん……好き……好き、か。で、好きだから何？」

「え、いや、何って言われても困るんだけど。ええと、じゃあ付き合ってください」

「無理」

有無を言わせぬ拒否の態度に、思わず直己はがっくりと肩を落とした。これが撃沈ってやつか、と直己は頭を抱える。それは命の選択をしている今の状況では間違った思考回路だったが、その時の直己にはただフラれたという虚脱感しかなかった。

突きつけていたレイピアを下ろし、夕莉が自らの黒髪をさらりと掻き上げる。

「……面白いことを言うのね。こんな状況でそんなことを抜かす人

は、これまでになかった」

まあそうだろうな。直己は内心で思ったが、あえては口に出さなかった。

冷たい殺意をまとうていたはずの夕莉が、わずかにだが口元を緩ませて、くつくつ笑う。

「付いて来なさい、特別に殺さないであげるわ。命だけは助けてあげる」

棒のように動けない直己の手首を、夕莉が力強く握った。付いて来なさいとか言いながら、強引に手首を握っている時点で直己の拒否権はなさそうだった。

ぐいぐいと連行されていく中、直己は辛うじて問い返した。

「どこへ、行くつもりだ」

「秘密の場所へ行きましょう。これは他言しないでね、その時は今度こそあなたの命を貰うことになる。これは比喻でも冗談でもない」

「……秘密の場所って、どこだ？」

不審げな顔をする直己に、夕莉はがわざとらしく笑んだのを見た。

「大丈夫、ただの幻想の国よ」

+

人間はどこかで、無意識のうちに、”幻想”というものを追い求めているに違いない。

——なるほど。確かにその通りだ。

菅原直己はその日、幻想世界への扉を開いた。

Introduction (後書き)

……と、まあ色々書いてはいますが。書いてる本人も戦々恐々です。新連載です。恐縮であります。

そして書きはじめて気付いたのですが、今作たぶんルビが多いと思うので、IEで見てもらうか、PDF化してもらえると綺麗に見れると思います……。

や、僕もルビ減らすように極力努力しますが……。

Chapter 1 - 01 : 幻想の狩人たち(1)(前書き)

Chapter 1 : White beast .

Chapter 1 - 01 : 幻想の狩人たち(1)

0

「——了承いたしました。これが、あなたに与えられる幻想の武器です」

アリスの口から語られたのは、そんな宣託のような言葉だった。後になって思い起こしてみても、その時、アリスと行ったやり取りだけはぼんやりとしている。ただ無心のまま、両手を杯のように広げ、そこに造り出される何かを落とさないよう必死だったこと。それだけは思い出せる。

両手に出現したものは、辛うじて剣の形をしているような無色の骨組み(スケルトン)。

優美な装飾もない。幻想的造形もない。

ただどこまで行ってもシンプルで、それでいて気持ち悪いほどに所有者の幻想を何も映し出していない造形物。^{オフジェ}それが菅原直己が得ることとなった、幻想武器だった。

「受け取ってください。これが、あなたの幻想を反映した武器——

《S 0 9 ^{イマジ}Imag ine》です」

1

そこは木々に覆われた、静寂の森の中だった。

そんな森の中で、今、直己がいるのは、木が切り揃えられ、ちょっとした広場のようになっている場所だった。薪をくべて燃える焚き火があり、それを取り囲むように切り株のイスが四つ置かれている。辺りには見たこともないような巨大キノコが生えており、目を眩るような美しい草花が咲き乱れていたりもする。

ここは言葉通り、メルヘンの国だった。

しかし、そんな幻想の国が、まさか夢見ヶ丘高校の校舎裏にある雑木林——その奥深くにあるなどとは、一体誰が考えるだろう。事実、直己も無理やり連れてこられなければ、そんなことなど知る由もなかった。

「この”庭”^{ガーデン}に来て、今日で一週間になるけど、そろそろ慣れたかな？」

そう柔らかく問いかけてきたのは、同じ夢見ヶ丘高校の制服を着ている先輩、橘美鈴だった。肩までかかる栗色の髪を振り乱しながら、手にした短銃型の幻想武器を突き出してくる。

目の前から繰り出された突きを《S09 Imagine^{イマジン}》で弾き返し、直己は集中力を切らさないよう細心の注意を払っていた。

「慣れたも何も、まだまだですよ、先輩」

幻想の武器は噛み合うたび、澄んだ金属質の音を森へと響かせる。今、直己たちが行っているのは幻想武器を使った模擬戦闘だった。この武器を使った実戦訓練によって、自らの武器の扱い方、戦術の組み方、立ち回り方などを体に覚え込ませている真っ最中なのである。こんなことを毎日のようにしているものだから、ここ最近は全くもって小さな傷が絶えない。

「大体、俺は幻想の常識なんて、ほとんど理解してませんし……」

橘先輩が隙のない払いを放ち、それを直己がイマジンで受け止める。彼女は見た目こそ普通の生徒だったが、どこか他人の心情にすっぽりと嵌まり込んでしまうような、そんな軽妙さがあった。

その時、ふと直己の後方でガサリと音がした。それに直己は反射的に振り向いてしまう。

「こら、余所見は厳禁だ」

「しまっ——」

愚を悟った時にはすでに遅かった。先輩が勢いよく突き出した短銃の柄が、直己の腹に直撃する。有無を言わさぬ一撃。直己の体が浮き、背中から地面へと叩きつけられる。

「止め」

その直後、ガサリと音のした草むらから、ひよっこりとタヌキが顔を出す。

「……タヌ公、お前のせいだぞ」

「タヌキのせいにするくらいじゃ、まだまだだね。まあ反応したことは褒めるけどさ」

草むらの中へと戻っていったタヌキを見届け、先輩は苦笑を浮かべてみせた。手近な木にかけてあったタオルを手に取り、それで汗を拭き始める。

地面に大の字で横たわったままの直己は、荒い呼吸を繰り返しながらぼつりと言う。

「俺、何でもこんなことしてるんでしたっけ」

「君が身を守るようにだろう」

至極当然のように言ってるのける先輩は、そのまま近くにある焚き火——そこを囲むように設置されている切り株の方へと移動していた。自らのカバンを漁ってスポーツドリンクを取り出し、それに口を付ける。

そんな先輩のことをぼんやりと眺めて、直己はこう思考せずにはいられなかった。

……ほんと、なんでこんなことしてるんだっけ。

その理由を思い起こすと、思考はいつも一週間前まで遡る。

あの日、この”庭”^{ガーデン}まで強引に連れられてきた直己は、ここで命の選択をさせられたのだ。生きるか。それとも死ぬか。それは幻想を何も知らぬ直己にとって、究極の選択だった。

そんな究極の選択で、直己は生きることを選択した——

よっこらしよ。ようやく体を起き上がらせ、自らの制服に着いた土ぼこりを払う。吹き飛ばされた時に地面に落ちたイマジンに消えると念じると、幻想武器はすぐさま虚空へと姿を消した。この幻想武器というやつは、とことん所持者にとって便利に作られているらしい。

「ほら、直己くんも飲みなさい」

先輩が自ら口を付けていたスポーツドリンクを差し出してくる。

「いや、でもそれ先輩のでしょう。……いいんですか？」

そんなことを言いながらも、つい受け取ってしまう直己であった。別にいいて。間接キスとか、そういうつまらないことは気にしてないから」

「……そんな直球だと、逆に俺が飲みづらいんですが」

わずかに抵抗感はあったが、気にしないと言われては断るのも悪いなと思い、直己は深く考えないことにした。ペットボトルの蓋を開けて、清涼飲料水を三口ほど一気に流し込む。それは運動後の火照った体にとって、最高の潤いだった。

ふと視線を戻すと、先輩がにやにやしながら直己のことを観察していた。

「いい飲みっぷりだね。そしてまた一つ参考になったよ」

「何がですか」

「いやいや、こっちの話」

何か引つかかるものを感じながらもペットボトルを返還して、直己はちょうど先輩と対面となるよう、焚き火の向こう側にある切り株に座る。

残りのスポーツドリンクを一気に飲み干した先輩が、ふいにこんなことを言った。

「そついや、学校でちよつくら面白い噂聞いたんだけどさ……」

先輩がちらりと意味ありげな視線を向けてくる。

「直己くん、ちょっと前に夕莉ちゃんに告白したんだって？」

「……うへ」

これは予想外の問いかけだった。

直己が学校生活を営んでいる間は、そんな噂は耳に入ってきていなかったのだが、もしかしてひっそりと噂になってたのだろうか。

「ああ、やっぱり図星なのか！ 君が分かりやすい性格してて助かったよ。で、結果はどうだったんだい？ ほらほら、この橘先輩に

洗いざらい話してみなさい」

「……聞かなくても、なんとなく察してくれませんか？」

そう沈痛な面持ちで返すと、これまでにここにこととしていた先輩の表情が固まる。

「あ、はは……まあそうだよな。同情するよ」

「同情なんていりません……」というか、穴があつたら入りたい気分ですよ、まったく……」

……なんか思い出したら、また落ち込んできた。

直己は切り株に座ったまま俯き、ぐらぐらと体を揺する。たぶんそれを第三者から見たら、相当病んで見えるかもしれない。まあ何にせよ、それならそれでいいような気もした。

焚き火の向こうにいる先輩が、地雷踏んでしまったような顔をしていた。

「とにかく、君はロマンチストなんだね。これまで彼女に告白して撃沈しなかった者はいなかったんだろう？ それでも挑戦しちゃうつてのが、ロマンチストなのを証明してる」

「ロマンチスト、ですか」

「そう、君は馬鹿正直な人間なんだ」

「……馬鹿で悪かったですね」

直己は苦々しい表情でそう漏らす。先輩が苦笑を貼り付けていた。「でも、君が連れてきたあの日、あたしなんかは夕莉ちゃんがとうとう彼氏でも作ったのかと思ったんだけどね。元々あの子は心を許した人じゃないと、そんなことしない子だし」

「そうなんですか？ でも、下手したら殺されるところだったんですよ」

「あはは、彼女のことだから君も怖かっただろうね」

深刻な感じに話したはずだったが、それに先輩はからからと笑っただけだった。軽く笑える話ではないと思うのだが、そのころはどうなんだろう。

「……というか、ここはいつもそんなことしてるんですか？ 目撃

者は消すとか」

「んー？ まあね」

先輩は軽い調子まま返すだけで、それ以上については何も言わない。

「ともかく、彼女には感謝しておきなさい。君は命を助けてもらった立場なんだから」

「そうですね。感謝はしてます」

「そうか安心したよ。それじゃ直己くん、ちょっと悪いんだけどさ、夕莉ちゃんのところにお使い頼まれてくれない？ これを渡して欲しいんだよ。あ、中身は読まないでね」

そう唐突に切り出して、先輩が取り出したのは四つ折りにされたメモ用紙だった。中には何か書かれているに違いないが、わざわざ前置きで読むなと言われているのだから、どちらにせよ読まない方が懸命だろうと思う。

直己はぼりぼりと頬の辺りを搔いて、曖昧に笑ってみせる。

「え、いや、でもあいつは俺のこと嫌ってますし……」

「そんなことないってば」

先輩は顔こそ笑っていたが、断固として自論を曲げる気配はなかった。

「大丈夫、お膳立ては全部あたしがしてあげるからさ。あたし、これでも君の恋のことを応援してるんだよ。こうやって可愛い後輩に出会いの場を提供してあげるわけだし、少しぐらいの感謝はされてもいいと思うんだけど、どうなの？」

そう詰め寄られると直己も、はあ、と無難な返事をするしかできなかった。

Chapter 1 - 01 : 幻想の狩人たち(2)

橘先輩の情報によると、夕莉はよく図書室で本を読んでいるらしい。

あれから夢見ヶ丘高校まで戻ってきた直己は、すぐさま言われた通りに図書館へと向かった。まったく先輩にも困ったものである。可愛い後輩に出会いの場を提供してあげてるのに、とか言われても、携帯でも済ませるような用事では理由にもなりやしない。

校舎三階にある図書室に入ると、放課後だというのに意外と人がいた。あまり図書室には足を運ばない直己にすれば、ちよつとした驚きだ。

……お、いたいた。

あまり目立たない端の方で、折りたたみ椅子に座って読書している夕莉がいた。

「よう」

「……ん」

これまで一心に本を読んでいた夕莉は、ふと声をかけると顔を上げた。そこにある直己の顔をじろじろ見てから溜息を吐く。

「……なに、何か用？」

「いやまあ、ちよつとな。……これを橘先輩から渡されたんだよ」

直己はそう言って、自らの懷から四つ折りにされたメモを取り出す。橘先輩と言った時、夕莉がわずかに疑わしげな顔をしたのが気になった。

「先輩は私の番号とアドレス知ってるはずだけど……どういうこと？」

「んなこと言われても。俺も頼まれたから来ただけだしな」

そんな返答に、夕莉は気に入らないといった感じの顔を浮かべていたが、やがて大人しくメモ用紙を受け取った。四つ折りにされた

それを広げた後、改めて直己の顔を眺める。

「……どうということ？」

その表情には静かな怒りが滲んでいた。

「へ？」

「これ中を読んでから渡しに来た？」

「え、いや……読んでないけど」

あの、先輩？　なんか思いつきり、あちらの逆鱗に触れているような気がするんですが。

夕莉が呆れたように溜息してから、彼女はやれやれとばかりに話し始めた。

「……でも、この人を食った文面は、確かに先輩のものね。何が『暇だからたまには遊びに来てね』だか。こんなもの携帯で送ればいいのに、もう……」

「まあ、そうだな。俺もだいぶ無駄なことに加担したみたいだ……」

「なんとなく分かってたわ。先輩は、そういう人だから」

「そうか……」

頼まれた時からなんとなくそういう気はしていたけれど、改めてそう言われるとがっくりきた。意気消沈している直己を見てか、夕莉がパタリと本を閉じて、ぽんと肩を叩く。

「私語は迷惑になるわ、外に出ましよう。……ちなみに余談みたいだったけど、橘先輩のメモには一応こうも書かれていたわ。『幻想のことを教えてあげなさい』」

「……はあ、それは余談ですか先輩」

まあでも一応、先輩は直己たちの仲を取り持つという役割を果たしたみたいだった。とりあえずはどうにかなったことだし、こういうの結果オーライというのかもしれない。

夕莉がイスから立ち上がり、先ほどまで読んでいた文庫本を受付まで持っていく。どうやら彼女は本を借りるようだった。直己には偶然にも、それが何の本であるかが分かった。それは昔、直己がよく読み聞かせられていた本だったのだ。

夕莉のことを追いかけて、直己も図書室を出る。

「さっき借りたの『不思議の国のアリス』だろう？」

開口一番、直己はそう問いかけてみた。夕莉は驚いた風もなく、ただ返す。

「そうだけど……それがどうかした？」

「いや、別に大したことじゃないんだけどさ、結構読んだ記憶のある本だったんだよ。珍しいなあと思ってね。それ、今日読むのか？」

「……ん、まあ、別になんでもよかったんだけどね」

夕莉は短くそう言っただけで背中を向けた。何とも愛想がない。

かつかつと音のする廊下を歩きながら、直己はただ緩やかに夕莉の背中を追いかけて続ける。やがて、夕莉はようやく口を開いた。

「――執行者^{マード}になってから、どう？」

「どうって言われも困るけど、まあそう変わっちゃいないかな」

「そう」

あまり話しかけている姿を見かけないからか、彼女に質問されるのは新鮮だった。

「何でそんなことを聞くんだ？」

「……別に。ただちよつと気になっただけ」

「そっか」

ウィットに富んでいるとは言えない、ぽつぽつとした言葉を交すだけの会話。

依然として背中を向けて歩き続ける夕莉に、直己はどう話しかければいいものか迷った。しばらく悩んで、せつかくだから幻想のことについてを聞くこうと思い立つ。

「なあ、一つ聞きたいんだけどさ。結局、幻想人って何なんだ？」

廊下を歩いていた夕莉がふいに立ち止まり、直己へと振り返る。「待つて。長話になりそうだし、場所を変えましょう」

夕莉が提示したのは、あの一週間前の時と同じ体育館裏だった。直己にとっては、否応もなくあの時のことが想起される。

直己たちは一旦別れ、帰宅準備をするためにお互い教室へと戻っ

た。カバンを持って昇降口で靴を履き替え、校舎を出る。部活動をしている者たちの騒音が遠くから響いている。

体育館裏に向かうと、すでに夕莉は待ちくたびれた様子だった。

「幻想人とは——」

そう言つて、唐突に解説は始まった。

「幻想人とはその名の通り『ファンタジー幻想世界の住人』のこと。あの日、あなたと私が出会った時、目撃したあの白ウサギもそう。彼らは自らの世界を抜け出して、この世界に生まれ落ちる。この世界にとっては唾棄すべき——害悪」

「害悪ね、よく分からないな」

直己は軽く肩をすくめて返す。まだその意味が良く分からない。

「そうね、一つ分かりやすい例を挙げましょうか」

まるで授業をしている教師の口ぶりで、夕莉はそう切り出してきた。

「この現実ではないどこか、幻想世界とある国を滅ぼすほどに恐ろしいドラゴンがいたとする。そうね、翼を使って空を飛び、口から炎を吐くあの典型的なドラゴンを想像してくれればいいわ。……これは例え話だけど、それが何かの弾みでこの夢見ヶ丘市に現れた時、あなたはどうなると思う？」

「……突飛な話だけど、まあ大体の想像はつくよ」

一般常識で考えれば、これほど荒唐無稽な話もない。だがそんな話でさえも現実と成りうるのが、直己の関わることとなった幻想の世界なのだ。

ドラゴンが現れた日には、この町はどうなることが。

「彼らが害悪なのは、そういうこと。この現実では想像もできない力——超常的な能力を持っている幻想人に比べ、この世界はとても弱い。この現実を守る存在が必要な」

「それが俺たちだつていうのか」

「そう、私たちのように幻想を狩る者……マター執行者」

直己がぼんと自らの手を打って納得する。夕莉はようやく教え子

が正解答へと辿り着いた時のような、大きな頷きを返した。

……まったく、本当に碌でもないことに巻き込まれたものだ。

「疑問は解けた？　なら、今日はここで終わり」

颯爽と去っていきこうとする夕莉を、直己は呼び止めた。

「待ってくれ、あと一つ」

「……まだ何か？」

振り返って見返してくる夕莉は、またか、と言いたげなほど面倒臭そうだった。直己は頬の辺りを掻きながら、少し言いづらそうに続けた。

「あのさ、連絡を交換して欲しいんだ。橘先輩も言ってたけどさ、俺たちは連携行動が多いんだろう？　だからさ、やっぱり俺たちは常に連絡を取れる状況にしないと」

「……まあ、確かにそうね」

そう言いながらも、どこか冷たく感じられるのはなぜだろう。

「あのさ、そもそも、千坂さんは俺の名前とか覚えてる？　もう仲間なんだしさ、先輩後輩はあれどしっかり名前前で呼ぶべきだと思うんだ。……ああ、もしかして覚えてないとか？」

直己は冗談めかして言っただつもりだったが、夕莉は目に見えるほどむっつりとした表情になった。だがいつもと違って、なぜかそんな仕草が妙に子供っぽく見えた。

夕莉が自らの懐を探り、携帯電話を取り出す。

「……はい」

ぶっきらぼうな声とともに渡されたのは、女の子にしては飾り気のない携帯だった。これを差し出してきたということは、察するに連絡先の交換を了承したということか。

直己はにやりと笑ってみせた。

「正直者だな」

「……うるさい、さっさとしなさい」

それにぶいと視線を逸らした夕莉が、不機嫌そうにつま先で地を叩く。そんな彼女を見て、直己はいつになく微笑ましげな気持ちに

なるのを感じた。

だから宥めるような微笑を貼り付けて、こう告げる。

「はいはい、すぐ終わりますよ。手間をかけてすみませんね——お姫様」

Chapter 1 - 01 : アリスの庭

十

焚き火で突っ込んだ薪がぱちと爆ぜる。まともな物音がない”庭”では、そんな他愛のない音でさえも強調されて響いていた。ここで聞こえてくる音は、木の葉の擦れる音、動物の鳴き声、その他大自然に溶け込んだ音ばかりなのだ。

そんな中、橘美鈴は切り株に座り、無言のまま焚き火を見つめていた。まるで火の中に映る何かを捜し求めるように。その姿は、傍目から見ると時間が静止しているようにしか見えない。

「……アナタも暇人ですね、美鈴」

薄暗い森の中から、ふと呆れきったような声がかけられる。それにこれまで沈黙を保っていた美鈴が顔を上げた。

「アリス」

この一帯に存在する”庭”の森、その草むらを掻き分けて現れたのはロリータファッションに身を包んだ少女だった。伸ばされた金髪のとっぺんには、印象的な水色のリボンが結わえられており、それら全てが辺りのメルヘンな雰囲気と調和している。まるで童話『不思議の国のアリス』に登場するキャラクターのようである。

否、この少女こそアリスそのもの——幻想人だった。

「美鈴、勉強でもしたらどうですか。アナタは仮にも受験生では？」

「う、痛いところ突いてくるなあ」

美鈴があからさまに鬱陶しそうな顔をしてみせる。

「まったく……ワタシは美鈴の保護者ではないのですよ」

「アリスみたいな子供に言われても説得力がないわ」

「まあ、ワタシは子供と言っても幻想人ですけどね。ワタシと、アナタの言う子供というものはずいぶんと乖離しています」

外見の割に大人びているアリスが、小さな歩幅で歩いてきては、ちょこんと切り株の椅子に座り込む。その足が地面に届ききつていないのは、アリスがまだ十歳の子供の姿だからである。ぶらぶらと足を揺らしながら、アリスは年相応に唇を尖らせていた。

しかし、美鈴はそんなアリスを見ても、どこ吹く風といった態度のままである。

「でも、子供には違いなわけじゃん？」

「……美鈴も言うようになりましたね」

あ、ちなみに全然褒めてませんからね？　そう今にも齒軋りしそうな表情で呟いたアリスに、美鈴ののんきな笑顔が固まった。一転して大げさに怯える仕草をしてみせる。

「アリスをいじるのもこちら辺にしよう。……怖いし」

「あら、ワタシはマジメな人には優しいですよ」

「つまり、あたしは真面目じゃないということか。いや一本取られたね」

「察しがいい人も好きですよ」

アリスがそっぽを向いてぞんざいな口ぶりで言つと、ふいに美鈴がぷつと吹き出した。それから顔を見合わせ、互にくつくつと笑い始める。

そんなやり取りをしている間にも、この“庭”を包み込む暗闇はより深いものへと変わっていた。ここは現実世界と時間がシンクロしているため、辺りの風景も時間相応のものとなるのだ。そんな森をさらりと見回してから、美鈴はぼろりと漏らす。

「ねえ、アリス。彼らは上手くやってくれると思う？」

しかし、その問いかけにアリスは肯定的な顔をしない。

「正直、ワタシは不安です」

「そっか。まあそう言われても否定はできないね、あたしは信じてるけど。ただ問題があるとすれば、やっぱり彼女かなあ。厳しいし、頑固だし、構ってくれないし、何より素直じゃないし……」

「ちゃっかりアナタの本音も混じってますね」

ぶちぶちと夕莉の欠点をあげつらう美鈴が、自らの言葉を思い出して苦笑する。だがそんな美鈴に対して、アリスはただじつと何かを思案しているだけだった。

「……本当に組ませるつもりなのですか？」

「もちろん。最高のコンビになるわよ」

豪語してみせる美鈴に、アリスの険が強くなる。

「不安要素が多すぎませんか？」

「それは認めるわ。でも、結果的にそうするしかないのよね。あたしが前に出ると現場指揮官がいなくなるわけだし、初心者だろうが何だろうが前衛がいけないのは困るわ。……ま、そもそも欠員が出なきゃ問題なかったんだけどね」

やれやれとばかりに美鈴が肩をすくめてみせる。それでもアリスの厳しい表情は変わらなかったが、やがて何かの糸が切れたように溜息が返ってきた。

「……いない人のことを考えても仕方ないですね」

「このタイミングで出現しても意味ないもんね。来れないんじゃない？」

「予感ですか？」

肩を落としていたアリスがついと顔を上げて、そう問い返す。

「そ。しばらくの間来ないとね、唐突に来る予感がしてならないのよ」

そう言っただけでまた焚き火へと薪を投げ込む美鈴。自らの足をぶらつかせ、そんな美鈴を眺めるアリスはふと難しい顔をしてから、ゆっくりと噛み締めるように言葉を吐き出した。

「——幻想人、ですか」

十

その日、夢見ヶ丘市に幻想人が生み落ちたのは、美鈴の予感が当たったというわけではなく、単なる偶然に過ぎなかった。

日付の変わりかけた深夜。夢見ヶ丘市の北西にある住宅街にて、

それらは人知れずこの世界に降り立った。それを唯一観測していたのは、“庭”^{ガーデン}から常に町を監視しているアリスだけである。彼女は幻想人が現界したのを確認すると、すぐさま美鈴へと連絡した。それを受けた美鈴がさらに執行者たち各員へと伝達、まどろみの真夜中に緊急招集がかかる。

日付が変わり、土曜日となった午前零時。

その“庭”^{ガーデン}に集まったのは、直己、夕莉、美鈴、アリスの四名だけだった。

昼間は穏やかなだった森も、この時間帯とあつては不気味な森へと変貌していた。

午前零時。この”庭”へと足を踏み入れた直己は、いつもと違う雰囲気になんか戸惑っていた。いつもなら顔を見せないここに、今は四人もの幻想関係者が顔を並べている。

「これで皆さん集まったようですね、では作戦会議を始めましょう」
焚き火を囲んでいる切り株には、すでに直己以外の全員が座っていた。

「ちょうど日付が変わる前、夢見ヶ丘市の北西住宅街に幻想人の気配が出現するのを観測いたしました。最近にしては大物です。あなた方に連絡を差し上げたのは、幻想に関わる事案ということに他なりません。これが、今回招集をかけた理由です」

丁重な言葉で解説するのは、直己が執行者となつて以来、久々に目にするアリスだった。にわかに信じがたいことだが、あの白ウサギと同様に彼女も幻想人なのだという。先輩によると普段は”庭”の森の中で過ごし、よほどのことがなければ出て来ないのだという。
「つまり幻想人が襲来したってわけだよ、君たち」

そう横から口を挟んできたのは、まさにその橘先輩だった。さすがの先輩も、この緊急事態とあつてはいつもの軽い調子に翳りが見える。

「アリス、敵の情報を提示してください」

アリスの話を一心に聞いていた夕莉が、真剣な眼差しのままそう切り込む。こんな真夜中に招集されたというのに、いつもと全く変わらぬ雰囲気なのは、さすがと言うしかない。

気迫ある夕莉の言葉に、アリスが微苦笑を浮かべていた。

「せっかちですね、夕莉……まあいいでしょう。今回、幻想人を観測した際にワタシの《異次元^{ワイジョン}を観測する瞳》で観測した固有能力は二つです。《純然たる白きツノ^{アリコン}》、もう一つは《憤怒^{ラスト・リミット}を殺す者》。」「ああら、敵の固有能力は二つかあ。久々に来たと思ったたらこれだよ。やっぱり、予感つてのもあながち馬鹿にはできないよ」

「嫌な予感ですね、まったく」

呆れたような溜息を吐くアリスに、夕莉が問いかける。

「……ということは、幻想人は多数能力持ちということ？」

「いえ、そういうわけではなさそうですよ、夕莉。どうもワタシが観測した時の感じだと、多数の能力を持っているというよりは、幻想人が多数現れたとした方が自然そうです」

「なるほど、幻想人が同時に現界したってわけか。こりゃ驚きだ」
額を押さえて大げさに嘆いてみせる先輩だった。

「……これから、何が始まるんだ？」

これまた事情を理解できないため、場の空気を読むことに終始していた直己だったが、今回もまた置いてけぼりを食らってしまった。力ない拳手をして問いを投げしてみると、真っ先に返って来たのは夕莉の溜息だ。

「アリスが言ってるじゃないの。……仕事よ」

「まあまあ、直己くんは初めてなんだからさ……ちょっとは優しく対応したげなさい」

宥めるような曖昧な笑みを浮かべてくれたのは先輩だった。いつもはいい加減だが、こういう時の気遣いは純粹にありがたい。

「……了解」

夕莉は本当に了解しているのか疑わしいほど、感情をひた隠しにして返してきた。放課後に話しかけた時は、もうちょつと愛嬌があると思っていたのだが、どうやらまだ完全に打ち解けたわけではなかったらしい。

……まったく、前途多難だな。

その時、こほんこほん、とアリスのわざとらしい咳払いが集会所に響いた。その場にいる直己を含む執行者^{メンバー}たちは、すぐさまアリスへと視線を戻す。

「事態は緊急を要します、不明な点があれば後にまとめて必要最低限で教えますので、今は解説は省きましょう。…… よろしいですね、直己？」

「あ、ああ……」

さすがに確認まで取られてしまえば、直己も話題を蒸し返すこともできない。わざわざ招集されたはずなのに扱いが酷いのは気のせいだろうか。

夕莉がふんと鼻を鳴らして直己を嘲笑い、それから新たに話題を提供する。

「アリス、解決方法は」

「無論、殲滅ですよ。ワタシたちにそれ以外の何がありますか？」

アリスは見とれてしまいそうなほど小さな唇をニツと釣り上げる。アリス、お前だって幻想人じゃないか——傍らで聞いていた直己は咄嗟にそう思ったが、あえて口には出さなかった。

「いつも通りってわけか、実にシンプルだね」

先輩が今にも口笛を吹きそうなほど快活な笑みを浮かべてみせる。アリスが何かを思い出したように、あ、と口を開けた。

「それはそうと、作戦の決行は現場指揮官の指示ですよ、美鈴」

「あ、そうだった。……じゃ、あたしが話題を引き継ごう。作戦決行はあたしが敵を発見してからだ。こっちに連絡をしてあげるから、そしたら直己ちゃんと夕莉ちゃんに斥候をしてもらおう。まずはしっかりと敵の力量を見ないとね」

初陣にも関わらず斥候役に選ばれてしまうと、いよいよ直己も戸惑いを隠すことができなくなってきた。

……え、本当にそれで行くのかよ。

「あ、あの……」

「じゃあ、作戦決行までは休息。実働班である君たちは”庭”^{ガーデン}から

出ないこと。携帯をいつでも取れるような状態にしておいてね。個々の休息に関しては口を出さないから、時間が来るまで各自ゆっくりして欲しい。それじゃ、解散」

直己の発言など、誰も聞いてはいなかった。

先輩がパンと手を打った音を合図に、アリスや夕莉が切り株からすつくと立ち上がり、各自の行動に移り始める。その一方で、これまでほとんど相手にされていなかった直己は、何がなんだか分からぬまま、目を瞬かせることしかできない。

「あ、あの、先輩……？」

「うん？」

準備段階に入ってから、ようやく先輩は直己の存在を思い出しらしい。しまった、というような困り顔が見て取れた。

「誰が俺に解説してくれるんですか……？」

「……う。そ、そういうばそうだったね。って言っても、さっき言った通り、あたしにも用事があるから手短になっちゃうと思うけど」

「この際、それでもいいです……」

なんだか申し訳ない気持ちになりながら、直己は解説を乞うことにした。

「まあ要するに、幻想人が現れて、あたしたちの仕事が始まったってわけなんだけどね。君は夕莉ちゃんと一緒に斥候役」

「マ、マジで斥候役ですか……？」

それが冗談であればと思ったのだが、先輩は平然とした顔でうんと頷くだけだ。

斥候といえば、戦いにおいて最前衛に配置される仕事のことだ。敵情偵察による仕事、また場合によっては攻撃役も引き受けることがある。戦闘行動で最も危険な仕事の一つである。

「いやあの、俺は……大丈夫ですかね……」

「大丈夫だって。忘れたかい、君には幻想武器があるだろう。これまでの一週間、あたしと直己くんが模擬戦闘してた時に握ってたアレさ。幻想武器はさ、あたしたちが幻想人に対抗することのできる

唯一の武器なんだよ。あれが使えるなら、どうにかなるさ」

のんきにもそんなことを言っ、先輩は直己の肩をぼんと叩く。それからふいに背を向けると、すぐさま出撃準備をするために”庭”から出て行くとする。

「……先輩、はつきり言っ、いいですか？ 俺、そんな役は無理です」

「ははは、君は正直者だね」

「いや、そんな冗談みたいなことじゃなくてすね……」

背中越しに返っ、きた笑い声に、直己は眉間の辺りを押さえながらどうすれば的確に伝わるのかと悩む。頭が痛くなりそうだった。

「いや、ごめんごめん。そっ、そうだよ……君としては重要なことか。まあ本当のことを言っ、いつも偵察役を引き受けてくれる人が事情で来れないんだ。だから、あたしが偵察役するしかない。でも、そうなると必然的に前衛がいないわけだよ。仕方ないじゃない？ ま、分かんないことは夕莉ちゃんに聞いてよ。メインの仕事は彼女がやってくれるだろうから、君は別に付いていくだけでもいい」

「そ、そうは言ってもすね……俺はあいつと」

上手くやっ、いく自信がないんです、と言っ掛けたのだが――

ふと橘先輩は仕方なさそうな表情をして、直己の方を振り返った。それから一歩、二歩と直己の方へと近付いて、ぐいと覗き込むように顔を寄せてくる。

「うっ、大丈夫だっ。彼女は頼りになるからさ。あたしが保障する。だからさ、君も夕莉ちゃんのことを信用してあげて欲しいんだ」

「は、はあ……」

いつもなら曖昧に誤魔化そうとするはずなのに、こういう時に限っ、先輩の表情は大真面目だった。有無を言わせぬ瞳で、じつと直己の瞳を見返してくる。そして、そんな目で見つめられると魔法でもかけられたかのように、逃げるこ、できなくなっ、してしまうのだ。

「あたしは君のこと信じてるよ？」

直己が狼狽しきつたのを見て取ったのか、先輩が顔を離し、くすりと笑った。

「ま、元気で待ってなよ、直己くん」

じゃあね。先輩は去り際に背中越しで手を振り、颯爽と”庭”から出て行ってしまった。

ただ一人だけ集会所に残された直己は、ぼすんと切り株に腰を下ろし、自らの手を見下ろした。そこに生まれると念じると、骨組みばかりの幻想武器《S09 Imagine^{イマジン}》が姿を現す。

見栄えのしない、ただどこまで行っても垢抜けない幻想武器。

果たして、本当にこれで——戦えるだろうか。

力なく吐いた直己の溜息は、誰に聞かれるまでもなく森の中へと消えていった。

+

次元のトンネルを抜けた時、そこは異世界だった。

ここはどこだ、とイルマは辺りを見回して思った。辺りには見たこともないような建造物が、密集するようにして建ち並んでいる。これはこの世界の住居だろうか？ 人通りのない真夜中の道路を闊歩しながら、そんなことを考える。石と木とレンガで造られた家しか見たことのない彼には、ここは別世界だった。

「ここはどこなのでしょう、イルマ」

寄り添うにして歩く女性も、しきりに辺りを見回しながらそんな声を上げていた。イルマは女性を怯えさせないように、出来るだけ落ち着いた声でこう告げた。

「分からぬが、とりあえず危機は去ったらしいな。少し探索するか」

「え、ええ……分かりました」

今まさにこの世界へと降り立ったばかりの彼らには知る由もなかったが、そこは夢見ヶ丘市の北西部にある住宅街の辺りだった。近くには宇佐川^{うさがわ}という川があり、そこを越えるとすでに隣町である。

辛うじて電灯が設置されているような人通りのない道を、奇妙な風貌をした二人組が歩いていく。片や、襷褌のような服をまとった乙女。そして、もう一方——イルマと呼ばれているのは、驚くことに人語を解すことのできる白馬だった。否、その頭部にある優美な角^{モノケロス}からして、一角獣と表現するのが妥当かもしれない。

ともかく、深夜ということもあり、彼らは奇跡的にも人目には触れられていなかった。

「しかし、この世界は不思議ですね」

様々な生地をつぎはぎで縫ってある、お世辞にもオシャレとは言

えない服をまとった乙女が、ふいにそんなことを漏らした。

「ああ、とても不思議なものだな、エレーヌ。ワタシたちのいた世界からは考えられぬ」

「木々のさざめく音も、動物の気配も、虫の声すら聞こえて来ません。本当にここはどこなのでしょう……」

エレーヌと呼ばれた女性が、きよろきよろと見慣れぬ世界を観察する。揺れる亜麻色の髪は、それだけで彼女が異国の者だということとを証明している。

イルマが硬いコンクリートで蹄を鳴らしながら、冷静に返答した。
「それも分からぬな、せめてここはどのような世界なのかだけでも知りたいものだ」

「そうね……できれば、私たちの住みやすい世界であればいいのですが」

互いにそんな希望的観測を口にしながらも、彼らは宇佐川の方へと向かって歩き続けていた。

しばらく川の方へと足を進めると、この辺りにしては交通量のある道路が見えてくる。電灯に照らされた夜道を走り抜けていく何か——それをまじまじと見つめ、エレーヌはその戸惑いに満ちた瞳を、驚愕へと変える。

「ねえ、イルマ。あれって何でしょうか？」

「驚いたな。目を疑ってしまった、あれは……何だろうか」

彼らが目にしたのは車だった。燃料を使って動くそれは、彼らの住んでいた世界にはとてなかつた代物だろう。しかも、それが絶え間なく道路を通り抜けていくとなれば、彼らの驚嘆ぶりもおかしくはない。

しかし、エレーヌは一瞬こそ目を丸くしたものの、それを運転しているのが人間だと分かった途端、先ほどまでの驚きを興奮へと変えていた。

「すごい、こんなものまであるのね……！」

しかし、そんなエレーヌとは対照的に、イルマの反応はどこか暗

かった。

「……本当にここはどこなのだろうな」

ある程度の交通量がある道路となれば、そこには当然のように人間たちの娯楽施設も点在している。そんなネオンに照らされた町を眺め、イルマの吐息は半分ほど溜息に近い。

この世界にやってくるまで、イルマは大自然に囲まれた山の中で生活していた。そこはこれほど賑やかな場所ではなかったが、朝は朝、夜は夜という潔い生活だった。決して、こんな人工的な光を撒き散らしてはいなかった。

「しかし、ここは五月蠅い世界だな」

「そうね。わたしたちがいたところは、夜はもつと静かでしたものね」

そうは言っていたが、エレーヌの町を見つめる視線には熱が籠っていた。早くもエレーヌはこの世界に興味を抱いているようだ。

「……我はあまり煌びやかなところを好まぬ。悪いが引き返すぞ、エレーヌ」

異様な光景を目の当たりにして、すぐさま背を向け引き返していくイルマに対し——エレーヌはどこか名残惜しそうに町を眺めていた。が、イルマが歩を進めてゆくにつれ、彼女もぱたぱたと早足で追いかけていく。

ちようどイルマと並ぶ位置まで来て、エレーヌは純粋な疑問を持つて彼に問いかけた。

「でも、行くあてはあるのですか？」

「先ほど、ここまで来る途中に自然公園というものを見かけたよ。この真夜中だったら誰もいないのではないか？ とりあえず、今晩はそこで休むとしよう」

「自然公園」

エレーヌがぼかんとした表情で、イルマの言葉をなぞる。

それから彼らが足を進めることとなったのは、辺りの住宅街から程近い場所にある夢見ヶ丘自然公園だった。今や貴重となりつつあ

る自然が残されているそこは、この閑静な住宅街の中でも、ひときわ静かな場所である。

夢見ヶ丘自然公園の門をくぐり、彼らはあまり人気のない木々の合間へと逃げ込んでいった。草むらにぺたりと座り込むエレーヌの横で、イルマも四足を折って地面に巨体を下ろす。

エレーヌがまじまじとイルマの面構えを眺めて、ふいにこんなことを言った。

「そういえば忘れていましたけど、イルマ、右目の調子は……」

「大丈夫だ、些細なものだと言っただろう。人間と同じではないのだからすぐに治る」

この世界に来る以前、イルマは人間たちの手によって右目に傷を負わされた。エレーヌは単純にそのことを心配しているのだ。

「私のせい、ですから」

「そんなことはない。それよりも、我はこれからエレーヌがどうするのかが一番不安だ。我はこれまでも一人で生きていた。孤独には慣れている。だが、果たしてエレーヌはこれからどうやってこの世界で生きていくのか。悩みは尽きないぞ」

「それこそ心配無用ではありませんか」

本気で先行きが不安なイルマであつたが、しかしそれに対するエレーヌは優しげに微笑んでみせるだけだった。

「約束したはずです。私たちは、いつまでも一緒です」

「……そう、だったな」

そう呟いたイルマは、少しだけ目を伏せる。

それはイルマにしてみれば、天恵にも等しい言葉だった。だがそれ故に、エレーヌにとって重大な決断をさせているということも、拭いようのない事実だった。だから、イルマは純粹に嬉しがることできない。彼は彼女の人生を狂わせてしまったのだから――

「我は……」

贖罪を言葉にしようとしたその時、イルマはふと辺りに満ちた奇妙な気配を感じ取った。

すぐさま体を起き上がらせ、辺りに蔓延っている暗闇へと視線を向ける。エレーヌがどうしたのと疑問の声を投げたが、それにまともにも返答することもできなかった。

「エレーヌ、すぐにでも逃げられる準備をしておくのだ」

「ど、どうしたっていいんですか……」

「同じ、だよ。前の世界と何も変わってはいなかったということだ。辺りから殺気を感じる、何者かが付け狙っている」

威嚇するような唸り声を上げようとするイルマに対し、エレーヌは顔を真つ青にして言葉も出ない様子だった。

「——よく、気付いたわね。褒めてあげる」

その時、ふいに辺りを包み込む暗闇の中からゆらりと現れたのは、まだ大人と呼ぶには若すぎる少女だった。手にしているのは細身のレイピア。立ち振る舞いから発せされる殺気が、その場の体感温度を一気に下げていく。

「貴様……何者だ！」

敵意を剥き出しにしたイルマの誰何。

それに殺気を纏った少女——千坂夕莉が酷薄な笑みで、答えた。

「私はあなたたちの命を刈りに来た死神。それ以外に何があるって
いのの？」

+

夢見ヶ丘自然公園の茂み。そこから直己は、目の前で行われている緊迫に満ちたやり取りをつぶさに見て取った。どうやら夕莉は幻想人に接触したらしい。

手元で通話状態になっている携帯を顔に寄せ、ぼそぼそと呟く。

「先輩、夕莉が接触したみたいです。これから作戦に移ります」

『了解。セッティングは上々だ。あたしは遠方から状況を俯瞰している。では、作戦開始』

携帯電話から返ってきた言葉を合図に、直己はおもむろに通話を切った。目前では夕莉と白馬に角がある動物——一角獣が、何やら一触即発の気配で会話を繰り返している。目が離せなかった。だから、直己は意識は否応もなく、そちらの方へと引き寄せられていった。

「小娘、名は何という」

一角獣が厳粛な声で問いかける。対して、夕莉は不敵な笑みのままだ。

「千坂夕莉。そういうあなたの名前は何て言うのかしら」

「名などない、好きに呼べ」

ふうん、と興味なさそうに夕莉は辺りに視線を彷徨わせ、ふと近くにいる女性を見た。直己にも対象が確認できる。亜麻色の髪をした女性がいるが、あれは……幻想人なのだろうか？

「イルマ、とそこの女が言っていたように聞こえたけど」

「……その名を貴様が口にするには許していない」

「そりゃ、お堅いことで」

夕莉が肩をすくめてみせる。だが、どこかで揺るがぬ殺意を纏っ

たままの彼女は、直己から見ても本当に死神のようだった。

イルマと呼ばれた一角獣が、ふと軽く目を伏せる。

「しかし、我々の命を狙う者が……やはり、こちらの世界にもいるものだな」

感慨深そうに呟いた言葉だったが、その端々からは自嘲のような響きがあった。未だに直己にはただの動物にしか見えないが——やはり、どこか違う。何よりもこの世界の言語、それも日本語をあれだけ話せる動物など、直己は見ただこともない。

……やっぱり、あれは幻想人なんだろうな。

「当然ね。何から逃げてこの世界に辿りついたかは知らないけれど、そんなこと私には知ったことじゃないの。なぜなら、私が望むのはあなたたちの殲滅。ただそれだけだもの」

「ほう。ならば、貴様の望みどおり戦うか？」

イルマは歯を剥き出しにして敵意を表明していた。

「上等」

夕莉はゆつくりと自らの幻想武器を持ち上げると、まるで付着した水滴を払うかのように、《S27 Riddy》^{リディ}を虚空で振るってみせた。空を切る音と共に、夕莉がにやりと笑う。

——それが戦いの幕開けを告げていた。

その時、ふいに夕莉の握っているリディが強い光を放った。それと同時に、彼女の足元から茨のようなものが複数生えてくる。否、それは彼女の足元だけでは留まっていなかった。辺りの地面から一斉に出現した茨は、まるで生きているかのように戦場を取り囲んだのだ——

不可解極まりないその現象は、幻想武器に秘められた能力を解き放った証だった。

知識では知っていたが、直己も目にしたのは初めてだった。幻想武器とは、ただの武器だけには留まらない。武器としての最低限の機能を持ちながらも、また別個として特殊な力を有しているのである。

そして、夕莉にとってのそれは——”茨”だった。

「大人しくその命を寄越せ、幻想人！」

夕莉が吠えた。先手必勝とばかりに地を蹴り、優美な装飾に彩られたリディを握ったまま一気に肉薄する。だが、彼女が眼前に見据える幻想人たちは、夕莉のことを見返せど、まだ動こうとはしていなかった。

「御免被るな。ならば、我々も生きるために戦わせて貰うぞ」

「それでいい。戦いなさい、それこそが私たちの宿命に相応しいッ！」

揺るがぬ殺意を纏ったまま、夕莉は上空から身を躍らせてリディを突き出した。まるで鬼の宿るような一突き。だが、それはイルマが直前のところで跳躍したため、命を奪うには至らない。

イルマが程近い位置に着地して、冷静に返す。

「やはり、人間というものは醜いな。自らの欲望が滲み出ているぞ、小娘」

「言ってなさい！」

夕莉がギラリと瞳の色を変えた。峻烈な一突きが目標を変えて、今度は近くにいた亜麻色の髪の女性へと放たれる。狙うは喉元。そこを切り裂く一撃——

もはや直己は戦いを直視することもできず、目をつむった。

——嫌だ。俺は……。

薄々感じてはいたし、覚悟もしていたはずだった。だが改めて目の前に事実を突きつけられた時、直己は瞬時に状況を受け入れることができなかった。

ここは紛れもなく戦場だった。どちらかが死に絶えるまで、終わらぬ戦場。

ガキイツ、と鋭い刃鳴りが響いた。直己が再び目を開いた時、一角獣はその頭から伸びた角によって、夕莉のレイピアを弾き返していた。間一髪で生命の危機を逃れた女性が、引き攣った声を上げる。それが悲鳴にすらなっていない。

「エレーヌ、逃げるのだ。今すぐ安全な場所に！」

エレーヌと呼ばれた女性が、こくりと頷きを返した。すぐさま逃げの体勢に入った彼女が、辺りに張り巡らされた茨を引き千切ろうとする。手を血まみれにしながらも、彼女はそこから逃げ延びようと必死であつた。

「やらせはしないわ」

「それはこちらの台詞だ」

再度、夕莉はエレーヌへと向けて突きを放った。だが、それは先ほどと同じように一角獣によって防がれる。軋るような音を立てて擦れたそれは、まさに金属の絶叫だ。

しかし、単純な力比べでは劣ると確信したのだろう。夕莉がリディを引き、先ほどとは逆に手数によって追い立てようとする。突き出されたレイピアと角が交錯を果たす。次、また次と、彼らはあつという間に五合ほどを切り結ぶ。

「どうした、大口を叩く割には存外と攻めが甘い」

「く……」

手数を重視する戦法に切り替えた夕莉だったが、それに対応してきたイルマの方が一枚上手だった。雨のように突き出される刃を受けてもなお、イルマはそれを華麗に弾き、時に回避すらしている。

「ならば、それでも食らっている」

これまで受け身だったイルマが、ふいに角によって前方を薙ぎ払う。それ自体は何の変哲もない攻撃。しかし、それを夕莉が反射的に受け止めた瞬間、イルマの角がカツと光り輝いた。そう、まるで先ほど夕莉が幻想の能力を解き放った時のように——である。

一撃を受け止めた夕莉が体が、浮く。

次の瞬間、イルマの角から発せられたのは、これまでこの場の誰もが感じたことのないような力の波動だった。これまでと何らか変わらない一撃、そのはずだというのに、防御したはずの夕莉が防御ごと持っていかれた。

「がっ——！！？」

角を受け止めた時の衝撃により、夕莉は十数メートルほど後方で吹き飛ばされていた。自然公園の樹木に背中から叩きつけられ、ずるりと地に墜ちる。

「な……夕っ……」

茂みから様子を伺っていた直己も、さすがに驚愕を押さえることができなかった。だが吐き出しかけた声を胸中へと引き戻し、直己はすぐさま携帯電話を取り出そうとする。

マ、マズい。先輩に連絡しないと、夕莉が殺される……！

そんな焦りの中で、直己はこれまで戦おうとしていた相手が、あれほど強大な存在だったことに恐怖を感じずにはいらなかった。あれが……幻想人。ほとんど動転しかけた状況でも、その恐ろしさだけは身に染みて実感した。

ようやく携帯電話を探し当て、通話ボタンを押そうとする。だがその時、直己は茂みの方へと急接近してくる足音には気付いていなかった。

ふいに真横から衝撃、それに直己は突き飛ばされた。

「うわっ！」

「きゃあっ」

予期せぬ衝撃によって、携帯電話を草むらに落としてしまう。

いてて、と直己が体勢を立て直した時、その正面にいたのは先ほど夕莉たちの下にいた——あの亚麻色の髪をした、エレーヌと呼ばれていた女性だった。どうやら直己が目を離れた隙に、あの場から逃げ出すことに成功していたらしい。

「あの、もしかして、君はさっきそこにいた……」

直己が口をぱくぱくとさせながら指摘すると、同じく顔を付き合わせることになった彼女も真っ青な顔になっていく。

「あなた、もしかしてあの人の仲間……？」

ひ、と引き攣った声を上げた女性だったが、それは直己にとっても同じ心境だった。何せ目前にいるのは幻想人だ。先ほど夕莉を吹き飛ばしたように、彼女も何らかの力を持っていても不思議で

はない。あれを目撃してしまった直己にしてみれば、この状況で動揺するなという方が無理がある。

どうすれば——と、直己の頭が混乱しかけた時。

ふいに場違いな電子音が鳴り響く。それは草むらに落ちた携帯電話のものだった。直己の意識がそちらへと引き寄せられた瞬間、急にエレーヌが立ち上がった。

「さ、さよなら！」

あっ、と注意が逸れた瞬間を突いて、エレーヌが全力で走り去っていく。それに意表を突かれた直己は、終始呆然としたまま、その背中を見送ることしかできなかった。

やがて何度目かのコールが鳴り、ようやく携帯電話のことを思い出す。

「た、橘先輩ですよね？」

『……慌てるな、分かっているさ。全て遠くから状況は見ていた。今の状況は芳しくない、撤退だ。それを夕莉ちゃんにも伝えて欲しい。結集地点は予定通りのポイントだ、あたしから伝えるべきことは以上』

先輩が発言を終えた時には、すでに直己は夕莉の方へと向けて声を張り上げていた。

静寂に包まれた自然公園に、直己の声が響き渡る。

「夕莉、撤退だ！」

「ぬ！？」

真っ先に反応を返したのは、今まさに夕莉へと歩み寄ろうとしていたイルマだった。

それにわずかに遅れ、夕莉が木の幹に体重を預けながらも立ち上がる。利き腕を押さえながら直己へと視線を送り、こくりと頷いた。それが了解したという合図なのは明白だった。

それから、夕莉の視線がゆっくりとイルマの方へと向かう。

「……ようやく、特定した。やっと見せてくれたわね、それが、あなたを幻想人たらしめる能力——《純然たる白きツノ（アリコーン）

《というわけか》

唇の端を持ち上げて、陰惨そうに嗤ってみせる。

「待て。逃げる気か、貴様……」

屈辱そうに吐き捨てるイルマを尻目に、夕莉は戦闘圏から離脱するため、すぐさま暗闇の中へと身を躍らせた。それに追いかける素振りを見せたイルマであったが、敵が彼女だけではないということに思い直したのか、一切の動きを止める。

「安心しなさい。近いうちにまた会える」

別れ際、夕莉は戦いに挑む前と同じような、余裕に満ちた笑みを浮かべていた。その笑みのまま、彼女はゆっくりと口元を動かして宣言する。

「それまでの、一時のお別れよ。幻想人」

そして、夢見ヶ丘自然公園で行われた戦闘は一旦だが——幕を引くことになるのだった。

人間はいつから物欲にまみれた生物になってしまったのだろうか——と、イルマは今でも考えずにはられない。

かつては人間たちも清い生活を送っていた。森に入っては、その日暮らすための食料と資源を持ち帰る。それは彼らが生活するための必要最低限の労働であった。

そんな自然と共存する生活が、自然崇拜という宗教を作り、文化を作り、生活の規則を作っていた。その点において、イルマは人間という生物を尊敬していた。なぜなら、彼のような人外ではそんな豊かさなど思いつかなかっただろうし、生み出すことなど到底できなかっただろうから——

人間は自然と共存して生きている。

それが長年培われてきたルールであり、また真理であった。

しかし、そんな当たり前のことが覆されるようになったのは、人間たちがより大きな生活圏を持ち、自分たちのためだけの規則を作り上げてからだった。

その時代、一角獣の角はあらゆる病気を治すものだと思われていた。だから、物欲にまみれた人間たちはこぞつて、これまで踏み入ることのなかった森へと赴き、イルマたち一角獣のことを追い求めた。商人から冒険者、やがて王に献上するため、その国の兵士たちまでもが風潰しに森を荒らし回り、昔からあった森の平穏を壊していった。

これまで自然と共存してきたという考え方は、微塵も残されていなかった。

人間という生物は、なんて身勝手な連中だ。その時のことを思い

出すと、今でもイルマには腸が煮えくり返るような怒りが込み上げてくる。

ああ、人間というのはどこまで醜い生物なのだろう――
あの時の強烈な”憤怒”は、今も自らの内にある。

清涼とした夜風が吹いていた。イルマは夢見ヶ丘市と隣町との境界になつてゐる宇佐川の河川敷、そこで目を覚ました。まだ日付は変わったばかりの未明だから、辺りには人影も全く見当たらない。わずかに首を動かして様子を伺うと、そこにはイルマにとっての見慣れた女性が佇んでいる。

「目が覚めたの？ イルマ」

思えば、あれから彼女はずっとイルマの傍にいた。以前の世界で出会った時から、ずっとイルマと共にいた。それだけに彼にとっての彼女という存在は、もはや切り捨てることのできない大切なものだった。これだけは手放せない。

「我は寝ていたのか。……まったく、一夜の見張りすらできんなな」

「疲れていたのでしょう？ 仕方ないことですよ」

数時間前に謎の者たちに襲われてから、イルマとエレーヌは夢見ヶ丘自然公園を逃れ、ここ宇佐川へと移動していた。また彼らが襲撃して来ないとも限らないので、ずっと一箇所に身を潜めるのは危険だと考えたからだった。

「先ほどまで、夢を見ていたよ」

ふいに通り抜けた風が、さわさわと辺りの青草を揺らしていた。他愛ない口ぶりで言ったイルマのことを眺め、エレーヌは持ち前の優しい微笑みを見せる。

「夢、ですか……？」

「以前の世界にいた時の夢だった。山に囲まれ、自然に満ち溢れた土地。森の木々を通り抜けていくそよ風、透き通るような小川、春には草花の咲き誇る草原があつたな。我はそこを駆けていて、その

場には他の誰もいない。物欲に満ちた人間どもは見当たりもせず、皆、自然と共存している。そんな美しい世界だった」

だが、とイルマは呟いて、星のない夜空をふと見上げた。

「だが、あれは全て——夢だったのだな」

自然に満ち溢れた土地も、森の木々を通り抜けていくそよ風も、透き通るような小川も、草花の咲き誇る草原も。もう全ては消え去ってしまい、もはや手にすることもできぬ幻想なのだ。それらはイルマにとっての心の拠り所だったというのに——

故郷の憧憬に心を馳せども、それはもう体感することも叶わない。「悲しいことを言うものですね、イルマ。私まで悲しくなっています……」

河川敷の草むらに腰を下ろしたままのエレーヌが、わずかに目を伏せる。

「……でも、言いたいことは私にも分かります。あつちの世界はこれほどまでに賑やかではありませんでしたから。とても綺麗で、静かな場所でしたからね。確かに、いい場所でした」

そんなエレーヌの言葉に、夜空を見上げていたイルマの視線がふと彼女へと向いた。

「戻りたいとは思わぬか？」

「戻りたいですよ。でも、戻れるのでしょうか」

そんな当たり前の反論に対して、イルマは何も答えることができなかった。ただ彼女のことを見つめ返すしかないイルマに、エレーヌがゆつくりと言葉を続ける。

「私たちは絶望的な状況を通して、今ここにいます。まずはこれを幸運と考えるべきではないでしょうか。あの時、世界を繋ぐ穴が生まれていなければ、私たちはあの場で死んでいたのですから」

「……そう、だな。確かに。考えられないほどの偶然の果てに、我らはここにいます。だが、帰る方法が見当たらぬ今となっては、あの世界がとても懐かしく感じられるのだよ」

「戻れる方法があればよいのですが……」

「あれば、よいのだがな」

中身のない言葉をやり取りして、イルマは脱力するように溜息を吐いた。

まだまだだ。自分たちは何もかもが足りていない。この世界の構造も、営みも、ここがどこで今はいつなのか。そんな当たり前のこととさえ確認することができないのだ。そして、彼らにとっては理解すらできない——襲撃者。

「しかし、次はいつ奴らが襲ってくるかも分からぬな。また少ししたら場所を変えよう」

エレーヌがふと考え込むような仕草で俯く。

「なに、心配しなくてもよい。今度はしっかりと倒してみせるさ。生きてゆくため、我らはまず世界を理解しなくては。そして、居場所を見つけねばならぬ。そのためには、まずは襲撃者を排除することが優先事項だからな」

「……ねえ、イルマ」

「ぬ？」

消え入りそうな声で話しかけるエレーヌに、イルマは反問した。

「例え話です。例え、私たちはどんなことがあるうとも——ずっとずっと一緒ですよ。ここがどんな世界なのか、どんな人物がいるのか、そんなことは関係ありません。私、イルマがいなくなった時を考えると、とても不安で……」

「なんだ、そんなことを心配していたのか」

ふつと優しく微笑んだ後に、イルマは先ほどより真剣そうな眼差しのまま続ける。

「言ったではないか。例え、この世界の人間全てが我らの敵だとしても——」

右も左も分からぬ彼らにとって、その発言は現実味を帯びたものだったが、関係ない。

「我らはずっと一緒なのだ。……そう誓ったはずだろう？」

エレーヌからそつと消え入るような言葉が返る。その反応を見た

時、イルマは心の中で確信したのだった。やはり彼女と一緒にいるためには戦うしかないのだ、と。

そう、戦うしかないのである。襲いかかってくる者たちが何者であらうとも、この世界の人間たちが全て敵だとしても、夢に見た光景が二度と手に入らぬ——幻想だとしても。

もはや、彼らに残された選択肢は少ないのだから。

+

夢見ヶ丘自然公園での戦いの後、直己たちは”庭”へと戻ってきていた。

どこか落ち着かない様子の直己、右腕を押さえて顔をしかめる夕莉、相変わらずの余裕さを振りまく橘先輩——そんな三者三様の反応を見回して、切り株に座っているアリスが溜息のまま応じ、出迎えてくれる。

「……お疲れ様でした。で、どうですか、首尾は」

「夕莉ちゃんを負傷したっぽい」

そう言って夕莉を流し見る先輩だったが、あまり動揺していない辺りは流石である。

「大丈夫、ただの骨折ですから。幻想人の《アリコーン純然たる白きツノ》を受けた衝撃で、木に叩きつけられての骨折です。これは単純に私のミスです……」

痛みに顔をしかめつつも、まだまだ平気だと言ったのける夕莉であった。

しかし、いくら彼女が平気だと言っても、骨折していることは違いないのだ。あの戦いを間近で見ていた直己にすれば、そんなのは強がりのようにしか見えなかった。掠り傷ならともかく、骨折となればまずは言い訳よりも治療を優先すべきである。

「と、とりあえず添え木をしなきゃ駄目だ、骨折したところに木を当てて固定するんだよ。まずはそういうことしないと……」

詰まるところ、直己の落ち着きがないのはそれが理由だった。

あわあわとしている直己のことを眺めて、先輩とアリスが同じタイミングで溜息を吐く。ただ夕莉だけがぶいと視線を逸らし、憮然

とした表情のままだった。

「……直己、あなたは少し落ち着くべきよ。安心して、この”庭”にいればすぐに治るから。ここなら幻想の治療薬とかもあるでしょうし、完治するまでは格段に早いはずよ。……まあ、一日もあればどうか——」

「って言っても、時間がかかるのは違いはないけどね」

さっと夕莉の発言を遮り、先輩は難しい顔のままそう告げる。

「まあ、ぐだぐだやっててもしょうがないか。とりあえず、夕莉ちゃんの治療だ。アリス、んじゃ添え木とか治療薬とかは頼んだ」

「やれやれ……分かりました」

切り株からぴょんと飛び降りると、アリスは暗闇に包まれた森の中へと消えていく。

アリスがいなくなっただけ、今まさに帰ってきたばかりの直己たちが切り株を占有する。未だにどこか放心状態の直己は、目の前で揺れる炎をぼんやりと見つめる。

「帰ってきて早々で悪いけど、また幻想人の話だ」

ふと、橘先輩が話を切り出してきた。それに視線を上げた。

「夕莉ちゃんが受けた《純然たる白きツノ》^{アリゴーン}だけど、やはりあれは一角獣の角に宿った能力みたいだね。しかも、一角獣が幻想人たる自身を証明している核だ。あれが強力でないわけがない……これからは、角はまともに受けない方がよさそうだ」

あの時のことを思い出しているのか、夕莉は苦々しい表情をして口を開く。

「ええ、あれは破壊力のある能力ですね。まともに受け止めたはずなのに、まさかあのまま持っていけるとは思いませんでした……」

「この人員不足のタイミングで夕莉ちゃんが負傷したのは痛いね。けど、片方でも能力を判別できたのは僥倖だ。さて、問題はもう片方の《憤怒を殺す者》^{ラスト・ミレニウム}なんだけど」

「あれが特定できなかったのは痛いですね。あれがもし強力な能力だとすれば……」

「うん、それが今回の私たちの作戦の穴になる」

その欠陥の部分を、先輩は明確な言葉にして発した。

つまり、その《憤怒を殺す者》とはどのような能力なのか。この場にいる執行者たちが踏みとどまっているのはそこなのだ。おそらく、所持しているのはもう片方の女性の方だろうが、だからといって断定もできずにいる。

「……これは俺の考えなんですが」

その時、直己は初めて自分の意見を口にした。だがようやく意見が言えたという嬉しさとともに、それはどこか重大な矛盾をも孕んでいるような気がした。

心の奥底で、何かが冷めていくのを感じる。

……ああ、そうか。

俺は、幻想人を狩ろうとしているのか。

「これまでの話を聞いていた感じだと、幻想人の能力というのは伝承や逸話に由来するわけですね？　つまり今回の一角獣なら、その象徴である角が《純然たる白きツノ》として発現した、と。そう考えると、やはりあの女性も何らかの関連性があると考えられるじゃないでしょうか。特に今回、彼らは同時に現界したわけですし」

「……なるほど。君にしては悪くないアプローチだ」

先輩が腕組みをして、ふむふむと頷いていた。同じく夕莉もこれまでにないほど、直己の話に耳を傾けている。

「うん、確かに悪くない考え方ね。直己、だとすればあなたは彼らの関係について思い当たる節はあるわけ？」

「実は、一つだけある。もしかすると的外れかもしれないけどね」

そう言って、直己は一度だけ焚き火に視線を移して、それから目前にいた二人の執行者へと視線を戻した。

「俺さ、昔からファンタジーが大好きだったから、何となく覚えてただけだよ……一角獣ってのは、その上品な外見からは想像もできないほど獰猛な生物らしい。何でもその獰猛さ故、七つの大罪である『憤怒』の象徴にもなってるくらいだ。だがそんな獰猛な生物

だけどさ、一角獣はとある存在にだけは常に心を開くらしいんだ」

「……それは？」

夕莉から真剣な瞳のまま問いかけられ、直己は照れるように頬の辺りを掻いた。

「清纯な乙女だよ。まあ詳しく言うアレなんだが、どうやらその一角獣とやらは、その、処女の娘にだけは……常に心を開くらしい。なんか不思議な話だけだな。……これ、聞いたことないか？」

その場にいる夕莉と先輩が顔を見合わせた。直己はわずかに顔が熱が帯びているのを感じながら、こほんとわざとらしく咳払いをしてみせる。

場の女性陣を代表して、先輩がお茶を濁すように言った。

「そういえば、聞いたことあるような気がしないでもないね……」

「あ、それと他意はないですよ、一応言っておきますけど……」

「……まあ、そういうことにしておいて。つまり、あの一角獣が連れていた女性は、この世界でその処女という”役割”が与えられているというわけか」

「俺はそう考えてますけど」

役割。つまり、この世界に来る幻想人たちが、自らを幻想人たらしめている由縁。

「ふむ、なるほどなるほど。じゃあ、こちら辺であえて君に聞いてみようか。……ならば、その君の言う”役割”とやらで洗い出すと、自ずと女の能力については仮説が立てれそうだけど、直己くんならどういった能力があると予測する？」

「難しいですね……でも、おそらくサポート能力じゃないでしょうか？ 単純に一角獣の力を押さえ込んでいる存在とか、または感情をコントロールしている存在とか。一角獣は処女相手には憤怒を忘れるって逸話もありますしね……。というか、そもそも処女に対する設定って限定的過ぎるんですよ……俺にはここらが限界です」

「よろしい。実は、あたしもその辺りの能力じゃないかと予想してたんだけどね……君の回答で少し確信を得れそうだ」

うむ、と先輩は納得の面持ちで頷いてから、その視線を夕莉へと向ける。

「ところで、もう一度だけ確かめたいことがあるんだけど、いいかな？ 実際に戦った夕莉ちゃんに聞きたいんだけどさ、あの女、決して戦おうとはしなかったよね？ そして、常に一角獣に身を守らせていた。……これで、間違いない？」

「ええ、まったくその通りですね。オマケに戦闘にも慣れてませんでしたし」

夕莉は面白くもなさそうに、そう答える。

「やっぱりね。とすれば、《憤怒を殺す者》ラスト・ウィムが戦闘能力ではない可能性は高い。しかも自身を守る手段もないわけだし、これは……」

「思いつきり、相手にとっては弱点ですね」

「そうなるね。この考えが当たっている可能性は十分にありえる。だがねえ……」

先輩が足を組みなおし、直己たちの前で結論を下す。

「次の戦いで、それに全てを賭けるのは厳しいんじゃないかな？」

「……なら、決戦を翌日に持ち越しますか？ 確かに万全の状態では戦いには望めそうですけど、あれほど大型の幻想人であれば、今晩中に片を付けないと厳しいんじゃないですか？ 幻想人が人目に触れる時間を減らすこと、それこそが私たちの取れる最良の選択肢だと思いますが」

「ま、夕莉ちゃんの言う、それも真実だ」

先輩はそう言ったが、実際のところ現場指揮官としての判断に迷っているようだった。どうもこれまでに出了た推測に身を委ねるのは、まだ抵抗があるらしい。

「まずは仮説が当たっているかどうかだ。結局のところ、そこなんだよね。あたしたちが勝つ以外の賭けなんてしたくはないし、仮にすることも高確率で勝てる見込みがある時だけだ。それが分からない限りは、あたしは賭けられないね」

その時、ふいに森の奥からガサリと音がして、その場の者たちの

視線がそちらを向いた。

治療薬と添え木をするための物を抱えたアリスが、暗い森の中から出てきていた。アリスが夕莉の近くまで歩いてくると、足元にドサリと治療セツトを置く。

「面倒な性格をしていますね……美鈴、ここまで来てひっくり返すなんてアナタらしくない」

「慎重な性格と言ってくれないかな？」

「まあ、ともかく」

反論しようとした美鈴をあつさりとは無視して、アリスは定位置の切り株に座り込む。

「一角獣は処女の娘を好む。これは数々の文献にも載っている有名なものですよ、それだけは言っておきます。それとリスクについてですが、敵の弱点を突けば無傷での勝算は十分にありえるレベルです。まあ、美鈴、アナタは前衛になるでしょうけどね」

「状況も状況だし、それはそれで仕方ないね」

「……やはり、まだ納得できないと？」

「少し、考えてみる」

アリスの言葉を受けて、先輩が顎に手を置いて思索し始める。さすがの周囲の者たちの意見に押されては、先輩も自分の意見だけを通すことはできないと判断したのかもしれない。

数十秒が経ち、ようやく先輩は顔を上げた。

「……分かった。いいよ、じゃあその仮説で賭けてみようじゃないか。いずれにせよ、あたしたちに残された時間は少ないんだ。奴らは野放しにできる存在じゃないしね。……ただ、やっぱり不確定要素は多いよ。想定外の事態が起きた場合は撤退を余儀なくされると思っけど、そこは了承してよね？」

ちらりと先輩の視線が、夕莉へと向けられる。

「もちろんですよ、先輩」

自らの言い分を通してもらった夕莉が、晴れやかな表情で宣言する。

これまでにないくらい気分の良さそうな夕莉を眺めて、先輩が困ったように頬を掻く。彼女は何か言いたそうな表情をしたが、あえて口には出さずに引つ込めたようだった。

「……じゃあ、作戦について解説しよう」

これまでの緩い雰囲気を引き締めるように、先輩の顔付きが指揮官のそれになる。

「午前四時、あたしたちは幻想人を襲撃する。そのために、あたしたち執行者は二面作戦を実行しようと思う」

「二面作戦ですか」

治療薬の入ったビンの蓋をこじ開けながら、アリスがふとそう呟いた。

「この世界の歴史上、二面作戦はあまり成功したことがないそうですが」

「嫌なこと言わないでよ、まったく……」

顔をしかめてみせた先輩だったが、すぐに先ほどまでの調子を取り戻し、その場にいた執行者たちのことを見渡す。

「一角獣にはあたしと直己くん。そして、例の女には夕莉ちゃんをぶつける。この作戦の重要なところは、伏兵になる夕莉ちゃんだ。まあ詳しいことは後で本人に直々伝えるよ、ちよつと作戦上で試してみたいこともあるしね。じゃあ、さっきと同じように——」

すらすらと気分良さそうに作戦の説明をする先輩を見て、直己は卑しい気持ちにさせられたが、それでも口を挟まずにはいられなかった。

「あの、先輩、悪いんですけど」

「……うん？」

先輩はもとより、その場にいた全員の視線が直己へと突き刺さった。

「俺、やっぱり無理です……戦えません。このままだと、俺、何か人としての大切な一線を越えてしまう気がする……だから、戦いたくないんです」

「あらら、でもまあ……無理もないか」

それに仕方なさそうに肩をすくめてみせる先輩。しかし、そんな温い反応を返したのは彼女だけだった。

夕莉の左手からすぐさま幻想武器《S27 R i d y》^{リディ}が生み出され、それが直己の喉仏へと向けて突きつけられる。辺りに満ちていた穏やかな空気が、一瞬でピリピリとしたものに変わるのを感じた。

アリスが医療道具を手にしたまま、直己へと冷たい視線を浴びせる。

「……ワタシとの契約を覚えていますか、直己？」

「あ、ああ……たぶんな」

突きつけられたレイピアの先端を眺めながら、直己は辛うじて声を出す。

「幻想の世界と関わってしまった者は、生きて帰ることはできない。……そう、アナタたちのように執行者となることを選んだ者以外は直己、すでにアナタは”例外”なのですよ。アナタは幻想人を狩ることしか許されていないのです。つまり、戦うことを放棄することは、ここで死ぬことと同義……」

そんなアリスの言葉を引き継ぎ、リディを突きつけている夕莉が問う。

「どうするつもり？ 私はいいのよ、ここであなたを片付けても」

片腕が折れているにも関わらず、そんな問いを投げてる夕莉は鬼気迫っていた。瞳の奥から感じる冷徹なものが、彼女の執行者^{マード}としての全てを物語っているようだった。

それに対して、直己は言葉も出せず、ただその瞳を見つめ返すだけ。

「……ふん」

ふいに夕莉が目を逸らし、気に入らないといった様子でリディを消失させた。

「その目を見れば、答えなくなつて分かるわ。俺は死にたくないっ

て、あなたの目はそう言っている。なら、戦いなさい。それだけが
生かされている理由ならば」

それから夕莉が切り株に座りなおした頃、直己の体に改めて震え
が走った。

……嫌だ、俺は、死にたくない。

ぶるぶると身を振るわせ始めた直己へと、本筋の話題を遮られた
先輩が笑みを伴ってこう言う。

「ま、そういうことなんだよ、直己くん。ごめんね」

極限の選択をさせたというのにも関わらず、先輩は相変わらずの
軽さのままだった。どうして、この人は他人の命をここまで簡単に
扱えるのだろうか。直己はこの場にいる者たちとの、決定的なズレ
を感じずにはいらなかった。

「んじゃ、まとめますか」

全員のことを見渡して、先輩が頃合だとばかりに宣言する。

「ともかく、今回は二面作戦を実行する。作戦決行は午前四時。ぶ
つける面子は恐らく当人たちが覚えてるだろうから、あえては言わ
ないことにするよ」

アリスが真剣な眼差しでくりと頷き、夕莉が退屈そうに欠伸を
していた。どこか煮えたぎらない直己は無言の抗議をしていたが、
そんなものには誰も見向きもしない。

「あたしから伝えることは以上だ。では、全員の健闘を祈っている」
そして、直己の感情は全て無視されたまま——作戦会議は終わりを
告げることとなった。

午前四時。宇佐川の河川敷に、直己は立っていた。

先ほどまで暗闇に包まれていた空が、今ではほんのりと明るみを帯びてきている。それは世界の夜明けだった。しかし、いくら夜明けが来ようが、直己の気分は暗いままだ。

何でも橘先輩の立案した作戦によると、正面からぶつかることになるのは直己だけになるらしい。先輩は背後から回り込むと言っていたから、到着はわずかに遅れるだろう。どっちにしろ、無理やり戦わせられるのならあまり関係のないことだ。

それにしても、なぜ自分は幻想人と殺し合わなければならないのだろう？

何度も、幾度も、心の中で繰り返した問いかけ。しかし、それはいつも同じ答えしか示すことはない。

生きるためには幻想人を狩るしかないからだ。そこに理由など何もない。ただ自らが生き長らえるため、その他の全てを犠牲にするだけなのだ。

死にたくないのなら戦え――

それこそが全てである。なんと強引なことか。だがそれに抗うだけの力も、勇気も、直己にはないのだ。それに従うことしかできない自分こそが一番嫌だった。

ともかく、この戦いをするにあたって、先輩から受けた注意は一つだけである。

橘先輩曰く、

アリコーン

「《純然たる白きツノ》はまともに受けちゃ駄目だよ、直己くん」

……本当に、俺は戦えるのだろうか。

河川敷を歩いていると、やがて向こうから何者かの足音が聞こえてきた。暗闇に目を凝らしてみると、それは浮浪者のような姿をし

た男だった。彼は恐慌状態といった落ち着かない様子で、直己の横を走り抜け、どこかへと消えていつてしまった。

直己は携帯電話を取り出して、通話ボタンを押した。

「あの、先輩。今、浮浪者らしき人が横を走りぬけて行っただけです……」

先輩から返ってきたのは、いつも通りの落ち着いた声色だった。

『了解。それは恐らく目撃者だ。そいつの処遇はあたしに任せなさい。君はそのまま目標へ』

「分かりました。死んだら俺の骨は拾ってください」

すると、電話の向こうにいる先輩が微苦笑する気配が伝わってきた。

『そんなブラックジョークはいらないよ。なに、大丈夫さ。君にはあたしが一週間みっちり戦い方を教えただ、生き残るくらい……余裕だろう？』

「善処はしてみます」

何と言おうと結果は変わらないか——失望もなく通話を切り、ふと視線を前方へと戻す。その時、直己には視界の先で、白い巨体が立ちはだかっているのが見えてしまった。

もう説明など必要ない。あれが目標だ。

「来たか」

そんな敵かな声が聞こえた時には、すでに直己は無言のまま幻想武器を生み出していた。それに伴い、イルマの方も臨戦態勢に移っていくのが分かる。

しかし、戦いは出会ってすぐには始まらなかった。

「貴様、あの自然公園で茂みに隠れていたやつだろう？ あの時の小娘はどこへ行った」

「あいつは負傷して引っ込んでる」

ごっそりと感情が抜け落ちると、これまでとは考えられないほど自然な声が出た。

なぜだろうか。これまでは葛藤していてあれほど苦しかったはず

なのに、今はなぜか清涼感すらある。まるで憑き物が落ちたかのようだった。これまでは葛藤していて、苦しくて苦しくてたまらなかったはずなのに——今はこんなにもこんなにも楽だった。

苦しくて、苦しすぎて、大切な何かを落としてしまったのだろうか……？

「小娘は戦えぬか。まあ、無理もない」

先ほどの直己の発言に、イルマは妙に納得したようだった。だが、先ほどの発言はもちろん嘘である。負傷しているのは事実だが、この作戦でも彼女は動いている。

「そういうお前こそ、あの娘をどこへやった？ この前みたいには見当たらないぜ」

「教えられぬ」

質問される立場になると、イルマの態度は打って変わった。ゆっくりとかぶりを振り、直己からの問いには一切答える素振りを見せない。

「ズルいぞ、俺は答えたつてのに」

「それは貴様の未熟さ故だ。さて、言葉遊びも少々飽きた……本題に入らせてもらおう。貴様には聞きたいことがごまんとある。答える。なぜ、我らを付け狙う？ 我らは生きる場所を求めて、偶然やつてきただけだ。なぜ理不尽な殺意を向けられねばならない？」

じりじりと詰め寄られるような圧迫感が、相対するイルマの瞳から発せられる。それから決して目は離さず、直己はゆっくりと口を動かして答えた。

「さあ、知らないな。ただ、受け売りなら答えてやれる——お前らはさ、この世界にいてはならない存在、なんだとさ」

そんな直己の言葉を、イルマは鼻で嗤った。

「ふ、なんと強引な理論だろうな。そんなもので我らは殺されねばならないと？」

「……ああ」

どれほど消え入りそうな声でも、直己はそう答えるしかなかった。

本音を言わせてもらえば、直己だってオカシイということくらい解る。だが殺しに來た立場でそれを言うのは、ただの偽善でしかない。同情も意味を持たない。

氣が付けば、イルマは直己の顔をまじまじと見つめていた。

「……貴様は、甘いな」

「そうだな、本心も隠せず、立場も弁えない未熟者だよ……俺は」
だが、誰が何と言おうとも、逃げることはできないのだ。

とうとう、直己は自らの幻想武器《S09 Imagine^{イマジン}》を握りなおし、中段構えの体勢を取った。もうこの会話も潮時である。これ以上話せば、せつかく壊れてきた直己の心がまた治ってしまうかもしれない。

だから——戦うしかないのだ。

「残念だが、やはりそういう運命なのだ。ならば、我も戦うとしよう。貴様のような者が戦闘に借り出されたのなら、せめて苦しませず殺してやろう。この先に何があるかと、ただ生きるため！ 我は戦い続けるだけだッ！」

「！」

大地を踏み鳴らす音が響き渡った瞬間、すでに直己は横へと転がっていた。

目前から土を撒き散らして突進してくるイルマの巨体は、もはや能力など使わずともすでに凶器のレベルだった。筋肉の塊とも言うべき一角獣の肉体は、一撃まともに食らうだけで体中の骨が砕けて余りある。それが直己の真横を凄い勢いで通過していったのだから、もはや言葉など出るはずもない。

なんとという凶悪な、攻撃……！

寸前で回避することに成功した直己だったが、土塗れになりつつ体勢を立て直したかと思えば、すでに目前には折り返してきたイルマの巨体が突っ込んできていた。

「な、速いっ！」

背筋をゾツとするような寒気が駆け巡った。

下から突き上げられるように放たれた角は、夕莉を吹き飛ばした時のように光り輝いていた。つまり、《純然たる白きツノ》^{アリコーン}の能力を解放している。もちろん直撃なら死亡は免れないが、仮に防御したとしても防御ごと持っていかれるのは必至である。

だが、これまで一週間続けてきた模擬戦闘の経験が、その時、無意識にも直己の体を突き動かしていた。突き上げられる角を、辛うじて手中のイマジンによって防御する。体が浮く。空中に放り投げられる。猛烈な力の波動が吹き荒れる――！

「ぐうっ……があッ！」

それは、まるで巨人の一撃を受けたかのような衝撃だった。

直己は数時間前の夕莉よろしく、そのまま十数メートルほど吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。否、それだけに留まらず、土の上で何度か後転を繰り返し、やつとのやつとで止まる。受身を取る猶予があつたことだけが、唯一の救いだった。

口の中に入り込んだ土を吐き出せるようになった頃には、直己は幻想人との絶望的な力の差というものを実感しきっていた。

追撃をかけられたはずのイルマが、先ほどの位置から直己のことを見下ろしていた。

「少年よ、今なら見逃してやろう。すぐにこの場を立ち去れ、そして二度と姿を現すな」

全身に付いた土を払おうともせず、直己は、ただ低く嗤った。

「……甘いことだな、情けか」

「なんだ、貴様、逃げないのか？」

イルマが地に尻を付けたままの直己を見下ろして、失望したように返す。

そんなイルマの反応を見届けてから、直己はゆらりと立ち上がり、また嗤った。それは嘲笑だった。誰に向けるまでもなく、自分自身へと向けての。

「あえて言うなら、逃げれないってのが正しいか。俺もお前らと同じなんだよ、結局はな、今をどうにかしたところで――もう詰みな

んだよ。どうにもならない」

「……その状態でよくもそんなことを抜かせるものだ、尊敬に値する。だが、愚かだ」

「ああ、俺はきつと……誰よりも愚かだ」

「なら、今度こそお別れだな、少年」

哀れむような眼差しで直己のことを見届けると、再度、イルマが巖のような体躯での突進を開始する。それは先ほどの衝撃から回復しきっていない直己には、もはや必殺を遥かに通り越した過剰攻撃^{オーバーキル}でしかなかった。

だが、イルマがこちらへと駆けてくる光景が、なぜか網膜に遅く、映った。

「ク、ソツ……！」

……死にたくない。

その時、直己は純粹にそう思った。何者にも命を狙われることなく、ただこれまで過ごしていた日常というものがとても素晴らしいものだったのだと、その時改めて感じた。

今思えば、何が間違っていたのか——直己にも思い出すことはできない。

執行者になどなってしまったのが間違いだったのか、それとも、あの日、夕莉に”庭”へと連れて来られたのが間違いだったのか。はたまた、千坂夕莉という存在を好きになってしまったことから間違っていたのか……。

いや、でも、彼女を好きだったという想いだけは、嘘にしたいくない。

……俺は、今でも、彼女が好きだ。無愛想で冷たくて怖くて——でも、最後の一線だけはどうしても越えることのできない彼女が。そう、直己は心のどこかで解っていた。彼女は俺を殺せない。

だから、その躊躇いが残っている間は——俺は彼女を好きなままでいたいと思う。

……生きていたいと、思う。

その時、もはや曖昧となりつつある時間の流れの中で、直己はふいに奇妙な感覚に捕らわれた。それはこれまでに感じたことのないような激烈な違和感。何かが変異するような感覚。それは自らの手の中でぐにいと歪み、新たな形を成し始めていた。

違和感の原因は、直己の幻想武器《S09 Imagine^{イマジン}》。

これまで辛うじて剣の形をしていたそれが、少しずつ長弓の骨組みへと変わっていく。それと同時に、手のひらへと出現したのは骨組みの矢。操ったことなどないにも関わらず、その時、直己は自然な動作で弓を引き絞っていた。

そんな動作を習ったことなどない。ただ幻想武器がそうしろと直己に教えていた。そうしろ、と命令していた。

全ては無心のままに行われ、矢が必中することを――伝えていた。コマ落としいようになっていた網膜の映像が、一気に現実のリズムまで引き戻される。接近してくるイルマ。だが、それが到達するワンテンポ前に、直己は緊迫する弦を解放する。

これまでにない衝撃が、手元から放たれた。

「なんだ、と……これは……ッ！」

それはまるで大気を焦がすような峻烈な一撃だった。真正面から突っ込んできたイルマは辛うじて回避行動を取ったものの、矢は胴体へと直撃。《純然たる白きツノ》にも勝るとも劣らない力の余波を引き起こし、イルマの巨体を一気に押し返した。

その驚愕はイルマだけでなく、放った直己も同じだった。

元から半ば満身創痍だったこともあり、その一撃の威力には当の本人でさえ予想できないものだった。これは、果たして現実か？

「あ、あれ……俺の武器、イマジン……だよな？」

手元で長弓に変わってしまった幻想武器を見回すと、確かに《S09 Imagine》という表記は健在だった。とすれば、やはり幻想武器の形状が変化した、というわけか。

「訳が分からねえ。何だ、この幻想武器……」

「それが君の幻想武器の本来の力、というわけか。なるほどなるほ

ど」

河川敷の土手の方から聞き慣れた声がして、思わず直己はそちらへと振り返った。そこに幻想武器《L11 No^ノin》を握っている、待ちわびた援軍の姿があった。

「最初に謝っておこう、直己くん。君の実力を確認したかったから、あえて君に一人で行かせるようなことを言った。本当に済まなかった。だけど、あたしは後悔してない」

握った短槍の幻想武器をぶんと振るい、先輩はいつもにはないほどの真顔で言った。

「さあ、第二ラウンドと行こうじゃないか」

+

宇佐川から程近い住宅街には、一部だがあまり人の踏み入らない廃屋が存在する。近所の子供たちが幽霊屋敷と呼ぶそこには、夜明けが近付いているとは言え、まだ人が近づいてくるような気配は微塵もなかった。

そんな廃屋の中で、エレーヌは闇に紛れるようにじっと息を殺していた。

彼女がこんな人気もない場所に立てこもっているのは、ひとえに襲い掛かってくる外敵から身を隠すためである。もちろん、外敵とは夢見ヶ丘自然公園で攻撃を仕掛けてきた少女のことだ。イルマが正面で戦闘行為を行っている間、ここで身の安全を確保するということが彼女の役目だった。

明かりもない廃屋で、彼女は部屋の壁に身を預けたまま……彫像のように動かない。

果たして、どれほどの時間が経ったのだろう。だが、それを確認する術もない。ただ恐怖に身を震わせるしかない時間の中で、彼女はふと呟きを漏らす。

「こうして一人でいると、嫌なことばかり、思い出しますね……」

誰もいない暗闇の中に、自らを卑下するような声が響く。

埃にまみれた廃屋の中で、その時、エレーヌが脳裏に思い描いたのは——彼女たちがこの世界へと降り立つこととなった出来事のことだった。

その日、エレーヌはいつものように森へと出かけた。近所の集落に住んでいた彼女には知る由もなかったが、ここ最近、森を荒らし回っている人間たちが増えており、大規模な一角獣狩りが行われて

いた。それは病床に伏した国王を救うため、国の兵士たちと万病を治すと言われる一角獣アリコーンの角を求めたからだった。

森の中を探索していると、見慣れない何かを発見した。それは優雅さを感じさせるほど白く気品に溢れた伝説の生物——一角獣モノケロスだった。

今思い返せば、すでに、その時から運命は始まっていた。

一角獣は傷ついていた。体中に傷が出来ており、このまま治療しなければ死ぬというところまで来ていた。その時、エレーヌはろくな医療道具も持っていないが、血止めなどの応急処置をするくらいはすることができた。なぜ、その時、彼を治療したかは分からない。ただ自らの目の前で死んで欲しくない、という一念があった。

家にも帰らずに、エレーヌは一角獣と一夜を過ごした。

「あなた……名前は？」

それに対して、彼が答えたのはたった一言だけ。

「名などない、好きに呼ぶがいい」

「もしかして、名前がないのですか？」

一角獣は少しだけ考え込むように目を逸らし、それから吐息のようにか細く、告げた。

「……ずっとずっと昔のことだが、我らの仲間内では……イルマと呼ばれていた」

その時、エレーヌはようやく心を開いてくれたのだと思い、嬉しくなった。そんなエレーヌのことを一瞥しつつも、どこか心を通わせるような態度で、彼は問いかけてくる。

「——ところで小娘……貴様の名は、何というのだ？」

カチリと何かが嵌め込まれるように、少しずつ運命が鳴動し始める。だが、その時の彼らは、まだそんなことなど知る由もなかった。夜明けと共に、森を荒らし回っている人間たちが現れた。

一角獣の角を狙っている彼らと、一角獣を延命させているエレーヌ。正反対の立場である彼らが争いを起こすのは、どう見ても明らか。

かだった。強引に角を手に入れた人間たちが武器を手に着し、エレーヌは言葉のみで必死に抵抗をする。

しかし、言葉でのやり取りがいつまでも続くはずはなかった。彼らの争いは激化の一途を辿り……やがて、流血沙汰が引き起こされたのだ。血走った目の人間たちが、エレーヌの体中に暴行を加え、無理やり押さえ込む。

もはや、人間たちは手段を選んではいなかった。

今まさに殺されるだろうイルマを眺め、その時、エレーヌはふと思った。

——ああ、こんな世界などなくなってしまえ、と。

異世界を繋ぐ穴が出現したのは、まさにその瞬間だった。突如、暗黒の穴が空間を蹂躪していく。世界をこじ開けていく。異物が世界を侵していく。

そこから覗けるものは、ただ、深淵。

『あなた方を理想の世界へと、送り届けましょう』
にわかに信じがたいことだが、その穴からは何者かの声が聞こえた。

その場にいる誰もが、あまりに突飛すぎる変異に動くことなどできなかった。しかし、不可解な声が聞こえた時、すでにエレーヌたちは密かに覚悟を決めていた。

動揺する人間たちを振り払い、一瞬の隙を見出した時——

エレーヌたちは、すでに暗黒へと飛び込んでいた。

「あれは……」

回想の世界から戻ってきたエレーヌが、後悔するように呟いた。

「あれは、間違いだったのでしょうか……？」

答えなど出るはずがないと分かっているにも、エレーヌは問いを口に出さずにはいらなかった。そして、今になって湧き上がる単純な疑問。

一体、あの声の主は誰だったのか？

しかし、本当に騙されてしまったものだ——こんな誰とも分から

ぬ者に襲われ、戦いを強要されることになる世界など、断じて理想の世界などではない。エレーヌが求めていたのは、もっと平穩で、誰もが幸せになれるような……優しい世界だったというのに。

「どうして……」

目元に浮かんできた涙を拭き取り、エレーヌはそんな言葉を漏らした。

その時、ふいに廃屋のどこから、扉が蹴り開けられるような音が響き渡る。思わず決壊しかけた意識が、一瞬にして引き戻された。こんな時間に廃屋に足を踏み入れる者など、エレーヌの知る限りでは一人しかいない。

すぐさま移動して、近くの押入れの中に逃げ込もうとする。だが、それは同時に物音を立ててしまうという最大の愚挙でもあった。暗闇の中を歩いてくる音が、一瞬だけ、止まる。冷酷な死神である少女にとつては、そんな微かな物音であつても、気配を察知するには十分すぎたのだろう。

「ようやく、見つけた」

まるで処刑人のような硬質の音が、部屋の中へと響き渡った。

こつこつとした足音がエレーヌの方へと近付いてくる。押入れに体を捻じ込ませる彼女だったが、ふと間に合うわけがないことを悟った。すでに背後の暗闇に、うつすらとその人物が立っていたからだ。

「どうして……ここを」

エレーヌは観念したように壁に身を預けて、そう漏らす。

闇になびくような黒髪を掻き上げて、その少女——千坂夕莉が、ようやくビンゴを当てたような得意げな顔で笑った。

「ここは初めからマークしてたのよ。ただそれを風潰しに回ったつてだけの話。ただそれだけ。……さあ、もういい加減、覚悟は出来てるわね？」

イルマによつて折られた右腕の痛みにも顔をしかめながらも、夕莉がもう片方の手中にレイピアを出現させる。エレーヌには全く原理

が分からなかったが、もはやどうでもいい。

「助かる見込みはないのですか……だったら、一つだけ聞かせてください」

「何かしら」

夕莉が一切の感情を欠いた声で応じる。エレー又は恐怖で目線を逸らしかけたが、それを死に物狂いの精神力で固定した。もはや逃げれる道理はない。だったら、少なくとも、これを聞かずに死んでたまるものか。

「どうして、私たちは殺されねばならないのですか？　なんで、どうして……こんな目に遭わねばならないのですか？　答えてくださいよ。ちゃんと私が納得できる理由で！」

「それはあなたたちが幻想人だからよ。それ以外に何があるの？」
思案するまでもなく、少女の口から突いて出たのはエレー又の期待するような台詞ではなかった。怒りによって頭が沸騰する。こんなにも憤りを感じたのは、久方ぶりだった。

「そんなのおかしいわ！　そもそも何ですか、幻想人って……理由にすらなっていないでしょう！？」

「そんなことはないわ。あなたたちの存在が消えることで、この世界はまだまだ延命することができるの。何故なら、幻想人は自覚がなくとも別の幻想人を呼び寄せてしまうから。あなたたちを殺すことで、少なくとも可能性は潰すことができる」

「何ですか、それ……ただの自分勝手でしょう……！？」

納得できる答えなど、端から期待してはいけなかったのだろうが――がつくりと肩を落としたエレー又には、もはや何も答える気力が起きなかった。

「酷い……酷すぎないとは思わないですか？　あなたたちは人間じゃない」

「それこそ酷い言われようだわ。私は歴とした人間よ」

夕莉は傲岸不遜のままに言い放つ。だが、それにエレー又は嗤わずにはいられなかった。

「……これだけは言っておきます。例え、あなたたちが人の姿をしていようと。例え、私たちがあなたの言うような存在であろうとも。それとこれとは全てが別です。関係ありません。だから、私はあえて言います——あなたたちは、人間じゃない」

「……お喋りの時間は終わりたいね」

はあ、と夕莉は溜息を吐いたが、しかしそこには失望も落胆もない。

次の瞬間、夕莉のリディが閃光のような速度でエレーヌの喉元へと突き入れられていた。それが左右へと振られると、一刀の下に頸動脈が断ち切られる。

エレーヌが茹だるような灼熱を感じた時、すでに首から止め処なく血液が噴き出していた。呼吸することに喉からひゅっひゅっとき空気が漏れる。夢見心地のままに体が傾ぐ——

「来世はこの世界で生まれることね。それくらいは願ってあげる……

……では、さようなら」

そして、ついに幸せな日々を手にすることも叶わず、まるで幻想など存在しない最果ての地で——エレーヌはたった一人、命を失った。

+

橘先輩の登場により、河川敷での戦いはより熾烈な様相を見せつつあった。

「やっぱり、ヒーローってのは遅れて来るもんだろっ」

土手の上から得意げに笑い、直己へと視線を送るとウインク。いつもの人を食った態度は何も変わっていない。直己は恨みたい気持ちでいっぱいだったが、その人柄からか憎めないところがまた悔しかった。

「……貴様、新手か？」

直己の矢を食らったイルマは、さすがに流血していたが——まだまだ健在といった様子だった。そんな彼の問いを受け、橘先輩の視線がゆっくりと方向転換する。

「ご名答だ、幻想人」

「そうか。では——もう名は聞かん。ただ死ねッ」

ヒュッと風を切り裂くようにイルマが大地を一蹴りする。目標は言うまでもなく、今まさに現れたばかりの先輩。先ほどの負傷によって錯乱したか……もはや返答など聞くまでもなく、第二라운드의幕が開ける。

しかし、そんなイルマに対して、先輩は《L11 No^{ノイン}in》を手にして目を細めるだけ。

「……先輩！」

土まみれの状態のまま、それを叩いて落そうともせず立ち上がる。
アリコーン
《純然たる白きツノ》を相手に真正面から待ち構えるなど、もはや正気のように思えない。

避ける気もないとか、あの人——無茶苦茶だ！

思わず、声を上げてしまった直己だったが、それでも先輩は動くことなくイルマのことを見返し続けていた。やがて直己も心情も露知らず、彼らは正面から衝突する。

夜明け間近の宇佐川に響き渡るのは、凄烈な刃鳴り。

「な……貴様……ッ！」

否、それだけではなかった。

イルマの光り輝く《純然たる白きツノ》^{アリコーン}は、先輩を弾き飛ばすには至らなかった。強靱な幻想の塊でできている幻想武器は、ビリビリと衝撃に震えるのみ。攻撃を真っ向から受け止めるのではなく逸らすことにより、先輩はイルマの一撃を見事に受け流していた。

夜明けの世界に満ちる、束の間の静寂。

苦々しい表情を浮かべているイルマに対して、先輩はのんきな笑みのままだった。

「せっかちさんだね。ま、それもいいか。面倒ごとは、早く始末するに限るもの——ね」

次の瞬間、先輩は反撃とばかりにノインによる刺突を繰り返していた。先制攻撃をしたにも関わらず、その利点を失ったイルマが一躍によって後退、舗装された土手を蹴り付け、距離を取ろうとする。だが、それは今に限れば失策だった。

「直己くん——『追撃』」

橘先輩の一声により、直己は自然な動作で《S09 Image^{イマ}ne》^ジを構え始めていた。少なくとも、これまで一週間みっちり戦闘技術を叩き込まれているのである。どのような状況であろうと、命令を下されれば一瞬で臨戦態勢に移るくらいは造作もない。

今まさに後退したイルマへと狙いを定め、手元に生まれた矢が弦を緊迫、解放。

「く……！」

屈辱の齒軋りを上げながら、イルマはさらに後退していく。飛来した骨組みの矢は、惜しくも《純然たる白きツノ》^{アリコーン}によって阻まれる。だが、もはや余裕など見せていられないという焦りが、そこか

らは伺える。

直己の射撃と時を同じくして、すでに追撃の手はずを整えた橘先輩が先行していた。ノインを握りながら猛追する先輩が、土手の右方から一気に回り込んでくる。

意図せずとも執行者同士で連携が取れていることに、その時、直己は素直に驚いた。

……そうか、もはやこれは殺し合いではなく、ただの殺しなのか。着地の衝撃をしなやかな体裁きで殺し、先輩が神速の突きを放った。防御が間に合わないと判断したか、イルマはさらなるバックステップを敢行、巨体に似合わぬ俊敏さで少しでも距離を稼ごうとする。それは正しい判断だ。だが、そこで距離を開けてしまえば、さらなる直己の射撃にその身を晒されることになる――

わずかにイルマの回避のタイミングが遅れ、右方からの先輩の攻撃が掠った。

「……ん？」

それに攻撃を加えた当の本人が、わずかに訝しげな表情を作る。しかし、思い当たる節が一つしかないを見て、先輩はわずかに戸惑いながらも口にした。

「直己くん、左方に回り込んで。何だか知らないけど……奴は右目が見えてないのかも」

「了解」

その声に反応すると、直己は弾けるように地を蹴った。何も考えずとも体は動く。それはつまり、これまで一週間してきた戦闘訓練がよほど真に迫ったものだったということか。

ともかく、直己は今この瞬間、戦いに特化された戦闘機械と成り果てていた。

自らの幻想武器《S09 Imagine》イマジンを抱えながら、言われたとおり左方へと回り込むため、円を描くように疾走する。狙うは死角からの制圧射撃。もはや命中率は考慮せず、その手元から生み出した骨組みの矢を五本連続で射出――

先輩の命令通り、左方からの攻撃に対してイルマの反応は悪かった。

全てを防ぎきることは叶わず、一発だけがイルマの胴体に直撃する。それだけでも関わらず、その一発の威力は甚大だった。直撃した部位からの流血は当然として、口からもおびただしい量の吐血が迸る。

さすがに連携の取れた二名が相手では、イルマでさえその実力は霞みつつある。

「……く、さすがに二名が相手では分が悪い、か」

しかし、それでもイルマは決して倒れない。それは憤怒による興奮か、それとも何か強い意志によるものか。どちらにせよ、まだ抵抗するなら攻撃を続けるまでだ。

「降伏したらどうか、イルマとやら」

さすがに反撃するほどの余力はないと見たのか、先輩が呼吸を落ち着けながら平坦な声色で言った。

「そうすれば、苦しみは一瞬だけだ」

「断る。それは死を意味するのだろうか？　なら、戦わずに降伏などできるものか。我は生きるために戦っている。彼女の生きる未来のために、だ」

「それは残念だ」

あっさりと吐き捨てる先輩の台詞は穏やかだが、瞳の剣呑さだけは失われていなかった。

「意地汚い人間どもが——愚弄するなッ！」

すでに満身創痍のように見えたイルマだったが、次の瞬間、強烈に地を踏み鳴らしていた。イルマが《アリコーン純然たる白きツノ》に眩い光を纏わせながら、先輩へと向けて一気に距離を詰める。これまでと何ら変わらぬ単純な攻撃。そのはずだった。

しかし、それが意表を突いたタイミングだったこと、あれほどの傷を負いながらも動けるといふ驚愕が、その時、橘先輩を一瞬だけ硬直させていた。

「って、うわ……あぶなっ」

生命の危機には違いなかったが、先輩は寸前のところで何とか側面に逃れる。相変わらざるの緩い発言には直己もげんなりさせられたが、そんなことも言ってられなかった。何故なら、奇しくも先手を取られたということは、一瞬と言えど、^{イニシアチブ}主導権を奪われたということだ。

そして、先輩が回避行動を取ったということは――

イルマが暴走する凶器と化したのを認識した時、すでに直己の肩からは自然に力が抜けていた。《S09 Imagine^{イマジン}》を目標の方向へと構えて、生み出された骨組みの矢を弦にかける。それを引く。呼吸を整える。無心のままに。指を離す。

直己の手元から、一射絶命の矢が放たれる。

予想通り、突撃するイルマは、すでに次の目標である直己へと方向転換していた。なぜこちらを目標にしたのかは、想像するに易い。二対一から状況を覆したいなら、まずは倒しやすい方から倒すのが定石というものだ。

「舐めるな、少年ッ!!」

集中の末に放たれた骨組みの矢と、イルマの《純然たる白きツノ^{アリュコーン}》が激突した。凄まじい火花が撒き散らされ、不快な金切り音が河川敷に鳴り響く――

だが、それは一瞬の交錯だった。

直己は動揺した。大気を灼いて直進するような一射を受けてもなお、イルマの瞳からは戦意が失せなかったからだ。そして、刹那の力比べの末、直己の放った骨組みの矢はたわむような音を発し、幻想人の超常能力の前に屈した。

あらぬ方向へと飛び去っていった矢を目撃した時、すでに直己の目前には憤怒を滾らせたイルマの姿。

「受けないで、避けて!」

先輩がこれまでにないほど痛切な声で叫んでいた。

しかし、そんな助言を完璧にこなすのは、半ば恐慌状態に陥って

いる直己には到底無理なことだった。咄嗟に長弓本体によって《純アリコン》然たる白きツノ》を受け止めてしまう。近接戦闘で絶大な効力のそれを受け止めた瞬間、直己は成す術もなく一撃にて吹き飛ばされていた。

後方に跳ね飛ばされると、反転した世界が見えた。

まだ戦闘態勢など取れるはずがないにも関わらず、なお猛然と突進してくるイルマが見えてしまい、直己は今度こそ終わりを覚悟した。このまま死ぬまで一角獣に蹴り回されるのが自分の最期なのかと、直己は自らを嘲笑った。

……なんだ。お似合いの最期じゃないか。

だが、反転した世界の端に、直己は一瞬だけ見てしまった。彼女の姿を。

「あ……あいつ、来てたのか……って、痛ッ」

受身を取ることも叶わず、直己は河川敷の地面に叩き付けられた拳句、慣性を殺しきれずゴロゴロと転がり回った。だが、直己にとつて最も幸運だったのは、それが舗装されたコンクリートではなかったことと、続くはずの追撃がなかったことだ。

全身に打撲を作り、ふらふらになりながらも立ち上がった時。

「これでチェックメイトね」

楽しげな一言が、イルマへと投げかけられた。

直己が背後をちらりと流し見ると、そこに凄絶な笑みを浮かべた夕莉が立っていた。しかし、彼女の瞳は直己を映すことなく、ずっとイルマへと注がれている。

つい先ほどまで直己のことを蹴り殺そうとしていたイルマが、一切の動きを止めていた。

「なぜだ……貴様、何故ここにいるッ!？」

モノケロス

殺しそうな勢いで睨み付けてくる一角獣のことを眺め、夕莉はくすりと邪悪に微笑む。

「教えて、あげようか？」

それが合図だった。

夕莉が自らの背中では隠していた左腕で、ふいに何かを投げるような動作をした。放物線を描いて投げつけられたそれが、液体を撒き散らして地面に叩き付けられる。

びしゃり――

今まさに地面に落下したそれは、一見すると何か毛玉のようにも見えた。が、直己はよくよく目を凝らしてみても、その認識を改めた。何故なら、それには目と鼻と口があり、繊維の固まりだと思っていたものは人の髪の毛だったからだ。その色合いは、どこかで直己も目にしたことのあるような――美しい亜麻色。

それは人間の生首だった。

目の前に投げ入れられたものを人間の部分だと認識した瞬間、直己は内部から嘔吐くものを感じ、身を折って口を塞いでいた。胃の中にあつたものが逆流する。しかし、夜通し何も口にはしていなかったため、胃液しか出すことはできなかった。

「なっ……」

驚愕の反応を見せたのは、何も直己だけではなかった。全くそのような展開を予想していなかったイルマが、信じられないような目付きで転がされたそれを見る。

そして、張り裂けるような慟哭。

「エ、レーヌ……お前……は、エレーヌでは……ッ!!」

今の彼には、周りの状況など見えていなかったに違いない。イルマは一心不乱のままに彼女の名残へと駆け寄ると、周りの目などに気にせず顔を近づけた。切り取られた頭部にある虚ろな瞳は、もはやイルマのことなど映してはいない。

怨嗟の呻きのようなものが、どこから聞こえていた。

「貴様、ら……貴様ら!! 許、さぬ……許さぬぞオ!!」

今まさに復讐鬼と化したイルマの悲嘆を聞いてもなお、それを眺めている夕莉と先輩の表情は何も変わりしなかった。

ふと、夕莉が能面のような顔付きのまま言った。

「そんなもの、端から期待していない」

「小娘、よくぞ言ったなア。殺してやる……！ 殺してやる……！ いや、殺してやるという言葉も生温い……ただ殺してやるだけでは済まぬ！ 貴様らのその体、一片の肉も残さず磨り潰す。もはや我に躊躇などない！ 貴様ら——いや、この世界の人間どもは全員皆殺しだツ！！ 貴様らなどがいるから、我は……我らはこんな世界に、こんな運命に……！！」

文字通り、血の涙を流しながら絶叫するイルマを一瞥だけして、夕莉は言い放った。

「そこまで守り通したかったのなら、あなたはもっと彼女を身近に置くべきだった。恨むなら自分の判断ミスを恨むことね」

夕莉はあまりに残酷すぎる事実だけを告げて、一息の後にこう語った。

「……さて、処女の娘に抱かれ初めて大人しくなる”憤怒”の化け物よ——あなたを縛っていた《ラスト・ミニット憤怒を殺す者》は、もういない。もうじき、あなたは理性のない”ただの化け物”になる。……もう、気が済むまで怒り狂ってもいいのよ？」

「なぜだ……一体、我らが何をしたというのだツ！？ 何故、我らがこんな——」

しかし、その言葉は最後まで続かなかった。

イルマの胴体部から、短槍のような幻想武器が突き出ていた。先輩が遙か後方から《ノインLee No in》を投擲して、暴走状態に入りつつあるイルマにトドメの一撃を加えたのだ。

もはや避ける術もないイルマが一撃を受け、重々しい響きと共に地面に倒れ伏す。

「そろそろ幕引きとしようか……面倒ごとはさっさと終わらすに限る」

今もまだうわ言のようなものを呟き続けるイルマのことを哀れそうに眺め、橘先輩は静かに決断したようだった。一度だけ直己たちの顔を見渡して、それから目付きを変える。

イルマの胴体に突き刺さっているノインが、その時、カツと光り

輝いた。

「さよなら、幻想人」

それが合図となって——夜明けの空を突き破り、凄まじい轟音が激突した。

辺りを騒然とさせる衝撃の余波に、直己は思わず背筋を震わせた。眩く視界を埋め尽くしたその能力は、《L11 No^{ノイ}in》に搭載されている”雷”の幻想能力だった。いくら小規模と言えども、あの落雷をまともに食らえば無事で済むはずがない。

事実、直己の予想通り、落雷によって脳天までを隈なく焼き焦がされたイルマは——それきり、二度と動くことはなかった。

焼き尽くされて異臭を放つイルマの亡骸に近寄り、夕莉がふと言だけ、漏らす。

「終わった、みたいですね」

「そのようだね……」

夜明けの宇佐川にて、彼女たちが意味のないやり取りを交わしていた。もうかなり朝が近い。東の空は太陽の日によって、ほんのりと薄紅色が広がっているように見えた。

こうして、執行者と幻想人との死闘はようやく終わりを向かえることになる。

しかし、どうしても直己は納得することなど、できなかった。どれほど理屈を捏ねようとも、どれほど自らに嘘を付こうとしても、到底ではしなかった。

自らを納得させることなど、ではしなかったのだ——

「——なんでだ」

気が済むまで胃の中のを吐き出すと、今度はどうしても抑えきれない激情が湧き上がっていた。直己は口元を拭いながら、亡骸になったイルマに一瞥をくれて吐き捨てる。

「……なんで——どうして——こうなった？ どうして、奴らはこんな殺され方をされなければいけなかった？」

愚問を問いかける惨めな直己へと、仲間である者たちの視線が突き刺さった。

この問いかけの後には、きっと直己を質す言葉が待っているだろう。だが、これははつきりと口に出さなければならなかった。今ここで感情を吐露してしまわなければ、きっといつか後悔する。だから、これだけは言わなければならなかった。

——例え、どんな結末になろうとも。

「なあ、答えてくれ。夕莉、先輩……答えてくれよッ！ 俺は分からないよ……どうしても分からないんだ。幻想人って奴らは本当に殺されなきゃいけなかったのか。宿命なんて建前じゃなくて、俺たちはなんで奴らと戦わなければならなかったのか。どうして、あんたらは何の疑いもなく、こんなことをできるのか……」

肺の中にある酸素を使い果たし、直己は絶叫した。

「俺には、分からないんだよッ！！」

ずっと抑え込んでいた本心。それを言葉にするのは、感情を押し留めている堤防を決壊させることと同義だった。しかし、今の直己はどうしても、この世の不条理を嘆かざるを得ない。

吐き出し始めると——止まらなかった。

自らの両目から止め処ない涙が溢れてきていることに、ふと、気付いた。

「どうして、あんな殺し方をしたか？ 簡単よ。《憤怒を殺す者》^{ラスト・リミット}の一部を見せ付けることが、最も《純然たる白きツノ》^{アリコーン}の心を折るのに適していたから」

早朝の河川敷で、その声は透き通るような明瞭さをもって告げられた。

「……それにしても、直己、今のあなたはとてもみつともない」

ゆっくりと近付いてくる夕莉の姿を、直己は涙の溢れ出る両目で見届ける。彼女の手には《S O 9 R i d y》^{リディ}。今度こそ本当に殺されると思ったが、不思議と恐怖はなかった。殺されるのなら死んでやる。それくらいの心持ちだった。

しかし、今まさに引導を渡そうとする夕莉の歩みを、先輩は腕一本で制した。ゆるゆると先輩の首が振られると、夕莉は戸惑いながらも歩み寄ることを放棄した。

まるでそよ風が凪ぐように、先輩は穏やかな口調で問いかけた。

「それで、満足かい？」

詰問しているわけではない。だが、静かに諭そうとしてくる先輩を直視することができず、直己は視線を逸らした。

「分からないなら、君に教えてあげようか。あたしたちが何と戦っているのか、どうしてそこまで戦いを望むのか。……何故、疑いもなく戦い続けられるのかを」

幻想人たちの名残が淡い光を舞い散らせながら、この世界から消失していく。それが今の状況には似つかわしくないほど、綺麗で、美しかった。

「……返答はなしかい。まあいいや、続けよう。執行者にとって幻想人と戦うのは宿命だ……と、これまで君には伝えていたはずだね。今だから言っけど、あれは半分当たっていて、もう半分は嘘だ」

「どういう……ことですか」

一度は目線を逸らした直己だったが、それには再び先輩を見返さ

ずにはいらなかった。

先輩は軽く肩をすくめながら、まるで道化のように語る。

「何、簡単なことだよ。あたしたちだって宿命なんて言葉を軽く受け入れるほど、無謀な人間ではないということさ。加えて言うならば、自分の命を天秤に乗せていることも理解しているつもりだ。……でもね、あたしたちには多大なリスクを負ってでも戦い続ける理由がある」

そこで先輩はいつもなら見せないような自嘲を滲ませた。

「君なら薄々感じていたんじゃないかい？　あたしたちだって、同じだよ。ここにはない幻想を求めている。アリスとの契約でね、とある幻想人を討ち取った時、あたしたちは自らの幻想を叶えてもらえる約束になってるんだ。だから、そのため——あたしたちは戦っている」

「そんな……」

「あたしたちはね、例え、自分の命を失う可能性がある……幻想を求めずにはいられない体質なんだ。だから、そのためなら何でも犠牲にする。幻想人を殺そうが、目撃者を消そうが、私情を犠牲にしようが、手段なんて選ばない」

「そんな、馬鹿な……」

あまりにも壮絶すぎる覚悟を聞いて、直己はそれ以上の言葉が出なかった。ただ声を殺して、必死に目をつむり、滂沱として流れ出る涙を地面に落とすことしかできなかった。

「こんなことがあって……たまるか」

「そうだね、君には同情もする。でも、あたしたちは本気なんだ。」

——ね、掛け値なしの馬鹿だと……思うだろう？」

それを聞いた直己は、もう何も言うことなどできはしなかった。軋みを上げるほどに齒を食いしぼり、今にも出かける嗚咽を堪える泣かずにいらなかった。あの幻想人たちはそんなことのために死んでいったのだから。

……いや、この涙はきつと、奴らのために思ってたものじゃない。

もしかすると、自分は奴らが可哀相だから泣いているのではなく、こんな境遇に遭っている自分が可哀相だから泣いているのだ。そう考えると、直己の心は余計に軋んだ。なんて残酷な世界、なんて糞つたれな運命、なんて薄汚れた自分。

「もうあんたらなんか……付き合ってられるか」

もはや、今の直己にはそれを言葉にするのが精一杯だった。

十

「……あいつ、逃げちゃいましたけど」

先ほどまで泣き言のようなものを言っていた直己は去ってしまった。その背中を冷めた視線で見届け、夕莉は理解不能な判断を下した美鈴へと向け、そう独りごちるように呟いた。

美鈴は腕を組んで難しい顔をして、それから夕莉の方へと緩やかに振り返る。

「まあ、仕方ないんじゃないかな。普通の人間からしたら、あれが正常だと思うよ」

「……これで良かったんですか？」

眉間に皺を寄せて問い返してくる夕莉は、どこか不満げな顔付きをしている。

「仮にも執行者のトップである先輩が甘い判断を下すなんて、私たちの士気に関わりますよ。それにアリスの掟にも引っかけられます。何を考えてるんですか？ そのところ、はっきり答えてください」

「やれやれ、夕莉ちゃんもやけに噛み付くね……皆、あたしばっかり責めるなんて酷いな」

「当然のことを言っただけです」

「やれやれ、君はこういうところが生真面目だね。……ああ、分かっている分かってるって、だからそんなに睨むのは止めなさい。まったくもう……」

どうも制御の利かない後輩の発言にうんざりさせられながらも、

美鈴はそれらを溜息に変換するのみだった。

「彼にも色々と思うことはあるんだろうしね。本当は少しずつ慣らしていくつもりだったんだけど、今回は大物だったし。仕方ないことさ。それにまだ完全に逃げたとは言いい切れない、とあたしは思ってるんだけど」

「のんきですね……」

「焦ってもしようがないじゃない。大体、本当の敵は白ウサギだよ？ あたしたちの望みが叶うのは、奴を倒した時しかありえない。今は少しでも戦力が欲しいのさ。今回の幻想人だって、奴らの差し金である可能性は否定できないし——」

「そう言われれば、まあそうですね……」

「夕莉ちゃんは何か不満がある、と？」

この子は何が気に入らないんだろうか——顎に手を当てて思案している夕莉を眺めてから、美鈴は困ったような仕草で問いかける。これまでも夕莉はあまり感情を出すタイプではなかったが、それにしても内面が読めない。

「……いえ、それが先輩の判断だというのなら尊重します」

「結論が出たか、よろしい。ま、彼のことは今は暖かく見守ってあげようじゃないか」

「暖かく、ですか……」

何が暖かくだ、と今にも言いそうな夕莉の表情を見透かして、美鈴は内心で苦笑する。

「そう。ここで折れるようなら、その時はもう一度彼に問うだけだよ。でもね、本当に何となくだけど、あたしは彼が幻想の世界に舞い戻ってくるような気がするんだよね」

今度、額を押さえて溜息を吐いてみせるのは夕莉の番だった。

「……また例の直感ですか」

「直感で悪かったね。でも、あたしは信じてるのよ」

「何を根拠に」

夕莉が呆れたような眼差しで、美鈴のことを見つめ返す。だが、

彼女はそんなものを物ともせず、いつもの隙のない微笑みで、はっきりと宣言した。

「何を根拠に？ それこそ愚問だよ。彼が人一倍の——ロマンチストだから、さ」

Chapter 1 - 04 : ハジマリの終わり（後書き）

Chapter 1 : White beast（終）

Chapter 1を書き終えて。

いや、慣れないことはするもんじゃないですね（何）

変に文章意識しちゃって色々ときましたし。もともと文体があつてないのかな？ まあ、それはともかく……今回はなんというか歪な構成をしていますね。恐らく、読んでくれた方なら分かっていただけるんじゃないでしょうか。どっちかという後半に向けて加速していく感じじゃないかな、と個人的には思っているのですが。どうでしょうか？

返事はさておき。

このChapter 1は題の通り、僕の構想した物語の序章部分みたいなもんです。実際、説明とか多かったでしょうし、キャラに關しても触れていない点がかなりあります。そこらへんは次回からということになりますね。それにしても、序章にしては結構な分量ですよ。実力不足とか言われたら否定できない自分ですが、こんなで大丈夫なのか。一応、最後のIntroductionは含めずにChapter 5までを構想しているのですが……ほんと、こんなんで大丈夫なのか（汗）。書き手にも不安があるのは否めません（大汗）。

でも、やっぱり書き終えた後は清々しいですね。書いててよかったって思える瞬間です。読んでくれた皆様は色々な思いをお持ちでしょうが、まあ本人としては今のところ満足です（笑）。

この調子で次も順調に書き進められたらいいなあ……。

書きたいこといっぱいありすぎだ（汗）。

順調に書き進められたらなんて言ってますけど、アップさせる時はそれなりのペースでアップしたいと思ってます。ただ、なにぶん書くのがスローでして。今回はもしかすると数ヶ月放置とかザラかもしれません。気に入ってくれた方がいたら、あまり期待しないで気長に待ってくれれば幸いです。

あ、書き忘れた。Chapter 1まで書いたから検索除外の設定は外しておきますね。

長いっすね（苦笑）。ここらで終わっとう。

とある土曜日の朝、坂下夕莉は待ちぼうけを食らっていた。

今、夕莉がいるのは夢見ヶ丘駅前である。その駅自体は別段大層なものではないが、今日は休日ということもあり、駅前にはちらほらとどこかへ遠出する者たちの姿も散見できた。それらは皆、これからの余暇を楽しむという目的の下、嬉々とした期待を浮かべている。

しかし、駅前で待ちぼうけを食らっている夕莉は少し違っていた。
「……遅い」

もともと整った顔立ちの上、スタイルもいい。軽く微笑んでいれば、辺りの者たちの視線を惹きそうな容姿である。しかし、今の彼女はそんな表情とは程遠く、ムツとした不機嫌そうなものを浮かべていた。

駅前のハトを視線で追いかけながら、夕莉は鬱陶しそうに自らの黒髪を掻きあげる。

そんな彼女の下に、遠くからパタパタと駆けてくる足音。

近くを歩き回っていたハトを一目散に飛び散らせて、その足音の主は夕莉の目前にて停止した。肩で息をする気配が伝わる。夕莉はふと視線を持ち上げ、その人物を見る。

「いやあ、ごめんごめん。遅刻しちゃったよ」

テヘ、とでも言いたげに自らの頭をコツンと叩き、誤魔化してみせるその人物は——見紛うことなく、先輩の橘美鈴である。乱れた栗色の髪を慌てて直しながら、相変わらず不機嫌そうな夕莉へと薄っぺらに笑いかけてくる。

駅前で待ち合わせていた彼女たちの服装は、どちらもいつも学校

や”庭”で目にするような制服ではなく、私服である。

「遅いですよ……十分の遅刻です」

「それはね、二度寝をしちゃったから仕方ないんだよ。やっぱり日頃から過酷な労働に借り出されちゃうとき、こういうささやかな誘惑に負けちゃうのよねえ。って、まあ、そんなことはどうでもいいか。めんごめんご」

「謝る気あるんですか？ 自分から予定しておいて遅刻するとか、まったく」

「返す言葉もございません……」

腕組みをして明らかに不機嫌そうな夕莉を見て、さすがの美鈴も誤魔化せないと判断したか、両手を合わせてぺこぺこ頭を下げる。どう見ても年上である美鈴が必死に謝罪している光景は、辺りの人たちは奇異に映ったらしい。人々の視線が集まり始めると、夕莉は何となく齒痒い気分になった。

「ああ、もういいです。先輩、分かりましたから……行きましょう、ほら」

「夕莉ちゃんは優しい子だなあ……」

なぜか涙ぐみ始めた美鈴の背中を押しながら、夕莉たちは人々の視線から逃げるように駅前を後にした。それにしても、何でこんな人と貴重な休日を共にすることになったのだろう——夕莉は今更になって疑問でならない。

そもそも、こんな予定が立ったのはつい数日前のことである。

十日ほど前、一角獣という大型幻想人を片付けてから、執行者たちの仕事は通常任務に戻っていた。幻想人と言っても、時たま現れる小型の雑魚を狩るくらいであり、しばらくは大きな仕事も舞い込みそうになかった。それでちょうど暇を持て余していた美鈴が、ふと夕莉に遊びに行かないかと持ちかけたのである。

あの時は何も考えずに了承してしまったが……しかし、よくよく考えると面倒なものだ。色んな解釈ができるが、主にこの人物的な意味で、である。

人目につく駅前から少し離れると、演技が大げさな美鈴へと向け、わざとらしく話題を振る。

「……で、もちろんどこに行くかは決まっていますよね？ 先輩」

返答しだいでは溜息も禁じえなかったが――

「もちろん！ 今日の予定を決めてこないと思ったかね、夕莉ちゃん。さすがのあたしでもそこまでは無計画じゃないって！」

「そうですか、少しだけ安心しました」

さすがに計画くらいは立てていたか。ふんぞり返って自信満々に言われたことだけは、夕莉も少しイラツとしたが。

「そして、奇しくもあたしが行こうと思ってた場所は、ちょうどこっちだね。ほら、あれ」

美鈴の指に導かれ、夕莉の視線がゆつくりとそちらへ向いた。ちょうど前方にあったのは五階建てほどの建造物、もといデパートだった。上の方にマトバデパートと書かれている。どうやら、これがこのデパートの名称らしい。

「……あれですか、大きいですね」

「そうですよ。ほら、行こ行こ」

「あ、先輩、そんな急がなくても……」

だが、そんな言葉は美鈴には届かなかったようだ。夕莉の手を引っ張っていく美鈴の表情は、これまで見たことがないほど楽しそうなものだった。普段はあまり感情を表に出さない夕莉も、その時ばかりは、少しだけ胸中に期待が過ぎる。

そして、デパートの自動ドアが開いた。

「……はあ、どうしてこうなったんだか」

とある衣料店の試着室。そこに現在進行形で運ばれてくる服に着替えながら、夕莉はふとそんな一言を呟いていた。

先ほど運ばれてきたワンピースに着替えるため、夕莉はまた服を脱いだ。もう何度こんなことを繰り返したのか。鏡に映る自分も、下着姿の自分も、今日はもう見慣れてしまった。果たして、これが

人並みの休日の過ごし方なのだろうか。

新たにワンピースに着替え、一通り鏡で確認した後、カーテンを開く。

「おおっ、夕莉ちゃんすごいすごい。超似合ってる」

先ほどからほとんど同じ台詞だった。美鈴の言葉を聞いて、夕莉は表情には出さずに心の中で嘆息した。一体、この人はあと何回これをやらせるつもりだ。

「じゃあ、次はこの服ね」

「あの……先輩、もう私を着せ替え人形にするのは止めてもらませんか」

すると、美鈴が一瞬だけ驚いたような顔をして、それからまた大げさに笑ってみせる。

「だあってえ。夕莉ちゃんてば、何を着せても似合うんだもん」。

つつい、その辺にある色んな服を持つてきちゃうんだもん……むう、可愛いなあ、色々着せてみたいなあ」

比喩にしろ、夕莉は自らを子供扱いすることが腑に落ちなかったが——美鈴のはしゃぎ様は、まさに幼い子供を目にした女子のそれと同じであった。

「先輩、いい加減にしてください」

駅前の時のようにまた人目を集められても困る。斬りつけるように一言を放つと、完全に自分の世界にトリップしていた美鈴がたじろぐ。

「こ、怖っ。ああもう、後はせめて可愛い顔ができれば文句なしなのに……」

「余計なお世話です」

「キッパリ言い過ぎるのも難点だね。ま、でもそういうところは愛嬌よね。こういうツンツンした女の子が見せるか弱い一面ってそそられるし……ああ、これが最近流行のツンデ」

「人の話を聞け」

「……あたしは、こんな無礼な子にした覚えのないに」

もう突っ込みどころが満載である。むしろ、突っ込んで欲しいのかと思わせるネタの豊富さには、さすがの夕莉も呆れ返る。そして今のこんな夕莉でさえ、もしかすると彼女の手の中で踊らされている存在なのかもしれない。

「まったく、先輩は育ての親ですか。……ともかく、店員さんを冷やかすのもそろそろ止めにしましょうよ。私は着替えてくるので、決してカーテンは開けないように。それと持ってきた服はちゃんと返してきてください、先輩が勝手に持ってきたんでしょ？」

言うことを全て吐き出してから、シャツとカーテンを引いてワンピースを脱ぎにかかることにした。

「開けないで、と言われると開けたくなくなるのが人のサガというか……」

「オヤジですか。無駄口を叩いてないで、服を返してきてください。自分がやられて嫌なことは——」

「分かってる、分かってるって。返してくるってば……」

さすがに弄るのにも限度があると悟ったのか、美鈴が足音だけを残して消えていく。それをしっかりと確認してから、試着室の中で夕莉はそつと息を吐いた。それにしても、本当になんでこの人を連れてきたのだろう？ 判断ミスにも程がある。

やがて、服を戻し終えて帰ってくる美鈴の足音がした。

「さて、戻ってきたわけだけど。どうも夕莉ちゃんて遊んでたおかげで、もう昼食時っぽいね。そろそろお昼でも食べに行こうか？」

「そうですね。先輩の遊び道具にされて疲れちゃいましたし」

そつと毒を吐くと、カーテンの向こうからおどけた響きが返ってくる。

「ははは、こやつめ」

「……先輩、今日は本当に絶好調ですね」

あまりに調子が良いすぎて不安になるくらいだ。だが、内情はどうあれ、時間も時間である。そんな不安はさっさと忘れて、夕莉は早急に昼食のことに頭を切り替えることにするのだった。何せ、休日

の時間も限られている。

勢いよくカーテンを開いて、夕莉はいつも通りの冷めた表情のまま、言った。

「さ、早く次に行きましょう、先輩」

結局、夕莉たちの昼食はよくあるようなハンバーガーシヨップに決まった。レジの前でチーズバーガーとポテトとコーラを受け取ると、夕莉はいつもの愛想ない表情のまま、美鈴のいるテーブルの下へと向かっていった。

すでにセットを受け取って席を確保していた美鈴は、ポテトをつまみ食いしながら待っていた。その向かい席に座り、夕莉はこれまで秘めていた疑問を、ふと口にした。

「ずっと考えてたんですけど、先輩はどうして私を誘ってくれたんですか？」

すると、指先に付いた塩を舐め取りながら、美鈴が何ともなさげに答える。

「んー？ 単なる暇つぶしかな。それとデート」

「……悪い冗談はよしてください」

「ふっふ、そう来ると思った。でも茶化しはしたけど、嘘は言っていないよ」

がつくりと肩を落としかけた夕莉だったが、その反面、美鈴の一面がチラリと見えたこともあり、あえて何も言わなかった。自らのハンバーガーの包み紙を開き、一口食べる。それに合わせて、今度は美鈴が問いかけてくる。

「そつえば、あたしも気になってたことあるんだけど。夕莉ちゃん、もしかしてこのデパート来たことなかったりする？」

「ないですね。私はあまり外出とかしないタチですし」

「そつか、意外だなあ。初めてなんだあ……」

ストローで手にしたコーラを飲んだ後、意味ありげな美鈴が続けて、言った。

「でもま、色んな店があるでしょ？　今度はあたしとじゃなくて、直己くんと来てみれば？」

思わず、夕莉は持っていたハンバーガーを落としかけた。ふと視線を戻すと、美鈴が嫌らしい目付きで夕莉のことを眺めている。それだけを確認すると、夕莉は反射的に咳払いをしていた。どうにかして自分のペースを取り戻そうとする。

「……どうして、そうなるんですか？」

「夕莉ちゃん、今ちよつと動揺したでしょ」

「してません」

「そんなムキになって言い返さなくても。まあ、どっちでもいいけどさ」

「く……」

何かを悟ったように得意げな顔で言い放った美鈴を見返しつつ、夕莉はなんだか会話の流れが嫌な方に傾きつつあるのを予期した。こういう時、クラスで出会うような同級生なら脅しの一言で軽くあしらえるのだが、なまじ付き合いのある執行者の面子ともなると、相手もそれなりに往なし方があつて面倒だ。

夕莉は何とか平静を装いながら、辛うじて返す。

「……まあ、機会があれば考えても……いいかもしれませんね」

「あら、意外に素直。夕莉ちゃんなら頑なに否定すると思ったのに」
いつもの手口を読まれている——と、夕莉は内心で美鈴のことを少し恐怖した。

「私はいつでも素直じゃないですか。ほら、あの時だって——」

「なんだか、いきなり喋りが滑らかになった。なんか、らしくないぞ？」

「気のせいじゃないですか……」

何か言葉を返すたび、夕莉は自らの仮面が剥がされていくような変な気がした。美鈴が必死で誤魔化している夕莉のことをまた眺め、つまらなそうに呟く。

「夕莉ちゃんのいけず……」

夕莉にしてみれば、それはどっちのことだ、と思う。

「ところで。やっぱり、私とあいつのことって校内では少し噂にな
ってるんですか？ 先輩の耳にはとっくに入ってるでしょうから、
あえて聞きますけど……」

「うん、普通に噂になってるよ」

「そうなんですか……」

「ということは、校内でもそこそそ有名になってるのだろうか。夕
莉はあまり学校で人付き合いを好まないの、こういった情報を提
供してくれる存在はそれなりに貴重だ。」

「で、それ知ってどうするの。彼を振ったことには変わらないんで
しょ？」

「それは、まあ……」

なんとなく夕莉は気まずそうにポテトを摘む。

「ふむん。やっぱり、今度は直己くんどこかに行ってくるといい。
あ、別に不純な動機じゃなくてね。ただ君たち、もうちょっと仲良
くしたらどうかな。仲間なんだし」

「聞いているのか聞いていないのか、何も言わずにもごもごとポ
テトを食べている夕莉を見て、美鈴が困ったように苦笑を貼り付け
る。」

「やれやれ……ま、いいけどね。でも、君たちの問題は、君たちで
解決してね。さて、あたしはとりあえず食べた。またどこかに行こ
うじゃないか。服屋とかどう？」

「お断りします」

「今度はハンバーガーのケチャップを口元に付け、夕莉が厳肅な面
持ちで切って捨てる。客観的に見れば迫力も何もあったものではな
かったが、今の彼女は気づいていない。美鈴も何とも言えないよう
な微苦笑を浮かべているだけである。」

「さすがにね。……ところで、ケチャップ付いてるよ」

「あ、先輩、ありがとうございます」

「そりゃどうも。で、話題を戻すけどさ。映画なんてどうかな？」

ラブストーリーとか」

「……先輩、絶対にわざとですよね？」

先ほどまでその手の話題で散々弄ってくれたというのに、これが狙ってないと言えるものか——訝しげに問い返してくる夕莉に対して、美鈴が持ち前のとぼけた態度を発揮する。

「ん、何のことがなあ？」

今まさに紙コップを掴もうとしていた夕莉の手が、突如としてわなわなと震え出す。

「……あのですね、先輩。いい機会なので私から言っておきたいことがあります」

「な、何かなあ？」

何か嫌な予感のようなものを感じつつも、さらに続けてとぼけてみせる美鈴に、夕莉の頬の辺りがピクピクと引き攣る。

「私には許せないことが三つあるんです。先輩、よく聞いてくださいね？　一つ目は時間にルーズな人。二つ目は他人を物のように扱う人。三つ目は呼吸するような頻度で、意味深なことを言ったり、人を不安させる言動を吐く人」

「うわ、ふしぎだなあ。全部当てはまるや」

そろそろ直視できなくなったのか、その視線を天井の方へと向けつつも、それでも美鈴は未だにとぼけたままだった。その人を食った顔を、夕莉は驚くほど自然な笑顔のまま見つめ返す。だが、その目だけは決して笑ってはいない。

「不思議ですね。本当に……不思議です」

「ひつ、悪かった。悪かったからあゝ、そんな怒らないで〜！」

「謝っても、許しませんよ？」

夢見ヶ丘駅前のマトバデパートにて、午後一時ごろ、美鈴の悲痛な叫びが響き渡った。どうやら、まだまだ彼女たちの休日——終わりそうになかった。

Interlude 1 - 01 : とある休日のこと（後書き）

Interlude - 01（終）

題して息抜き編。

いや、誰も死なないっていいですね！　こういう緩いのもたまにはいい。

本編がどうもシリアス向きなのもありまして、こういうのはChapterの間によちよちよこと入れていきたいと思います。どうも前回、思いの丈をぶつけてしまったようなので、今回はちょっと短めに。

せつかなので、予告編じゃないけどこれくらいは。

Chapter2はUgly creatureというくくりになると思いますヨ。

登場人物の紹介（暫定）（前書き）

邪道かとも思ったのですが、構成が分かりにくいのも事実ですし、こっぴうのも一興かなと思ひ直して作ってみました。ぶっぢゃけ結構適當ですが。

ひとまず現時点までのをまとめました。多少ネタバレあり。

登場人物の紹介（暫定）

登場人物（暫定）

■ 菅原 直己

夢見ヶ丘高校の一年。

とある事情により執行者となる。幻想武器は無形の《S09 I
マシン
magine》。

全編通しての主人公。

■ 千坂 夕莉

夢見ヶ丘高校の一年。

校内では美人で有名だが、性格がキツイため近寄る者は少ない。
執行者。幻想武器はレイピア型の《S27 Riddy》^{リディ}。

■ 橘 美鈴

夢見ヶ丘高校の三年。

掴みどころのない性格で、執行者内では最年長。また経験も長く
ベテラン。

幻想武器は短槍型の《L11 No^{ノイ}in》。

■ アリス

幻想人。

事実上での、執行者の生みの親。夢見ヶ丘高校の裏、雑木林の奥
にある”庭”を管理している。

幻想能力は《異次元^{ヴァイジョン}を観測する瞳》。

他の幻想人を殲滅しようとしているが、その目的は未だ不明。

—— Chapter 1 の幻想人

■ イルマ

夢見ヶ丘市に出現した幻想人。

ユニコーン（モノケロス）であり、その外見は白馬であるが人語を解す。

幻想能力は《純然^{アリコーン}たる白きツノ》。

■ エレーヌ

夢見ヶ丘市に出現した幻想人。

モノケロスは処女にのみ懐く、^{ラスト・リミット}という逸話が具現化した存在。幻想能力は《憤怒を殺す者》。

— Others

■ 白ウサギ
幻想人。

アリスや執行者との因縁があるようだが、現状では幻想能力・目的ともに不明。

Chapter 2 - 01 : 灰色の生活（前書き）

Chapter 2 : Ugly creature .

0

次元のトンネルを抜けた時、そこは異世界だった。

とある日の夜中、午後十時ごろ。夢見ヶ丘市の南にある埠頭、その倉庫街の辺りに——今、新たに一人の幻想人が降り立った。

世界同士を繋いでいた暗黒の穴が消えていくのを見届けた後、今まさに新天地に降り立った”彼”は、何かの気配などまるでない、静まり返った倉庫街を警戒しながら見回した。見慣れぬ世界を何度も見回しながら、”彼”は以前いた世界との決定的な違いを感じずにいらなかった。

以前の世界とは、何もかもが違う——

素足のままの”彼”が踏みしめている地面は、コンクリートによって固められている。しかし、それを”彼”は目にしたことがない。また同じように、一帯に等間隔で並んでいる倉庫の意義も、今の”彼”には分からなかった。とりあえず、どうも想像していた世界とは、また毛色の違ったところに来てしまった……というのが、今の”彼”の正直な感想であった。

ここは——どこだ？

前情報など何もなく飛ばされてきた”彼”には、そんな前提となるようなことさえ分からなかった。とすれば、ひとまずは探索でもして、ここがどういった世界なのかを理解するのが肝要だろうか。”彼”はそんなことを考える。兎にも角にも、情報がなければ始まらない。

少しの黙考の後——

醜き怪物である”彼”は、まず近場から世界を探索していくこと

を決めたのだった。

—— ジャンク・ボディ
《不滅縫合体》

—— ヘイトレッド・エッジ
《具現する憎悪の刃》

それらが”彼”の出現した際、その身に宿すこととなった幻想能力の名称だった。

1

幻想人と執行者の戦いを目の当たりにしてから——一ヶ月が経った。

先日、梅雨が明けたばかりの空は驚くほどに澄み切っていた。そんな夏の空を見上げながら、放課後、菅原直己は校舎の屋上である人物との密やかな会話を繰り返していた。直己が”庭”^{ガーデン}に赴くことがなくなってから、時折、その人物は姿を見せるようになった。

いつもの鉄面皮の上から、その人物が問いを投げる。

「……で、今回も私たちに協力する気はないと？」

「残念だけど、ないな」

ぼんやりと見上げた空から視線を向けることなく、直己はそれだけを答えた。これまでも何度か繰り返された問いに対しては、その答えもいつも同じである。そして、その答えを聞いた後、問いかけた人物——坂下夕莉の表情が曇るのも、もはやいつものことだった。夕莉は何か言いたげな表情をしたが、それを口にすることはなかった。

「そう。……なら、仕方ないわね」

彼女はただ背を向けると、いつもの定型句を発した。

「また、明日」

直己もいつも通りの言葉を投げたが、しかし、それに彼女も振り向くことはなかった。冷淡な足取りのまま屋上の出入り口のドアを

開き、何も言わずに去っていく。

「……はあ」

誰もいなくなった校舎の屋上で、直己は一人静かに溜息を吐いた。あの一角獣モノケロスに関連する幻想人たちを片付けてから、もう一ヶ月が経った。あの日、直己は執行者である夕莉や先輩に対しての疑問をぶつけてから、もう”庭”には行かなくなっていた。それは自分の中でああいった出来事に関わりたくないと思ったのが半分、そして執行者たちがどういう者たちなのか、理解できなくなったのがもう半分だった。

執行者たちとは、自らの命と何を天秤にかけて——戦っているのか。

到底、直己には理解することなどできない。もちろん、幻想人の危険性は身を持って体験した。あのような存在が知らぬ間に世界を侵略してくるというならば、それは確かに脅威だろう。だが、それでも直己は納得できないのだ。彼女たちが求めている”何か”は——果たして、幻想人を無惨に殺し尽くしてまで、価値のあるものなのかどうか。

「……ま、考えても仕方ないことか」

人の考えていることなど、所詮は分かるはずもない。直己は思考することを止めて、いつも通りに帰宅する準備を整えるため、教室に戻ろうとした。

しかし、その時、ふいに屋上のドアが開いて、聞き覚えのある声がした。

「お、いたいた。よつ、一人で黄昏てたの？」

思わず、直己が視線を向けた先に現れたのは——一年四組、同じクラスの男子生徒である有馬祐二だった。さすが運動部をしているだけあって体格がいい。短く切り揃えられた髪は整髪料によって整えられ、さっぱりとした爽やかな印象を形作っている。

そんな祐二のことを眺めて、直己は少し驚いた後、こつ漏らした。「何だ、祐二か……」

「何だとは何だ。それより、俺の質問には答えてくれないのかよ」
呆れたように肩をすくめ、有事は気取らない態度のままに話しかけてくる。この人を選び好みしない性格が、現にクラスでの人気を支えている一因だろう。

「あ、ああ……悪い。そうだな、黄昏てたと言われれば、確かにそうかもしれない……」

「そうかい。でも、さっきさ、屋上に上がる階段のところで坂下さんと擦れ違ったぜ？」

「……何が言いたい」

苦虫を噛み潰したような表情で返す直己のことを見て、祐二は軽くとぼけてみせた。

「いや？ ほら、直己さ、一ヶ月くらい前に坂下さんに振られてから、妙に落ち込んでたじゃん？ だからさ、俺はそれを今も引きずってるのかなあって思ってたんだよ……でも、何だか杞憂だったみたいだな。何、最近は仲いいわけ？」

「そう見えるか？」

すると、祐二は少しだけ考え込むように宙へと視線を向けた。

「擦れ違った時の坂下さん、妙に怖い顔してたなあ……お前ら、一体どんな話してたんだ？ なんだかんだで仲いいと思ってただけどなあ……だって、お前らが話してる目撃談は結構あるんだぜ？」

一部ではやっぱり付き合ってるんじゃないかと……」

「そ、そっか……やっぱそういうの、あるんだ」

何となくむず痒い感覚に襲われて、直己はとりあえずそう返したが、そんな返答を聞いた祐二がにやにやとした笑みを浮かべながら、直己の腹を肘で叩く。

「なんだよ、満更でもないような顔しやがって……羨ましいなこの野郎」

「いや、違うつて。そういうんじゃない。俺は、ただ——」

彼女に話したけられただけだって——と、そう言おうとしたのだが、その言葉は無情にも途中で掻き消された。それは派手な音を立

てて、屋上のドアが開かれたからだった。そこから姿を現した一人の女子生徒が、呆れるような表情のまま直己たちを見返している。「声でつかいねえ、キミたち。下まで丸聞こえだよ〜?」

間延びするような聞き覚えのあるその声は、直己や祐二と同じクラス的女子生徒、日向春菜のものだった。

「うわ、しまった……春菜が来ちゃった」

祐二が失敗したとばかりに天を仰ぎ、自らの手で目元を覆った。

「ちよつと、わたしが何なのよお。もしかして、何か邪魔しちゃった感じ?」

緩くウェーブのかかった髪を揺らしながら、春菜が少しだけムツとした表情のまま近寄ってくる。クラスでもよく「天然」という評価で通っている彼女は、動作がことごとどこか子供っぽい。しかし、それがしつかりと魅力として昇華しているような、そんな少女だった。

「いや、そういうわけじゃないんだけどね……」

一応、直己はフォローを入れるためにそんなことを切り出した。

しかし、当の春菜自身はあまり気にしていなかったのか、直己の方を見て一度だけにこりと笑った。

「直己くんは優しいねえ。祐二くんとは段違い」

「春菜、お前……その顔で時々黒いこと言うよな」

「えへへ、それほどでもないよ〜」

「いや、褒めてないって……」

祐二が眉間の辺りを押さえながら、そんなことをぼやく。だが、当の本人である春菜はあまり気に留めなかったらしく、ずいとその身を直己たちの輪の中に割り込ませていた。

「それはそうと、さっきまでの話は面白いね。続けて続けて。実はわたしも坂下さんと直己くんの恋愛情報については気になってたんだからさあ」

「いや、その……」

適当に場を誤魔化そうとした直己だったが、その具体案が思いつ

かず、おどおどするしかなかった。すぐ隣にいる祐二が厳肅な面持ちのまま、ぽんと肩を叩いてくる。今の状況をこいつに言わせれば、諦める、ということか。全くの他人事とは言え、少しはデリカシーってものを考えて欲しいものだ。

困ったように頬の辺りを掻き始める直己に、春菜が興味津々な顔で切り出してくる。

「ねえ、ぶっちゃけて聞いちゃうけど」

「な、何？」

「直己さんと坂下さん、付き合ってるの？」

「……ぶっちゃけすぎだな」

祐二が苦笑を貼り付けながら横槍を刺してくる。

「当事者じゃない祐二くんは黙ってて」

「へいへい……」

どうも会話で除け者にされつつあるからか、祐二は苦りきった表情でただそう漏らすだけだった。それに対して、これまた痛いところを突かれてしまった直己もまた、困ったような苦笑いを浮かべることができない。

「さっきも祐二に言ったけど……付き合って、ないよ」

「なあんだ、つまらないなあ。あ、そうだった、直己さんと祐二くんの声がしたつてもあるんだけどさ、なんか机に放置されてたから持ってきたんだよ、ほらこれ」

そう言って、春菜が唐突に制服のポケットから何かを取り出した。その手に握られていたのは『不思議の国のアリス』の単行本である。ちやうど教室に放置したままだったのを、直己は今になって思い出した。

「これ、直己くんだよね？」

「あ、仕舞つとくの忘れてたみたいだ……ありがとう」

「うん、どういたしまして」

ぱあっと花が咲き誇るような笑顔を返されて、直己は少しだけ春菜の表情に見とれてしまった。だが、そんなものは意にも介さず、

春菜はこんなことを口走る。

「でも、ちよつと意外だなあ。直己くんは、こういうの読むんだねえ。わたしも童話とか好きだけど、まさか直己くんがこういう趣味してるとは思わなかったよ」

「ああ、ちよつとね……なんか、久々に読みたくなつたんだ」

「そつかあ。わたしも『不思議の国のアリス』好きなんだ。わたしたち、趣味合うね」

嬉しそうにそう宣言すると、春菜はワルツでも踊るかのようくりと回つて、直己たちに背を向ける。そうして、一度だけ振り返つて――彼女はこう告げた。

「じゃ、わたしはちよつと用事があるから先に帰るね。本当はもうちよつと秘密の話に付き合つてあげたかつたんだけど、今日はどうしても外せないから。ま、キミたちはもうちよつと秘密のお話でもしてればいいと思うよ？」

「また余計なこと言いやがつて……」

祐二が呆れたようにそう漏らしたが、そんなものは春菜の耳には入らなかつたらしい。何事もなかつたかのようにくすりと笑つてから、人の話を聞かない少女はこの誰に言うでもなく、こうぼやく。「あーあ、わたしも直己くんみたいな彼氏欲しかつたなあ……坂下さんが羨ましいよ」

「いや、だから付き合つてない……って、聞いちゃいけない」

直己の否定の言葉も虚しく、春菜は先ほどの言葉だけ言い残すと、軽い足取りのまま階下へと通じる階段を駆け下りていつてしまった。取り残された直己はしばし茫然とした後、大丈夫かな、と柄にもなく春菜の頭を心配してしまう。

近くにいた祐二が、何とも言えない微妙な表情で話しかけてきた。

「……直己、お前つてモテるんだな」

「いや、あれを真に受けるのもどうかと思うけど……。と、ともかく、祐二は何か用事とかないのか？　こんなところで油売つていいのかよ。お前、暇じゃないだろ」

「まあ、暇ではないが……用事はあるんだよ。お前にな」

「え、俺に？」

戸惑ったまま祐二のことを見返すと、祐二は先ほどまでにはない真剣な眼差しでこう言った。

「愚痴みたいなものだが、ちょっと話を聞いて欲しい。もちろん、時間はあるよな？」

Chapter 2 - 01 : 灰色の生活（後書き）

というわけで、Chapter 2も開幕でございます。

とは言え、どちらかと言えば今回はお試し版みたいな感じなので、次から次へと続きをアップできるかと言えば……ちょっと怪しいところですね。やはり、スローペースで待っててくれるとありがたいです。

さて、今回も頑張らにゃあいかん。

+

実のところ、日向春菜は少し焦っていた。

クラスメートである直己に『不思議の国のアリス』を返却した春菜は、その後、教室で帰宅準備を整えると――すぐに夢見ヶ丘高校を後にした。屋上で彼らが話していた恋愛話は、それなりに春菜の興味を惹いていたはいたが……どうしても、今日ばかりは好物の噂話に花を咲かせることもできなかった。

理由は簡単である。今日は楽しみにしていた本が刊行されるのだ。早足のまま校門を抜けると、春菜は迷うことなく商店街の方へと向かっていった。夢見ヶ丘高校の位置は、市でも中心部から少し西に離れた辺りにある。本命の本を買いに行くのなら中心部へと向かうのが常套手段ではあったが、正直なところ、少し面倒でもあった。「あの本、売り切れてなきやいいけどなあ……」

期待に胸を膨らませながらも、そこだけが不安であった。待ち侘びていた物が発売されたというのに、それを入手できないことは誰にとっても苦痛である。

最寄のバス停に到着すると、春菜は自らの携帯電話で時刻を確認した。次のバスが来るまで、あと三分ほどであろうか。

「ああもうっ、早く来い！」

今すぐにでも本屋に直行したいというのに、どうにも俾ならない。バタバタと足を動かして地団太を踏む。緩いウェーブのかかった彼女の髪がふわふわと揺れた。

ふいにハッとして、春菜はあたりに誰かいないかどうか辺りに視線を向けた。結果的に誰もいなかったが――こんな場面を誰かに目撃されていたのなら、相当恥ずかしいことである。春菜はつい衝動

的になってしまったことを後悔して、そつと溜息を吐いた。

その後、三分経って到着したバスに一番で乗り込むと、出口近くのイスに座った。流れていく外の風景を眺めながら、そつとこんなことを呟く。

「……でも、あの直己くんが『不思議の国のアリス』を、ね」

思わず、先ほどのことを思い出してしまい、春菜はくすりと含み笑いをしてしまった。ちょうど横にいたサラリーマンの青年と目が合ってしまった、春菜は慌てて「す、すみません」と返す。無意識のうちに独り言を呟いてしまう癖が、どうも昔から直らなかった。

緊張で顔を赤らめてしまったのを誤魔化すため、春菜はより窓の方へと顔を向けた。

しかし、あの直己くんが——か。

正直なところ、春菜としては意外だった。でも、彼が自分と共通の趣味を持っていたという事実は、嬉しいことである。何せ、春菜は少なからず彼のことを意識していたのだ。

ちょうどいい話題作りが出来たのかも、と春菜はくすりと笑い……それから周りの目を気にして、ぶんぶんと振り払うように頭を振る。

……もう何考えてるんだろ、わたしはっ。

と、そんなことを考えているうち、とうとう次の目的地が商店街の前になってしまった。それを電光掲示板で確認すると、春菜はすぐさまボタンをプッシュした。

目的地である商店街で降りると、春菜は早足のまま書店へと向かった。夢見ヶ丘市の中心部にある大きな書店に比べれば、品揃えは心もとない。しかし、人気作家の本だし、今日が発売日だしあるでしょ、とどこかでは高をくくっていてもいた。

しかし——

「は、はあ……ないんですか」

「すみませんねえ……売り切れちゃったんです」

営業用の微苦笑を浮かべた店員にそう言われてしまえば、さすが

の春菜もがつくりと肩を落とすしかなかった。惨敗である。やはり、市の中心部にある大型書店に向かうべきだっただろうか――意気消沈したまま書店の自動ドアをくぐった春菜は、ぼんやりとそんなことを考えていた。

でも、あっちの書店に行くのも面倒臭いなあ。春菜は胸中でそんなことを思う。

「無難にネット注文しとけばよかったかなあ……」

この商店街から春菜の自宅までは、それほど遠くはない。さすがに今から市の中心まで行く労力を考えると、モチベーションにも差し支えがあった。

今日は大人しく帰るべきか否か。自販機でペットボトルのコーラを買つと、春菜はそれを近くの公園のベンチで飲みながら、ふと考える。やはり、中心部に行くのは気乗りしないものである。何よりも、この茹だるような気温なら、すぐに自宅に帰って冷房の効いた部屋でまったりしたいという誘惑もあった。

「うっ、残念だよ……」

沈んだテンションのまま二口目を飲み下した時、ふと春菜の仰いでいた頭上が――暗くなった。違った。何かが頭上を高速で飛び去っていった。

「……ん？」

遭遇した変異に思わず飛び起きて、それから辺りを見回した。この公園で遊んでいる人たちは誰も気付いてはいない。だが、それを視線で追った春菜は、それがまた跳躍して遊具を蹴り、公園の柵を飛び越え、埠頭の方へと去っていくのを見てしまった。

それは人のような姿をしていたが、春菜も全貌を見極めることはできなかった。

ベンチを丸ごと飛び越え、さらに蹴った遊具から公園の柵を飛び越えるような跳躍力。目にも止まらぬ速度で移動する”何か”。

「なんじゃ、ありゃ」

しばし呆然とする春菜であったが、次の瞬間には、すぐに意識を

切り替えてコーラのキャップを締めていた。先ほどのことなどさっぱりと忘れていた。完全に追いかける気満々である。こういった時、何の疑いも持たずに動くことのできる行動力——それだけに限れば、春菜のそれはかなりのものだった。

確かに早いけど……まだ間に合う！

彼女は好奇心の赴くまま、公園を後にするのだった。

Chapter 2 - 01 : 奇妙なる出会い（1）（後書き）

意外と枚数が嵩んでたので分けての投稿。

無我夢中のまま市内を走り回っていると、追いかけていた”何か”は夢見ヶ丘市の南にある埠頭——その倉庫街の中へと消えていった。その倉庫街の入り口まで辿り着くと、もうすでにクタクタな春菜は膝を折って荒い呼吸を繰り返した。

ここまでの道のりは二キロに満たない程度であつたが、普段から運動をしない春菜には過酷にすぎていた。多量の汗によって張り付く衣服が、なんとなく気持ち悪い。

春菜はまだ手にしたままだったコーラのペットボトルを一気に煽る。体の中で炭酸が弾けた。

「……はあ、爽快」

食道を下っていく清涼感に満足を覚えた後、春菜はさらに倉庫街を進んでいこうとして……肝心の目標を見失ってしまったことに、ふと気付く。

「あちゃー、ここまで来たのに……見失っちゃったなあ」

自分の緊張感のなさには呆れたものである。一応は自覚しているつもりだったのだけど。

仕方ないなあ、と背を向けて倉庫街から出て行こうとしたその時——ふいに春菜の視界の端を、また”何か”が掠め去っていった。

それにワンテンポ遅れて、春菜の足が止まる。何かが掠めていった方向を振り向いて、足先を軌道修正。

「なんだ、まだ近くにいないじゃない」

独り言でそう呟いて、春菜は意気込みも新たにそちらへと向かうとする、のだが。

「ありや。見失った」

そちらへと向かったはいいものの、すぐにまた目標を見失ってし

まう。また春菜がしょぼくれ始める。かと思えば、彼女の視界の端を、また”何か”が掠めていく。

実際、それは不思議なことだった。春菜が一心不乱のまま”何か”を探しているうちは、特におかしなことが起きるわけでもない。だが、その”何か”を見失い、そろそろ諦めようかとなると、ふいにまた春菜の視界をそれが掠めていくのである。

冷静に考えれば、誘い込まれているという、ごく単純な結論を下せるはずなのだが——幸か不幸か、鈍い春菜はそんなことに全く気付かなかった。

そうして、彼女は誘い込まれるまま、倉庫街の袋小路へと入っていった。

「あれ、行き止まりだ」

倉庫の合間にある薄暗い通路は、もう壁である。おかしいなと首を捻った春菜だったが、ふいに背後に何かが現れる気配を感じ、びくりと身を竦ませる。

「なぜ、己に付いて来た？ 少女よ^{おれ}」

「ひあつ、な、なな何！？」

ふいに背後かけられた低い声に、春菜は思わず背後を振り返ろうとしたが——その前に、鋭い静止の声がかかった。

「振り向くなッ。お前が後悔するだろうから言うが、振り向くんじやない。そして、己の問いに答えるんだな。なぜ、この己について来た？ この問題が解消したら、お前には危害を加えずに帰してやるから……これだけは、答える」

「き、興味本位……だけど」

なんか怖い人だな、と場違いなことを思いながら口を開く春菜であつた。背後からかかる声は、それに少しだけ安堵したようでもあつた。

「そうか。ならばいい。では、すぐにここから帰るんだな。そして、二度と来るんじゃない」

その場から去って行こうとする気配を感じて、春菜も内心ではほ

つとしていたが——しかし、ほっとすると今度は新たな疑問が頭を埋め尽くしていた。

「待って。あ、あなたは……誰？」

「普通、そういう時は自分から名乗るべきじゃないのか？」

春菜の背中に投げかけられることは、どことなく冷ややかであった。

「ゆ、夢見ヶ丘高校、一年三組の日向春菜……住所は夢見ヶ丘市の西区、三十五……だけど。これで、いいのかな？」

「……別にそこまで聞きたかったわけではないのだが、まあいい。さっさと帰れ。己の情報など聞いても、有益なものなど何一つないぞ」

「ど、どうして、そんなこと言うの？ わたしは確かにあなたのことを追いかけはしたけれど……それはちょっと気になったからであって、何も、うん……何もしてない」

「そうか。だが、どうでもいいことだな。己は人間が嫌いなのだ」
春菜に投げかけられる声は、淡々とそんなことを言っていた。

「人間が嫌い、なの……？」

「その通りだ。人間は汚いからな、だから嫌いなんだ。……ああ、大嫌いだよ」

実際、そう語っている声は冷たい響きに満ちていたが、しかし、春菜にはそんな台詞にどこか物悲しげな響きが混じっているような気がした。不思議な人だ、と春菜は思う。それがこの状況で、より背後の人物に対する好奇心を加速させていた。

だが、あまり個人の事情に突っ込むのも失礼である。春菜は少しだけ冷静になって、思い切って話題を変えてみることにした。

片手を扇のようにぱたぱたと動かして風を送りながら、ふいに他愛ない話を切り出してみる。

「いや、それにしても今日は暑いねえ」

さっきとはまるで違う方向性の話題に、背後の人物は少し戸惑ったようだったが。

「……そうだな。だが、それがどうかしたのか？」

結局、話題に乗っかってきた。

「喉、渴かない？」

「暑いからな。渴いていないと言えば嘘になるが……だから何がどうなのだ」

その声に応じるように、春菜は手に握っていたコーラのペットボトルを軽く揺らしてみせる。

「それは何だ」

「ただの飲み物だよ。あれ、見たことない？」

「……ないな」

「飲みかけでよければ、あげる」

んっしょ、と春菜は体を屈めて地面にコトリとペットボトルを置いた。それに興味を示したのか、背後の人物が戸惑いながらも歩み寄ってくる気配があった。振り返ってその正体を見極めたいという衝動に駆られたが、春菜は辛うじてそれを自制した。

置いたペットボトルがごつごつした大きな手に奪われていくのを、春菜は見た。

「飲んでみるが、いいな？」

「どうぞどうぞ」

しばしの沈黙の後、感想が返ってくる。

「……ふむ、美味しいな。爽やかな味だ」

「でしょでしょ。あ、気に入ってくれたみたいだから残り全部あげる」

なんだかコーラに好感を持ってくれたみたいだ。春菜は少しだけ嬉しくなり、ついでに質問を付け加えてみることにした。

「あ、そういえば聞き忘れてたけど。あなたの名前を教えてください？」

気軽に聞いた春菜だったが、ややあつて返事が来る。

「己に名前などない」

「えっ、名前……ないの？」

「ああ、ないな。与えられていない。己は己を認識することはできるが、他人から何らかの名称で呼ばれたことがないからな。……ああ、あえて何度も呼ばれた蔑称のようなものならあるが……いや、これは言わなくても問題はないか……」

どういった外見をしているかも分からない春菜には、彼の表情を確認する術などなかった——が、彼が皮肉のようなものを言おうとしたことだけは、何となく分かった。

あまりに台詞を濁すものだから、春菜は質問を変えてみた。

「……じゃあ、あなたの出身地は？」

「出身地、か。そうだな。この世界にあるのか分からないが……昔、地図というもので見た限りだと、ヨーロッパのドイツかスイスという辺りだったはずだが」

「わあ、外国の人だったんだ……」

今話している人物が妙に日本語に卓越した外国人だということに、春菜はすごく驚いた。だが、春菜はドイツとスイスの位置が何となくしか分からなかった。こんなところで頭の悪さが露呈してしまうのは、正直ちよつと悲しいものがある。

感激する春菜に対して、背後からふと考え込むように小さな声が返る。

「……その反応を見る限りだと、この世界にもドイツとスイスがあるわけだな」

「え？」

「ああ、いや、何でもない……とりあえず、ここは外国というわけか。いや、あまり口には出したくないのだが、己は自分がどこにいるのかいまいち把握してなくてな」

「それは……凄まじい方向音痴さんですね」

実情はまた違うのだが、一般人の春菜がそんな事情を知るわけもない。だから、その時、春菜はもしかすると自分よりもっとすごい天然な人を見つけてしまったのかもしれない——という、その程度の思考をするだけに留まった。

「あなた、やっぱり不思議な人ね」

「む、そうか」

うん、と春菜は適当な返事をして、それから次にこう続けた。

「明日もまた、来てあげる」

「……二度と来るなど言っただけだが、どうしてそうなるのか不思議だな。まあ、あえて来ると言うのなら拒否はしないが」

「外国の話をしてよ。わたし、そういう話が聞きたいな。それに、あなた名前がないんだっけ？ だったら、わたしが付けてあげる。一応、あなたの出身地は分かったもん。本とかネットとかで似合いそうな名前探してきてあげる。だから、明日も来る」

「そうか。……なら、好きにするといい。ただし」

そこで背後からかかる声が一旦止まり、春菜はごくりと唾を飲み込んで問い返す。

「……ただし？」

「悪いが、やはり己はまだお前に姿を見せるわけにはいかない。どうしてかと問われそうだから、先に答えておく。己はやはり人間が嫌いであり、そして怖いのだ。だから、仮にお前がここに来るとしても、姿を見せるわけにはいかないが……それでもいいか？」

「いいよ」

春菜は迷うことなくその一言を放って、にへらと相好を崩して笑ってみせた。

「……では、己は帰るぞ」

「分かった。明日はわたしが来るんだから、あなたもちゃんと来てよね。方向音痴さん」

「む、悔しいが否定はできないな……まあ善処はしてみよう」

そんな朴訥な言葉を最後に、彼はどこかへと去っていきこうとする。その気配を感じて、春菜は別れの一言を言い忘れていることに気付いた。だから、手遅れになる前に——彼女はこう最後の一言を付け加えた。

「じゃあ、また明日」

「ああ」

そして、その謎の人物は、ひっそりと春菜の背後から消えていくのだった。

十

放課後、日は傾きつつあったが、まだまだ気温が下がる気配はなかった。校舎裏の雑木林からセミの鬱陶しい鳴き声が響き渡っている。どこか湿り気のある風が直己たちの頬を撫で、通り過ぎていった。

「……で、話って何なんだ、祐二くん」

相変わらず屋上から去っていく気のなさそうな祐二が、頬を伝う汗を拭き取って、何となく翳りを含んだ表情でこんなことを言った。「いや、な。別に大した話じゃないかもしれないんだがさ……ちょっとだけ、誰かに話を聞いて欲しかっただけだ。他に喋れるようなやつもいなかったしな」

「それに選ばれたわけか。光栄だね」

「適材適所ってやつだよ。ま、いつもつるんでいる奴らにはちょっと言い出せる雰囲気じゃなかったしな。お前も元気なさそうだったし、一緒に落ち込もうぜ」

「なんだそれ。まあ、あっさりと頼むよ」

「そうしたいところなんだがな……」

ぽりぽりと頬の辺りを掻いて考え込むような仕草をした後、祐二は少し気まずそうな顔をして、こう話を切り出した。

「クラスメートの佐竹伸彦、お前なら知ってるよな？」

「佐竹か。分かるよ、クラスメートだもんな」

まあ、あんまりまともに話したことはないんだけどな——直己はこの話題に上がった人物、佐竹伸彦のことを頭の中で思い起こしながら、ふと胸中でそんなことを思った。

佐竹伸彦。直己や祐二、春菜たちと同じ一年三組のクラスに所属

している男子生徒である。特徴と言えば、まず印象的なのは黒縁メガネだろうか。クラスではどちらかと言えば大人しい方で、活発的な面子にはあまり加わりとうしない生徒である。おかげで、直己もあまり面と向かって話したことはない。

「……で、その佐竹がどうしたって？」

当人のことを思い浮かべた後、直己は何ともなしにそう問い返す。「いや、本当に大したことじゃないって。ただ、その、昨日の夜からさ、あいつと連絡が取れないんだよ。あいつさ、今日も学校に来てなかっただろ？ 何回か連絡を取ろうとも思っただけ……あいつ、電話に出ないんだよ」

体育会系の雰囲気である祐二と、どちらかと言えば文化系の佐竹。あまり関わりなさそうな仲だっただけに、直己は少しだけ驚いたが、よくよく思い出してみれば、元々が同じ中学校の出身である。昔から仲がよくても不思議ではない。

今日のことを振り返ってみて、直己はごく平凡な返答をした。

「確かに、今日の学校は休んでみたいだな」

「そうなんだよ。俺、ちょっと心配なんだよな」

本当に不安そうな顔で話しかけてくる祐二に、直己は落ち着かせるように軽く笑ってみせる。

「心配性だなあ、祐二は。よくあることなんじゃないのか？」

「まあ、俺が心配性なだけならいいんだけど……。とは言っても、あいつもあいつでオカルトマニアだったりするからな。ほら、心霊系とか大好きなんだよ。中学時代もな、わざわざ学校休んでまで近所のスポットに遊びに行ったりとか、なかなか本格的だったんだぜ？」

そうか、佐竹ってそんな趣味してたのか——直己はふと胸中でそんなことを思った。オカルト話に滅法弱い直己にしてみれば、あまり好ましい趣味とは言えなかったが。

「じゃあ、いつものことじゃないか。その時も学校休んでたんだろ？」

「……うーん、そう思いたいところなんだけどな。これまでは何だかんだで連絡とかはしてくれてたんだよ。でも、昨日の夜から何もなし。あいつ、夜遅くまでバイトしてるのは知ってるんだけどさ、それにしてもおかしいと思わないか」

「スポットで変なことになったとか、そういう話は弱いんで勘弁してくれよな」

「はは、それはないって……たぶん」

祐二は軽口を笑い飛ばしてくれるものだと思っていたのだが、そこにいつものような余裕さはあまりなかった。これは結構重症だなと直己は内心で思った。

「……ま、あんまりお前に言っても駄目か。実際、明日辺りにはひよっこりと学校に来ているかもしれないしな。でもさ、町であいつを見かけたら何か言っただけいいんだ。わざわざ俺が心配してやってんだぞ、ってな」

「わかったよ」

祐二の友情深さに少し感心しながら、直己は柔らかな微妙な浮かべてそう返した。すると、祐二は頭をガリガリと掻いて背を向け、階下に通じる階段の方へと歩いていく。

「俺が言いたかったのはそれだけだよ。じゃあな、直己。また、明日」

背中越しにそう言って、祐二はぶんぶんと腕を振った。

「そうだな。……また、明日」

明日には佐竹も無事に学校に来て、祐二も元気を出してくれればいいんだけどな——直己はひっそりとそんなことを思いながら、屋上から去っていく祐二の背中を見送る。

そうして校舎の屋上に、直己はまた一人になった。

祐二の言葉を深く考えることもなく、直己はその日の夜を過ごした。

翌日、直己はいつものように母親の声によって叩き起こされると、眠い目を擦りながら一回のリビングまで行き、用意された朝食を口にした。これまでも、そしてこれからも何度も繰り返すであろうルーチンワーク。いつも通りの朝。

両親はどちらとも多忙である。父は朝早くから仕事に出かけていき、母はすぐに家事に追われてリビングからはいなくなる。とは言え、家族内での関係は円満な方であると直己は思っている。今のところ、不満を感じたことはない。絵に描いたような円満家族ではないにせよ、それなりに順風満帆であった。

いつも通り、直己はリビングで一人っきりの朝食を口に含んだ。本当ならば、ここにもう一人の家族がいるはずだったのだが——今となっては、もういない。

ぼんやりとテレビを流し見していると、一瞬だが見知った光景が映った。よくよく目を凝らしてみても、直己はそれが夢見ヶ丘市の映像であることに気付く。

「うん……？」

パンを齧りながら注視すると、すぐさま映像が切り替わる。

テレビの中ではニュースキャスターが何やら深刻そうな表情をして、夢見ヶ丘市の埠頭近くの映像を映していた。すると、カメラが近づいて道路のとある部分を拡大する。そこには人を模るようにつ引かれた、白線。

『今日の早朝、ここ夢見ヶ丘南区の人通りのない裏道で、公立夢見ヶ丘高校に通っていた生徒、佐竹伸彦くんが死亡しているのが発見されました。佐竹くんは二日前の深夜辺りから行方不明になっており、首を絞められた跡などがあることから、警察では何者かに殺害されたとみて捜査を続けているようです——』

ぼろ、と直己は思わず手に持っていたパンを落としていた。

「……まさか」

直己の脳裏で、昨日した祐二とのやり取りが蘇る。あの他愛ない話だと思っていたことが、今は重大な事実となつて直己に衝撃を与えていた。彼は、死んだのだ。だが、直己はそれをすぐに受け入れることなどできなかった。

つい何日か前まで——彼は生きていたというのに。

「馬、鹿な……」

先ほどまであつた眠気は、もはや全て吹っ飛んでいた。

今、直己が気になっているのは同じクラスの友人、祐二のことだった。果たして、祐二はこの事実を知っているのだろうか。それが気になる一方……直己は、たとえ彼が知らなかったとしても、その事実をこの口で伝えていいものかとも思った。事実を伝えられた祐二がどんな気持ちになるかなど、考えたくもない。

直己はすぐさま朝食を食べ終わると、いつもにはない速度で学校に行く準備を整えた。自宅の廊下を忙しく走っていると、家事をしている母親が訝しげな視線を投げたが、そんなものは関係なかった。

母親に事実だけを告げると、直己は学校に行くため、家を出た。

学校に到着するまでに、何台かのパトカーと擦れ違つた。

事件があつたというのにも関わらず、学校はほとんど変わらずに平常運転していた。変わったことと言えば、いつもならしない全校朝会があつたこと、そして教室にある佐竹伸彦の席が今日も変わらずに空席だったことくらいである。

早朝のニュースに騒いでいたのは、何も直己だけではなかった。クラスもしきりにその話題で持ちきりである。だがその生徒たちを見回しても、祐二の姿だけは見当たらなかった。

あまりのショックからか、祐二は今日の学校に来ていなかった。

「ねえ、直己くん。朝のニュース、見た……？」

そう話しかけてきたのは春菜である。いつもならお気楽に話題を振ってくる春菜も、今日ばかりは神妙な面持ちをしていた。

「ああ、うん——見たよ」

「わたし、信じられないよ……佐竹くん、佐竹くんは、死んじゃったんだね……」

今にも泣き出しそうな春菜の顔を見て、直己は自らがショックなのを捨て置いても慰めるのに必死になった。

「ねえ、直己くん。今日、他の友達と話してたんだけど……ちよつとだけ噂みたいになつて話があるんだ。この事件のことなんだけどね……」

なおも悲しげな表情でそう語り出す春菜に、直己の視線は固定される。

「事件の日の夜にね、すごく醜い姿をした人影が人通りのない裏路地——そう、ちょうど佐竹くんが殺された辺り——を曲がつてたつて話。ちなみにその話の子は怖くなつてすぐに逃げちゃったつて噂話なんだけどね……でも、わたしちよつと怖いかな……。それに、わたしたちと同じくらいの不審な少年少女の三人組を現場付近で見つたつて目撃談も、あるんだ……」

「……それは、すごく不思議な話だね」

心の中でピンと来る何かを感じながらも、それをおくびにも出さず春菜に返す。

とても不思議な話だ——と、直己は思う。この春菜の言っている噂話が真実だとすれば、昨日の夕莉が屋上に来たことと照らし合わせても、これが幻想人に関連した事件であることは明白だろう。何にせよ、佐竹伸彦は事件に巻き込まれて死んだのだ。それだけは覆

りようのない事実なのだ。

「危ないんだから、春菜も夜遅くには出歩くなよ。ただでさえ、ぼんやりしてるんだから……」

「うん……ありがとう」

軽いジョークを交えたつもりだったが、それに春菜はいつものように反論してくることもなく、ただ哀しげに微笑むだけだった。

放課後、授業が終わった後、直己はいつも通りに校舎の屋上へと行った。

ここ最近はずっとこうである。授業が終われば屋上に来て、風景を眺めながら何かを考えたり、考えなかったりする。自分の悩む姿は似合わないことは分かっているつもりだが、それでも悩まずにはいられなかった。ここ一ヶ月近く、夕莉に”庭”へと連れて行かれ、執行者となったあの日から——ずっと、悩みが尽きないのだ。忘れようとしても、どうしても忘れることができないのである。

あの強烈な、幻想人の戦いのことを。

一旦は身を引いた立場だったが、同級生の佐竹が幻想人に殺されたとあっては、直己はどうしても再考せざるを得なかった。

「……俺は」

何もすることができなかった。助けられるかもしれない立場にしながら、自分はただ何もせず、逃げていただけだった。

放課後の溶けていくような雑音を遠く聞きながら、しかし、直己の気分は暗いままだった。昨日の祐二の言葉を思い出すと、胸の奥が抉られるようだった。春菜の悲しげな表情を思い返すと、罪悪感に押し潰されそうになった。

真相を隠しているだけなのに、こんなにも心が痛い。

「馬鹿、だよな……何、やってんだか」

胸中で生まれた疼痛に耐えながら、直己は顔を伏せようとした。だがその時、屋上へと通じるドアが勢いよく開かれた。思わず、視線を向けた直己だったが——実際のところ、誰が来たのかは見ずと

も鮮明に分かった。

そこに立っていたのは、夕莉だった。

相変わらず、夕莉は憐憫の欠片すら見えない無表情を浮かべ、静かに直己へと近寄ってくる。

「とうとう犠牲者が出たじゃない。クラスメートが死んだのは、知ってるわよね？」

「となると、やっぱり幻想人絡みの事件か……」

直己は感慨も何もなく、ただからっぽの言葉を吐き出す。

「ええ、日付が今日に変わったところかしら。彼は殺されたのよ。今回の幻想人にね」

その表情に悲しみを滲ませることもなく、夕莉はそう説明した。少なくとも、夢見ヶ丘高校の同学年の生徒であるはずなのだが、彼女にはそれも関係ないのかもしれない。

ふと屋上を流れていく夏の風。それによって乱れそうになる黒髪を押さえながら、夕莉はさらにこう続けた。

「あなたが、来なかったからよ」

「……かもな」

そう嘯いてみせる直己だったが、その一言は弾丸のように強烈だった。あの時、自分が戦うことを決意していたならば、結果は変わっていたのかもしれないのだ。その事実を否定することなど、できなかった。後知恵かもしれないが、運命は確かに変わっていたのかもしれないのだから――

「夕莉。幻想人ってのは、こういう風に一般人を殺す奴らばかりなのか？ この世界に来る異世界人ってのは、誰かに危害を加えたりするのが普通なのかよ……」

「さあね。でも、そういう奴らが多いのは確かかもね」

「俺には……幻想人が何を求めてこの世界に来るのか、未だに分からないんだ」

「そんなもの、私にだって分かるはずないじゃない」

冷たく突き返してくる夕莉は、いつものように仏頂面のままだ。

だが、その瞳は静かに直己のことを観察していた。まるでどう出
のかを試しているようだった。

「……なあ、夕莉」

「何よ」

「情けないことを言ってるのは理解しているつもりだよ。けどな、
今回ばかりは、そうどうしても今回ばかりは、俺も幻想人ってやつ
が許せないんだ。だから」

「……だから？」

軽く首を傾げて、夕莉はこちらの発言を煽る。だが、それでも直
己は怖気ずくことなどなかった。真正面からその顔を見つめ返し、
これまでにない決意を滲ませ、こう告げる。

「俺をもう一度——執行者にしてくれ」

「……面白いことを言うのね」

「馬鹿にしたいのなら、馬鹿にすればいい」

そう発した後、これまで厳しい表情をしていた夕莉が途端に、く
つくつ、と小さく笑い始めていた。それはいつもいる学校では全く
見ることもない、酷薄な予感を感じさせる執行者の含み笑だった。
「心外ね。別に馬鹿にしたわけじゃないのよ。ただ、一度は背を向
けた身でありながら、また幻想の世界に戻ってきたのが、少し意外
だっただけ。……そもそも、こっちは万年の人手不足のようなもの
よ。元から拒否する理由なんて、ないわね」

「なら」

「ええ。望むとおりに導いてあげようじゃない」

発言を急かす直己の言葉に、夕莉は妖しげな笑みのままそう答え
た。そして、彼女はそのまま背を向けると、意味ありげに、こう続
けるのだ。

まるで、直己が幻想の国に導かれた——あの日のように。

「幻想の国に、ね」

+

放課後、学校が終わると、春菜は昨日と同じように埠頭の倉庫街へと向かった。

倉庫街に入り、人気のない道を進んでいく。今日の待ち合わせ場所も、昨日とまた同じであった。やがて、春菜が行き止まりとなっている倉庫街の角を曲がると、ふと、その背後に何者かの気配が出現する。人通りのない場所だから、それが誰なのかは想像するに易かった。

「よかった……来てくれたんだ」

「ああ、来たぞ」

背後からかけられる低い声も、やはり昨日と同じ人物のものである。

「もしかすると、来てくれないんじゃないかと思ってた」

「己は取り付けた約束をちゃんと守る。^{おれ}そういったものに不誠実な者は嫌いだ」

「そっか……」

春菜は短くそう言って、薄っすらと笑みを浮かべてみせたものの……いつものように自然に笑うことはできなかった。やはり、朝から引きずっている同級生、佐竹伸彦のことが頭の隅に引っかかっているのだ。直接、関係がないのは理解しているつもりだ。だが、彼が無惨に殺されてしまったことを考えると——春菜は、どうしても自分だけが笑っていることに抵抗感を覚えていた。

そんな春菜の感情を察したのか、背後にいる”彼”の声もことなく物悲しげになる。

「どうした、今日はどこもなく悲しげだな」

「あ、やっぱり分かった？ 何かね、今日は良い事がなかったかなって思ってた……ね」

これでも誤魔化そうとしたつもりなのだが、やはりいつものように笑うことができなかった。

「何か、あったのか？」

「うん。あのね、同級生の子がね、今日亡くなっちゃったんだ……。何かの事件だと思うんだけど、犯人はまだ見つかってないの。だからさ、今日はわたしもなんか落ち込んで。あんまり話したことはなかったんだけどね、でも自分だけ笑ってるのって、やっぱりおかしいじゃない？」

「……なるほどな。そういうことか」

ややあつて返された”彼”の言葉は、どこかきこえない響きがあった。が、その後、すぐに続けて発せられた一言は、おそらく彼の慰めだったのだろう。

「大変なことが、あったのだな……」

「そうなの。あ、暗い話だったよね……ごめんなさい」

「別にいい。己からは人並みな言葉しか言えないが——元氣を出して欲しい」

「うん、ありがと」

そんな慰めの言葉にどれほどの意味があるのかは分からなかったが、それでも春菜は救われた気がした。まるで頼りになる相談相手を見つけたような心境だった。

「そつえばさ」

先ほどまでと話を一転させて、今度は春菜が新たに話題を振る。これまで一日溜め込んできた抑圧が、”彼”との会話で発散されたようだった。ここまで来て、春菜はようやくいつも通りに笑えるような気がしてきた。

背後の”彼”から、何だ、という単純な問いが返ってくる。

「あなた、名前がないって言ってたよね。わたしね、昨日、あなたの名前を考えてきたの。一応、あなたの言ってた外国の一般的な名

前から取ってきてみたんだよ。気に入ってくれるかは、分からないんだけどさ」

あっけらかんとした春菜の言葉に、背後の人物は何やら興味津々といった様子だった。

「そ、それは——どんな名前なのだ？」

これまでの”彼”からは考えられないほど、興奮するような響きが混じっていた。

「考えた名前では、あなたの名前は……ヨハン。そう、ヨハンってなってるの。……ど、どうかな？ まあ、正確に言うとわたしが決めたわけじゃないんだけどね。このアイディア、出してくれたのはわたしの弟なんだ。でも、二人で話し合って決めたんだよ」

「なるほどな。それに、ヨハンか。異論はない、納得した」

「それはよかった」

今この瞬間、背後の人物にようやく名前が付くこととなった。”

彼”の名前はヨハンである。だが、まだその名を呼ぶのは照れ臭い春菜であつたが——彼女は、あえてそれを口にしてみることにした。

「……ねえ、ヨハン。あなたには、家族はいないの？」

「そんなものはいない。だが、そうだな……この己にも唯一、”父”と呼べる存在がいたのかもしれないが……いや、これ以上は語る必要もないか。この己の言っている”父”という奴は、最低の人間だった。この世からいなくなった今でも、それだけは変わらない」
そこまで語ってから、ヨハンは一度だけ息を継げて、こう断言した。

「だから、己は永遠に独りだ」

「そんな……独りは寂しいよ。寂しく、ないの？」

春菜は考える。もし、自分を残した家族全員が事故か何かで死んでしまい、この世の家族と呼べるものが誰一人いなくなった時の——自分のことを。

そんな孤独、耐えられる気がなかった。

「寂しいよ。ああ、寂しいさ……だが、きっとそれでいいのだと己

は思う。おそらく、己に同胞がいるなど誰も望んではないだろうし、それに考えたくもないはずだ。独りは寂しい。だが、誰かと関わって傷つくくらいならば、己は永遠に独りのままでいいのだよ」

まるで自らの人生を終わってしまったもののように語るヨハンに、春菜は納得することができなかった。そんなことはないと思った。こんなに優しい人なのに、どうして諦めのようなものを口にするのか——今の彼女には理解できない。

「……まあ、己の話などどうでもいい。それよりも、春菜の話をしてくれ。弟の話でもいい」

「お、弟のこと？ 例えば……」

話題を振られるにしても、弟のこととなると春菜の思考が停止した。というのも、実際のところ何を話せばいいか分からなかったのだ。

「例えば、どういった人間なのか、とか」

「どういった人間かって言われると……そうねえ。まあ、一言で表すなら生意気かな。年はわたしの一つ下で、今ちょうど中学三年生なんだけどね。なんか髪染めたりとか、とにかくもう色々と思いつちやってるの。昔はもっと可愛いと思っただけ……そういう年頃なのかなあ」

「柄が悪い、とかそんな感じなのか？」

「否定しないけど、でももうちょっと大人しいかな。なんかこう……斜に構えた感じってやつ？ まあ、わたしには今でも懐いてくれるから可愛いっちゃ可愛いよ。でも両親なんかとは毎日喧嘩してるし、学校でもそういうの多いみたい」

「……なるほどな。だが、そんな春菜の弟も、己の名付け親なわけだ」

ヨハンがどのような弟を連想しているのかは気になったが、ぶっちゃけあまり良い印象でもなさそうだった。だが、どちらにせよ、弟が生意気で捻くれていることも、何もかもが真実である。だから、春菜は弟が悪く言われようと、それを否定する気にはならなかった。

「でもまあ……意外と優しい子だと思う。何なら、今度連れて来ようか？」

「いや、いい……。まあ、あっちが来るというのなら拒否はしないつもりだが」

「変わらないね、ヨハンは」

何だかんだ言っても、そういうスタンスが変わらないところに、春菜は可笑しさを覚えた。が、ふいに自分のカバンに入れたままのある物のことを思い出し、春菜は慌ててカバンを探り出し始める。

「……どうしたのだ？」

「今日も持ってきたんだった。忘れてたよ」

そう言って春菜が取り出したのは、コーラのペットボトルだった。背中越しにそれを軽く揺らしてみせた後、それをまた地面に置いた。「ここに置いとくから、後からでも持ってって。わたしはそろそろ家に帰らないといけないから。……ほら、暗くなってきたやつたし。これも学校の友達になんだけどさ、今日は言われちゃったんだよ。『春菜はただでさえぼんやりしてるんだから、夜は出歩くな』って今、危ないじゃない？ 殺人事件とか起こったわけだし」

それにヨハンの返答がわずかに遅れたが、ややあって、

「……はは、確かに。こう言うのは難だが、確かに春菜はぼんやりしているからな」

「ヨハンも酷いこと言うのね。……そりゃ、否定はしないけどさあ」

唇を尖らせる春菜だったが、それは彼女自身もそれなりに自覚していたかららしい。拗ねるようにぷうと頬を膨らませる春菜は、その仕草からしてまるで子供である。

「ふんだ」

「……済まなかった。そう怒らないでくれ、春菜」

「許す。というか、嘘だって、嘘。わたしは最初から怒ってないから」

先ほどのことは冗談とばかりに、春菜はからからと笑ってみせた。だが、その春菜の返答はヨハンにとっては予想の範疇だったらしい。

あまり動揺した感じもなく、背後からこんな言葉が返ってきた。

「しかし……時間が経つのが早いな」

「そうだよな。もうこんな時間だもん。辺りも薄暗いし」

春菜は倉庫街の行き止まりから、ふと、頭上を仰ぎ見る。先ほどまであった夕日はすでに沈みかけており、辺りには仄暗い暗闇が少しずつ、世界を昼から夜へと変えようとしていた。

「明日も、来てくれるか？」

ヨハンの口から飛び出たのは、春菜も予想していない言葉だった。「え、ああ、うん……ヨハンが迷惑じゃないならね。ま、機会があったら弟も呼ぶよ。どうせ、今年は受験生だもん。部活も終わっちゃったみたいだし、後は家に帰ってきてごろごろしてるだけだもん。暇人は同伴させるつもり」

「はは、弟使いが荒いな。まあ、楽しみにしているさ」

背後からかけられるヨハンの声は和らいでいる。初めて会った時の冷淡さからは考えられないほど、今の彼は人間味があった。

「だから、また明日、というわけか」

「そういうこと。ヨハン、また明日」

「また、明日」

その言葉を合図にして、春菜の背後から気配が離れていなくなっていく。辺りからヨハンがいなくなったのを確認してから、春菜はまた頭上を仰ぎ、そっと溜息を吐いた。

彼は人間嫌いだったはずだ。だが、そんな彼が今日に限っては、明日も来て欲しい、と言ってくれた。それが春菜にとっては嬉しかった。そして、彼がそんなことを口にしたということは、徐々に春菜に対して心を開きつつある——ということなのだろう。

明日になれば、ヨハンは姿を見せてくれるだろうか。春菜はふとぼんやりと考えた。よくよく考えなくても、春菜はヨハンの素顔をまだ一度も見たことがない。

一体、彼はどういった姿をしているのだろうか？

「……やっぱり、不思議な人」

春菜はごく自然なまま、クスリと含み笑いを漏らしていた。

そして、春菜は妙にほっこりする気分のまま、帰路に就くため、倉庫街を抜け出すことにした。すでに薄暗くなった世界は、これらの夜を告げている。学校で直己に言われた忠告を守るなら、一刻も早く帰宅する必要がある。

春菜は少し考え込み——それから、走って家に帰ることに決めた。

十

あれから校舎の屋上を後にした直己は、夕莉に連れられて夢見ヶ丘高校の裏にある雑木林を抜け、久方ぶりに”庭”へと戻ってきた。木々のざわめく音がした。清浄な空気が満ちていた。一ヶ月前と何ら変わりはなく、まるで時間が止まってしまったかのように、何もかもがそのままだった。それもそのはず……ここは”幻想の国”なのだから、現実と違う時間が流れていても不思議ではない。

森の一部拓けた場所には、焚き火があつた。それを取り囲むように設置されているのは、人数分の切り株である。執行者たちが集会所と呼ぶここは、幻想人が現れた時に作戦会議をする場でもある。一ヶ月ぶりの”庭”を見回している直己に、ふと、声かけられる。

「……おや、珍しい人が来ましたね」

切り株の椅子に座ったまま、そう声をかけてきたのはアリスだった。相変わらずのロリータファッションに身を包んでいる少女は、周知のことながら”庭”の管理者であり、またここで唯一の幻想人である。

そんなアリスの言葉に惹かれたのか、これまた久々な声がかかる。

「お、本当だ。これまた珍しい人が来たもんだね……」

同じく焚き火の方から視線を向けてきたのは、橘先輩だった。直己を見つめる視線に、少しだけ驚きのようなものが滲んでいる。そんな彼女たちのことを見返して、直己はこう台詞を口にした。

「久しぶり……ですね。ただいま戻ってきました」

一ヶ月前、幻想人との戦いの末に逃げ出した直己としては——こんなことしか言えなかった。恥は承知の上であるが、この面子とあ

つては居心地が悪いのもまた事実である。

傍にいた夕莉が無言のまま、集会所の切り株へと近寄っていく。それに倣って集会所へと歩いていこうとする直己だったが、その時ふと集会所の切り株に見慣れぬ姿の者がいることに気付いてしまった。

ほぼ同世代の少年だった。それも垢抜けた格好をした。

「……あん？ 何だアンタ、用がないならこっち見んな」

釣り目の少年なそんな言葉を口にする。ほとんど挑発に近い一言に、反射的に直己の脳裏に苛立ちが掠めたが——それを発露させる前に、その直己と少年の間には先輩の宥めるような言葉が滑り込んでいた。

「ま、まあまあ……秋也くん落ち着きなさい。ちょっと口が悪いぞ？」

へえ、この少年の名前は秋也っていうのか、と直己は思う。

「あ、あのね、直己くん、この子も君と同じ執行者なんだ。この前モノケロスの一角獣の時は、まあ、都合があつて来れなかったみたいなんだけど……直己くんが執行者になる前からいたの。こっちだと、秋也くんが先輩みたいなものかな。君の一つ下だけど……まあ、仲良くしてね」

愛想笑いを浮かべて仲裁しようとする先輩だったが、その表情はどこかぎこちなく強張っている。すぐにでもこの秋也とやらの乱暴な言葉遣いを糾したい直己であったが、先輩に免じて一応言葉は引つ込めた。

それにしても、なんて生意気なやつだ。

赤茶色に染められた髪は、ほぼ同世代の直己からしてもかなり派手に見える。パーカーを着込んでいるが、そのポケットに両手を突っ込ませて唇を尖らせている姿は、年下にしてもだいぶ調子に乗っている。直己には第一印象からして最悪だった。

ともかく——と、それでも直己は私情を抜きにして、空いている切り株に座り込む。

「……とりあえず、自己紹介だけはしとく。夢見ヶ丘高校、一年の菅原直己」

未だになんとも言えない苛立ちはあったが、とりあえず年上だし寛容さも大切か、と直己はひとまず踏み止まって冷静にそう言った。パーカーに両手をつっ込んだままの少年が、ぶすつとした顔付きのまま返した。

「……夢見ヶ丘中学、三年の日向秋也。アンタの話は姉からよく聞いている。だからまあ、アンタがどういう奴かは一応知ってるつもりだ」

「姉、ってことは……？」

「アンタと同じクラスにいるでしょう、日向って苗字のが。……ほら、日向春菜とか」

普段から会話している春菜の名が出たことに直己は驚いて、

「つーことは、お前が春菜の弟か？ いや、驚いた……しかし、全然似てないな」

「余計なお世話だよ。それとオレの姉を呼び捨てにするな。さらに言うなら近づくな」

それこそ余計なお世話だろうが——さすがの直己も頭にきた。ちなみに直己と秋也のやり取りに、周りにいるアリスや先輩は置いてけぼりを食らって呆れていたが、そんな彼女たちの姿も今の直己の目には入らなかった。

「なんだこのシスコン」

ただ返すように一言を発する。思い当たる節でもあったのか、秋也の目付きが変わった。

「んだと、この野郎……し、死ね！」

「……ああ、とうとう言うてはいけないことを」

同じ焚き火を囲んでいる一人、橘先輩がぼそりとそんな台詞を漏らした。が、すぐにアリスが「放っておきましょう」と殊更酷いことを口走る。

先輩は悩みの種がいっぱいの苦りきった表情をしていたが、

「ま、まあまあ……君たち、そこらへんにしなさい。そういうのは後で、ね？」

集会所で繰り広げられる醜い応酬に、ようやく先輩の止めが入る。それには直己だけではなく、さすがの秋也も逆らえなかったらしく、今まさに吐き出そうとする暴言を辛うじて引つ込める。

「ともかく……君らが意外と気が合いそうであった」

「皮肉ですか？」

表情を曇らせたままの直己の問いかけに続き、さらにアリスが呆れたような顔で言う。

「火に油を注いでどうするんですか、美鈴」

「あ、いや、そういうわけじゃないんだってば。ほら、喧嘩するほど仲がいいって言うじゃない。だから——って言おうとしたんだけど……やっぱりいいや。なんか、急に自信なくなってきた。これ以上は何も言わないから。だから、本題入ろう……本題」

心労しきって何やら深い溜息を吐いた先輩であったが、それに辛うじて同情するような視線を向けたのはアリスだけだった。

「それで、本題ってなんですか」

ずっと直己たちのやり取りを傍観していた夕莉が、どこか苛立たしげにそう切り返す。

「ああ、うん……もちろん、幻想人のことなんだけどね。直己くんを除いた人たちはもう知ってるだろうけど、彼にはまだ話してないからさ。確認も込めてもう一回やろうと思って」

「お前のせいだぞ、カス」

秋也が唇を尖らせながら、ふいにそんなことを言った。

「んだとシスコン」

「やれやれ……彼らには本当に困りましたね」

アリスがとうとうそんな台詞を口にして肩をすくめた。目前で行われる光景に、先輩は何だか言葉も出ないようだった。夕莉は自分は無関係だと言い張るように、ただ直己たちのやり取りに無視を決め込んでいるだけである。

「こんな奴ら、もう放っておきましょうよ。それより、先輩、続きをお願いします」

「そうだね。……直己くん、聞き漏らしても知らないからね」

そう言われては、さすがに直己も小生意気な後輩とのやり取りを取り止めざるを得なかった。そんなくだらないものはすぐに切り上げて、直己は先輩の方へと向き直った。

「じゃ、ブリーフィングを始めるよ」

先輩は心の声が透けているような、苦い表情をしていた。

「昨日、夢見ヶ丘市の南にまた幻想人が出現した。身に付けている幻想能力については、後にアリスから解説させるけど、直己くんを含む執行者たち全員を動員しているのは、そういう事情もあっただよ。一角獣モノケロスの事件以来の大物だ」

そこで先輩は一度、台詞を区切る。

「実は昨日、あたしたちは敵情偵察に一度動いているんだ。そこで能力の片方である《具現する憎悪の刃》ヘイトレッド・エッジについては、この目で確認したよ。そして、その能力を確認した時点で、佐竹伸彦くんは亡くなった。……まあ、どういう状況なのかは予測できるはずだ」

「……で、その能力はどういったものなんです？」

心の奥底で冷え切っていくものを感じながら、直己は平坦にそう問い返した。

「簡単に言ってしまうえば、幻想人の感情の起伏が幻想武器となって発現する——といったところですかね。昨日の時点では、戦斧型の武器だったみたいです」

それに答えてくれたのはアリスだった。

「そういうこと。ただ残念ながら、暗くて遠方からの偵察だったこともあって、敵の姿そのものを完全に把握することはできなかった。とは言え、今回は人型の幻想人なのは間違いないね。人影のようなものはちゃんと確認したからね」

「ちなみに、今回の幻想人にはさらに《不滅縫合体》ジャンク・ボディという能力もあるようです。こちらはまだ判明していません。単体の幻想人の複

数の幻想能力が身につけている——この凶悪さは、一角獣との戦闘を経験したアナタなら理解しているはずですね？ 直己」

「もちろん。そして、なるほど……大体の事情は分かってきましたよ。だけど、もう一つ聞きたいことがある。どうして、佐竹は殺されなければならなかったんだ？」

その直己の問いかけには、わずかな沈黙が生まれる。

何秒か遅れて、橘先輩が沈黙の中——こう言葉を返してきた。

「……それは分らない。殺したのは幻想人だ。今回は完全にあっちがやったことだからね、あたしたちには分らない」

「そうですか。考えてみれば、そうですよね。すみません」

そして、そんな先輩の言葉に、これまた何の感慨もなく答えている直己がいた。

幻想人に殺されたのならば仕方ないことだ、と直己はそう思う。

一ヶ月前の自分ならば納得できなかっただろうが、今はまた違っていた。仕方がないことだ。そう、仕方ないことなのだ。だから、幻想人は殺すしかない。そうすれば、もう殺人は起こらない。惨劇はなくなる。

そこまで考えて、ふいにハッとした。

今、自分は本当の意味で執行者の考えをしていたのかもしれないな、と。

「ともかく。君たちには今回で存分に働いてもらいたいと思っている。今回の敵は人間に危害を加えるような類のようだし、できるだけ早急に片付けたいからね。そういうわけで、君たちの任務についてを説明しようと思う」

そんな直己のことなど知ってか知らずか、先輩の話がまた始まった。

「直己くんと夕莉ちゃんには、このまま幻想人に対する斥候をしてもらいたいと思っている。特にまだ判明してない能力《不滅縫合体ジャンク・ボディ》の特定は急務だ。それと秋也くんだけ……君の幻想武器《R0

4 カルロス Carlos》は広範囲の探知能力に長けているから、君はあ

たしと交代で偵察役。ちなみに、あたしはこの作戦の指揮官として情報処理役も兼任する。……これでいいね？」

「異論はありません」

手短に済ませたいのか、夕莉の言葉は早かった。

「では、さっそく行動に移ってもらいたいところなんだけど――」

「美鈴、ちよつと待ってください……」

ふいに入ったアリスの横槍に、先輩だけでなく、その場にいた全員の意識が集中した。

「どうしたの……？」

困惑するような表情で問い返す先輩であつたが、しかし、先ほど横槍を入れたアリスもまた同じ表情を浮かべていた。正直、直己は何が起こったのか分からず、ただ起こった状況を瞳に収め続けることしかできなかった。

突然、アリスが何かを感じ取ったかのように頭上を見上げ、目を瞑った。

「……皆さん。この状況で、大変言い出しづらいのですが」

そして、再びアリスの瞳が見開かれる。

その光景を目にした直己は、まるで畏怖したかのように動くことができなかった。いくら幻想人とは言え――先ほどまでの外国人特有の碧い瞳はなく――今や、アリスの瞳は真紅に光り輝いていたからだ。この状況になって、ふと直己はアリスがただの人間ではなかったことを思い出した。

終始、緊迫感に満ちた状況だったが、しかし、このアリスに起こる現象も、ここににいる者たちには見慣れたことだったらしい。彼らの口元からこぼれたのは、先ほどまでとは打って変わった、諦めの色濃い溜息である。

「やれやれ……アリス、情報頼むよ」

「ええ、もちろんです。皆さん、聞いてください。どうやら、今回の幻想人の影響がさっそく現れ始めたみたいですよ。……新たな幻想人が出現しました。出現場所は、夢見ヶ丘市の北区住宅街。ワタ

シの《異次元を観測する瞳》によると、今まさに現れた幻想人の幻想能力は《血塗れの化身》^{レッド・キャップ}。……まあ、こいつ自体はいつもの雑魚ですね、言ってしまうえば」

「雑魚は雑魚だけど、このタイミングで出てくるとは……いやはや」先輩がぼりぼりと自らの後頭部を掻いて、困ったような苦笑いを浮かべてみせる。その苦笑いが、ふと直己の方を向いた。

「直己くん、これが幻想人の脅威だ。よく覚えておくといい。幻想人はこの世界を侵略し、さらなる幻想人を呼ぶ。まったく……冗談じゃない連中だろう？」

アリスも幻想人じゃないですか——と、直己は一応気遣うようアリスを見たが、

「ああ、直己、ワタシのことは気にしないでいいですよ。ワタシも幻想人は冗談じゃない連中だと思ってますから。……というか、そうじゃなきゃこんなことしてません」

「そ、そうだよな……」

まるで気にしてないアリスに直己は内心で苦笑を覚えたが、そう言われてしまっただけは何も言うことはできず、また先輩の方へと視線を戻した。

「先輩、幻想人は殲滅しなければならぬんですか」

「そうだよ。あたしたちは、もう”七年前の災厄”のようなことを起こしてはならないんだ」

「七年前の災厄？」

直己は何のことを指しているのか分からず、一瞬は眉間に皺を寄せたものの——七年前に起こったことを思い出してみると、なんとなく思い当たる節はあった。しかし、あれが幻想人に引き起こされたことなのかどうかについては、未だに疑問符が付く。

理解していない直己のことをまじまじと見つめて、先輩は目を丸くしていた。

「ありや、肝心なこと説明してなかったみたいだね。てっきり、こういう説明は夕莉ちゃんがしてくれたもんだと思ってたんだけど……」

…どうやら、そうじゃなかったみたい。やれやれ。でも、今は忙しいからさ、これについては後で夕莉ちゃんにでも聞きなさい」

先輩に導かれるようにして夕莉を見ると、彼女は不機嫌そうに視線を逸らした。あまりにもいつも通りの対応過ぎて、話している先輩も苦笑する。

「まあいいや、話を戻そうか。とりあえず、なんかイレギュラーが起きちゃったみたいだから……メンドイけど作戦変更。直己さんと夕莉ちゃんには、先に《血塗れの化身》^{レッド・キャップ}の殲滅に向かってもらおう。ま、夕莉ちゃんは何度も戦ってるはずだし、たぶん楽勝でしょ。判断は現場に任せる。以上」

「了解しました」

夕莉の言葉に続くように、直己も了解しましたと口にする。すると、それから夕莉はすぐさま切り株から立ち上がり、出発準備を始める。

直己たちに引き続いて、先輩は今度は秋也に話を振った。

「秋也くんは相変わらずだ。すぐにポイントを確保して監視を開始して欲しい」

「了解つす。じゃ、オレもさっそく動きますよ」

そう言って、あの生意気な後輩は、直己への対応から考えられないほど真面目に返答して、颯爽と切り株を立ち上がる。執行者の中では、直己だけが未だに先輩の話を聞いていた。

ふいに直己の方を向き直り、先輩はこんなことを言った。

「直己くん、久々の幻想人との戦いだけど……頑張つてね？ まあ

君なら大丈夫だと思うけど、万が一ってあるしね。そのところは夕莉ちゃんが上手くサポートしてくれると思うけど」

「してくれなきゃ困りますよ」

そう口にして、それから背後の夕莉のことを流し見た直己であったが、彼女はそんな先輩とのやり取りをちゃんと聞いていたらしい。直己にかけられたのは、冷たい響きの言葉。

「……直己、無駄話なんてしてないで。すぐ出発するんだから、準

「整備えなさい」

まったく地獄耳である。直己は内心で苦笑した。

「分かってるって。すぐに終わる。——じゃ、先輩。夕莉に悪いんで、俺も行きますよ」

「ご武運を。って言っても、苦戦するわけないか。連絡待ってるよ」
いつも通りの微笑みを浮かべた先輩を見た後、直己は切り株を立て、一度だけ自らの右手に幻想武器《S09 Imagine^{イマジン}》を生み出してみた。一ヶ月前、あれから全く使っていなかったが、以前と変わらぬ感触で手元に収まる。

——これならば、戦える。

直己は納得して幻想武器を消した。それと同じくして、夕莉から声がかかった。

「行くわよ」

「ああ、行こう。これ以上、犠牲者を増やさないために」

そして、何よりも、幻想人を斃^{たお}すために。

それからすぐ、直己と夕莉は”庭”を後にした。ほとんど時間による景色が変わらぬ”庭”と違い、現実世界はすでに陽が沈んで薄暗くなっていた。

これから幻想人を殺しに行くのに——これほど打って付けな時間帯もなかった。

Chapter 2 - 02 : 四人目の執行者（後書き）

新キャラ登場含め、それなりに色々。

+

「行ってしまったみたいだね」

「行ってしまったようですね……」

他の執行者たちが各自の任務に就き、もはや”庭”に残っているのは美鈴とアリスだけになった。そんな誰もいなくなった集会所で、彼女たちはまるで過ぎ去った嵐を見たかのように、そんな一言を咳き合う。

依然として焚き火を囲む切り株に座りながら、美鈴が何気なく言った。

「しかし、今回はやけに素直に行ってしまったもんだ。仕方ないこととは言え、前回の一角獣の時^{モリゲロス}は酷かった……散々文句垂れてたもんね。どうやら、今回は別の意味で幻想人と戦おうとしているみたいだけ」

「正義感、ですか？」

同じく切り株に腰を下ろしたままのアリスが、そう問い返す。

「かもね。戦おうという志は認めるけど、やっぱり彼はあたしたちとは違うよ。……でも、まあ、それを言うなら秋也くんもか。彼もあたしたちとは少し違う。そう、裡に抱えた自らの幻想を追い求めるのではなく、それを誰かのために——と、本気でそう思っている」

「……甘いですね」

「うん、あたしもそう思う」

美鈴は懐かしさと悲しさの入り混じったような含み笑いをして、こう続けた。

「執行者とは、誰かのために戦う者ではなく、自らのために戦う者たちのこと。少なくとも、これまではそうだった。命を賭してでも

手に入れたい何か、変えたい何か、願い、望み…… エトセトラ。一言でまとめるなら、幻想。そのためにだけに自分自身の全てを賭ける愚者」

「それがあなたたちだと？」

「そうだよ。少なくとも、あたしはそれを甘んじて受け入れている」
余裕に満ちた顔でそう語る美鈴にあるのは、おそらく彼女自身のプライドだろう。これまで長年続けてきた執行者としての持論が、彼女にはあるのだ。

そんな台詞を聞いて、アリスがわずかに口元を綻ばせる。

「ふつ、自己分析だけは上手いんですから。だから、美鈴、あなたは自身が彼らのような者たちとは、違う、と…… そう考えているわけですか。自らのためではなく、誰かのために戦っている者たちのことが」

「彼らを否定するつもりはない。非難するつもりもね。けれど」

「けれど？」

「…… 少しでも、羨ましくも思う。自分と他者を天秤にかけて、他者を優先できることが。彼らの考えていることは分からないけれども、きつとそれに価値があると思うているから…… 戦えるんだろうし」

淡々と考えを口にする美鈴のことを、アリスは何も言わずにじつと見返していた。

「でもね、あたしは思うよ。彼らのしていることは、とっても素敵なことだって。だって、考えてもみなよ。彼らには、幻想以外に命を賭けられる何かがあるんだ。だから、あたしもそんな何かを抱くことができたらな——なんてことは、たまに思う」

「…… 美鈴」

アリスの感慨深そうな声にハツとしたのか、美鈴はこれまで自分が何を言っていたのかに気付き、照れ臭そうにそっぽに視線を逸らした。しかし、この集会所にいるアリスはそれに退くことなく、こんな言葉を口にする。

「美鈴……あれから、もう七年が経ってしまいましたね」

彼女たちの合間に、ふと流れる沈黙。

そっぽを向いていた美鈴が、気まずそうに硬直して、

「な、何？ いきなり。もうアリスったら、あたしはまだ昔話をする年じゃないって——」

それから、軽く誤魔化すように笑ってみせる美鈴だったが、やはり動揺はしていたのか、その笑い方にはどこかぎこちなさがあつた。「そう言わないでくださいよ。意外と七年って歳月は重いものです。初めて出会った日から——あなたは変わりましたね。外見も、性格も」

「……そういうアリスは、あの日から外見も何も、変わってないよ」
美鈴はアリスの方にゆっくりと視線を戻して、そうしんみりと返す。

「そうですね、何も変わっていませんでした」

目前で燃えている焚き火をぼんやりと眺めながら、アリスがくすりと寂しげに笑った。それに対して、美鈴は何とコメントしていいのか把握できず、ただ沈黙を守り通すだけだ。

「しかし、昔を思い出してみると、想像以上に色々なことがあつたものですね。かつては、今より多くの執行者たちがここを訪れていたこともありました。恥ずかしながら、ワタシは散っていった彼らのことを、全員思い出すことができませんよ……それくらい、死んでしまった」

「そういえば、ね。言われて思い出したよ。色んな人がいた」

「ええ、色んな人がいました……」

そんなアリスの言葉を最後にして、その場にどっと静寂が訪れてくる。いつも賑やかな話題を提供しているはずの美鈴も、人が変わってしまったかのように何も言わなくなった。

二人ぼっち。まさにそれに値する状況だった。

「あたしとアリスの関係も」七年前の災厄”から、だったね……」
滞っていた時間の中で、ふいに、美鈴がそんなことを呟いた。

どこことなくシリアスな空気を醸し出していたアリスが、何かを思い出したのか微笑んだ。

「そう、ですね。ここまで、あなたとの縁が長続きたのは、もはや運命としか形容できないかもしれせん。あの日から、あなたはずっと戦い続けているし——ワタシは観測し続けています。何も変わっていません。……できればの話ですが。これからも変わらぬまま、未永く付き合ってもらいたいところです」

そんな真面目な言葉が飛び出てくるとは予想していなかったのか、美鈴はすぐさま返答することができず、何秒か経ってから、

「ア、アリス様にしては……優しい言葉なこと。ありがたやありがたや」

「そういうところで茶化すのが、あなたの悪い癖ですよね」

「わ、悪かったね……」

そんな美鈴の態度をしげしげと眺めてから、アリスが困ったように溜息を吐いた。

「まあ、いいですけどね。こんな真面目な話は止めにしましょう。

あなたも苦手なようですし……。話は変わりますが、夕莉はともかく、秋也は大丈夫なんですか？ 何やら直己とはひと悶着ありそうな気配を漂わせていましたけど。まあ、そういう問題については、美鈴に全部任せるつもりですが」

「他人任せですか。できれば、あたしも当人たちで解決して欲しいと思ってるんだけど」

「まったく、頼りになりません」

「昔っから頼りにならなくてすみませんね」

どこからどう見ても謝る気のない言葉だったが、そんな美鈴のこのを見て、アリスがぷつと笑い始める。ようやく静かだった集会所に、笑みが戻り始めてきた。

「それにしても、ずいぶんと余裕そうですね、あなたは現場に向かわなくても大丈夫なんですか？ 美鈴、あなたは仮にも指揮官でしょうに」

「いや、今のところは監視だけで十分でしょ。何より、主戦力が《レシテ・キャップ血塗れの化身》の方に行ってしまったからね。この間隙に第二の殺人が起こる可能性はあるけれど、起こったなら仕方ないね。ただ次の殺人が起こるとしたら、今度こそ《ジャンク・ボディ不滅縫合体》については特定したいところだけだ」

「後回し……あまり良い戦略とは言えません」

「人手が足りないんだって」

アリスの言葉にそう返して、そして自らもがつくりと肩を落とす美鈴であった。しかし、そんな彼女たちの会話に冷や水を浴びせるように、ふいに携帯の着信音が鳴り響き始める。

「……おや？」

「電話、だね。どうやら着信元は——秋也くんみたいだ」

それだけを確認すると、美鈴はすぐさま携帯電話の通話ボタンを押し込んだ。

「はいはい、橘美鈴。秋也くんだね、ポイントは確保できたの？ ああ、できた。そりゃよかった。ん、何？ 話があるって？ ……で、話って何かな」

しばし、集会所に美鈴の頷きを返す声と、向こうで何かを言っている秋也の声が交互に響く。会話している美鈴の反応を、アリスは何やら注意深く伺っていたが——その通話が切れると同時に、その視線を焚き火に戻した。

「何かありましたか？」

「何やら、困った事態になったかもしれない」

それにアリスの視線が、ついと美鈴の方を向いた。

「いや、あのさ。埠頭の監視に秋也くんを配置させたじゃない？

そしたらね、何でも彼の姉——ほら、さっき話題に上がった彼女だよ——そう、日向春菜だ。彼女がね、埠頭の倉庫街辺りから出てきたらしいんだ。何か変なことに巻き込まれてなきやいいんだけどね……って、あたしは言っただけだ、ほら、彼は姉のこととなるとかかなり心配性でしょ？ だから、あたしの方からアリスに進言し

ておこうかなって思ってた」

「つまり、幻想のルール……お咎めは適用するな、ってことでしょ
う?。」

「ご名答」

そうは言ったものの、当の美鈴も困ったような表情をしていた。

「まったく、あなたは甘いんですから。そうやって、これまでも何
人もの者たちを庇ったりしてきましたね。まあ、いいですけど。
執行者の身内に何かあったりして、それで秋也に離反されても困り
ますしね」

「一つ言っとくけど、あたしが庇うのは仲間って認識した人のため
だけだよ」

その台詞を聞いて、アリスはこれまで浮かべなかったシニカルな
笑みを浮かべ、

「……ま、妥当なところですよ。それはともかく、秋也にも困っ
たものです。まあ、彼の姉が巻き込まれたのは差し引いても、会議
とか色々引つ掻き回してくれますからね。シスコンぶりも酷いで
すし」

「ロリコンじゃないだけマシじゃないの?」

美鈴が意味ありげな視線を向けてきたからか、アリスは威嚇する
ように咳払いをする。

「……ともかく。お喋りの時間は終わりみたいです。日向春菜の
件ですけど、あなたに一任します。ワタシは居場所に帰りますの
で、あなたもそろそろ仕事に移ってください。息抜きタイムは終わ
ります」

「分かってますよ。まったく、人使いの荒い」

切り株から立ち上がり、美鈴は口笛でも吹きそうなほど軽く、ア
リスに対してその言葉を返した。が、当のアリスはそれに社交辞令
的な笑みを浮かべただけで、後は美鈴に向けて背中越しに手を振っ
ただけである。

森の中に帰っていく際、アリスが一度だけ立ち止まり、こう言っ

た。

「……美鈴、どうか頑張ってくださいね」

「ああ、うん。了解した」

美鈴の返答に満足したのか、アリスは今度こそ森の中へと消えていった。

Chapter 2 - 02 : ロングタイム・フレンド（後書き）

二人の関係を再認識させる一話、のはず。

+

あれから”庭”を後にした直己たちは、幻想人の出現場所に向けて移動していた。

昼間の間、肌を炙るように照り付けていた陽は沈み、すでに辺りには暗闇が蔓延り始めている。これから、この世界に夜が訪れる。それが執行者としてはどういう意味合いを持つのか、直己は理解している。人目に付きにくい時間帯ともなれば、そこで行われるのは凄惨な戦いである。

人間たちに害を成す幻想人を殺し尽くす——執行者の時間だ。

今、直己たちは夢見ヶ丘高校から抜け出し、ちょうど北区にある住宅街の辺りを走っていた。先行する夕莉を背後から追いかけていると、彼女から珍しく話を切り出された。

「直己。あなた、秋也と口うるさく言い争ってたけれど、何かあったの？」

背後も振り返らずに話しかけてきた夕莉に、直己は多少驚いたが、「別に。会ったのも初めてだよ。あつち俺のこと知ってたみたいだけだね。……まあ、あの春菜があんなだし、弟がここまで喧^{やかま}しい奴だとは思ってもみなかった。全くの正反対だよ、あれは」

「まあ、あいつはいつもあんな口調だから、あんまり気にしないことね。ただ、今日はいつも以上にあなたに突っかかっていたような気はするけど」

冷たい物言いには変わらなかったが、これほど話しかけてくる夕莉は少し意外だった。というか、よくよく考えてみると、夕莉と会話らしい会話が成立したのは初めてかもしれない。

少し考えて、それから直己はこう振ってみた。

「夕莉も突つかかれたことがあるのか？」

「いや、私はあまりないわね」

なるほどね、と直己は特に考えることも返事をする。しかし、そうなるにあのクソ生意気な中学生は、あまり直己以外には絡まないのかもしれない。迷惑な話だ。

「それより、俺からも聞きたいことがある。さっきの会議で橘先輩が言ってたはずだ、七年前の災厄……ってな。七年前の災厄って、あれのことだろう？ 夢見ヶ丘市の東区で起こった、犠牲者と行方不明者が合わせて四百人近く、区の三割が燃え落ちた——あの大火災」

「……詳しいのね」

「夢見ヶ丘市に住んでれば嫌でも知ってるだろ。全国区のニュースだったしな。それに、あの大火災ではうちでも色々あったんだ」

「そう……あなたも大変だったのね」

夕莉の当たり障りない台詞に、直己は少しだけうんざりしそうになったが、

「とにかくだよ。あれは幻想人に関連してたのか？ 何か知ってたから教えて欲しいんだが」

「結論から言ってしまうば、そのようだけど。……というのも、その頃、私はまだ執行者にはなっていないし、大火災の全容は私自身でも把握できていないのよね。残念なことに。そうね、それでも私が知ってることといえば、あの大火災によって、それ以前と今いる執行者が総入れ替えになったとか、そんなところかしら。……まあ、他の人に聞いた方が早いわよ」

「他の人って言うと、例えば？」

「橘先輩とか。まあ、それとアリスは知ってるでしょうね」

結局はその二人なのか——と、直己は内心そう思った。そのくせ、先輩などは夕莉に解説しろなどと言わせるのだから、面倒臭がりというか、何というか。

「……とりあえず、幻想人はそういう奴らってことか」

「そういうこと。あなたも、ようやく分かってきたみたいじゃない」
くすり、と含み笑う気配が伝わってきた。どうも一角獣モノケロスの時より、
夕莉の性格が丸くなっているような気がするが、気のせいと思うこ
とにした。あまり変な期待をすると、痛い目に合いそうだったから
だ。

と、先行していた夕莉が急に立ち止まる。

「どうした？」

緩やかに減速しながら、直己はそう問いかけた。すると、夕莉は
振り返って手中の《S27 Riddy》リディを直己の方へと見せてきた。
リディが薄ぼんやりとした光を放ちながら、一定の間隔でピリピ
リと震えていた。

「……共鳴してるわ。これは、かなり近いみたいね」

自らの幻想武器を出していなかった直己には感知する術はなかつ
たが、夕莉の幻想武器はしつかりと反応してくれたようだった。

幻想武器には、共鳴という現象がある。これは幻想人と幻想武器
に、互いに”幻想”という共通点があるため発生する現象だった。
これらがごく近い距離で存在すると、幻想武器は共鳴という現象で
近くで幻想人がいることを教えてくれるのだ。

暗闇に沈んだ世界で、夕莉のリディは小さくも反応を繰り返して
いた。

「直己、そういうば今思い出したけれど、あなたは北区に住んでた
わよね？」

「ああ、そうだけど……それがどうかしたのか？」

夕莉の質問の意図が分からず、直己は眉を寄せてそう問い返した。
「なら、失敗したわね。それなら最初からあなたに案内を頼めばよ
かった。ここの辺の立地、実はよく分かってないのよね。……まあ、
これは結果オーライとも言えるけど」

そう静かに答えた夕莉だったが、しかし、その視線は直己ではな
く、その背後の暗闇に向けられていた。その意味に気付き、直己は
すぐさま背後を振り返った。

そこに小人ぐらゐの背丈をした、奇妙な赤帽子の集団が立っていた。

「なるほどね。これが《^{レッド・キャップ}血塗れの化身》ってわけか……」

直己に見るに、彼らの容貌は異様としか言いようがなかった。彼らの被っている赤帽子には染めムラがあり、拾い物の檻褌のようだ。そして、彼らの顔は皺くちやの酷いもので、そもそも人の顔つきをしてなかった。どちらかと言えば、よくファンタジー物で見かけるゴブリンに近いだろうか。

彼らの手には、背丈に合わぬ錆びた斧が握られていた。

「いわゆる雑魚よ。この世界にはよく現れるわ、こういう小型の幻想人は弱いけど、代わりに数が多いのよね。そういう点では面倒よまあ、それ以上でもそれ以下でもないんだけど」

「で、こいつらはどういう奴らなんだ？ 雑魚の一言で片付けないでくれ」

「手にした斧で人を殺しに来るような、危険な精霊らしいけどね。ああ、あと付け加えるなら、惨殺した者の血で、あの帽子を赤に染め上げるとかなんとか。……ま、放置しておく理由はないわよね、直己？」

「……」

モノケロス

前回の一角獣の時のことでも思い出しているのか、直己にかけられた言葉にはどことなく皮肉のような響きがあった。しかし、そんな彼女の言葉も、今の直己の耳には入らなかった。

「……許せない」

と、そう小さく呟いて、直己は奥歯をぎしりと噛み締めた。

「許せない、俺はそんな奴らを断じて許すことなんてできない」

近くにいた夕莉のことすら忘れ、直己は手中に《S O 9 I m a ^{マジン}g i n e》を生み出していた。あるべき武器の形が欠如した、空白の幻想武器。それを硬く握り締めると、目前にいる《^{レッド・キャップ}血塗れの化身》たちも自らの武器である斧を構え始めていた。

ここは偶然にも人通りのない路地裏で——目前にいるのは五匹の赤帽子。

「まあ待ちなさい、直己」

そう言つて、夕莉が溜息交じりに肩を叩いてくる。どうやら、まだ準備ができていなかったらしい。彼女は自らの幻想武器《S27 Ridy》^{リディ}を、血振りするようにぶんと振り下ろし、それから、いつものような凍える瞳を作り、再び化け物たちを睨み据えた。

準備完了とばかりに、夕莉が言葉を切り出した。

「さあ、仕事の始まりよ」

微笑。凍える瞳をにやりと歪ませて、

「あなたたちも、存分に愉しみなさい！」

その台詞を放った瞬間、彼女の手中にあるリディがカツと強い光を放つ。幻想武器に秘められた――能力の解放。それを確認したと同時に、直己は敵集団の方へと一步を踏み出していた。

ほぼ同じタイミングで《血塗れの化身》^{レッド・キャップ}たちからも一匹が飛び出てくる。

「許せない」

と、直己はまた小さく呟いた。

「許せない。許せない。ああ、俺はお前らみたいな奴を許すことなんてできないよ」

……だって、お前らのような奴がいなければ。

佐竹は死ぬことなんてなかった。祐二も、春菜も、誰も不幸になることなんてなかった。きつといつも通りの生活をして、くだらない話に花を咲かせて、他愛ない時間が過ぎて、それでもまだ明日は続いていて――

だから、それを奪ったお前らが許せない。

真正面から突っ込んできた赤帽子の一匹に、直己はイメージを振り下ろす。直己自身、愚策だと思つたような大振りな一撃だったが、赤帽子はそれを斧によつて受け止めた。鋼の軋りにも似た、耳障りな音が響き渡る。拮抗。しかし、直己は受け止められたと同時に、右足を繰り出し、赤帽子を蹴り飛ばしていた。

人間にしては硬い、硬質化した皮を蹴った感触。それによつて一

匹の《血塗れの化身》^{レ・キヤップ}が後方に弾き飛ばされ、殺到して来ようとした二匹目、三匹目を巻き込んで倒れ込む。

これを好機を見て、直己はすぐさま駆け寄ろうとした。が、

「……ちっ！」

倒れ込んだ一匹がすぐに体勢を立て直し、手にしていた斧を投擲した。回転しながら向かってくる肉厚の刃には、さすがの直己も防御に動かざるを得なかった。イマジンを前方に突き出して防御、回転する斧が幻想武器に弾かれ、そのまま近くの電柱に直撃する。

手の中に残る痺れを実感しつつも、だが直己は止まらない。止まらない。

同級生たちのことを想うなら、ここで止まることなど許されない。

「前に出すぎよ」

背後から呆れるような声がかかったと思った時には、すでに直己のことを追い越して夕莉が突撃していた。今まさに立ち上がったばかりの赤帽子の脳天を突き、喉を掻っ切り、幸先良く二匹を始末する。三匹目が錆びた斧を手に、夕莉の背中に斬りかかるうとしたが——その動きが、ふいに止まる。

見れば、電柱ほどの太さのある茨が伸びて、《血塗れの化身》^{レ・キヤップ}に絡み付いていた。先ほど、夕莉の幻想武器の能力解放をした時の“茨”だ。

「背後から斬りかかるなんて……悪い子ね」

捕らえた赤帽子にかける夕莉の言葉は、いつにないほど優しく、それでいて背筋が凍るほど冷たかった。

「碎けなさい」

夕莉が感情の籠らぬ一言を放つと、絡み付いていた茨が万力のような力を発揮した。その後、何かが一斉に弾けるような乾いた音は、おそらく赤帽子の骨が粉々に碎け散ったそれである。手足がぐにやりと予期せぬ方向に曲がり、血眼で絶叫する赤帽子を、夕莉の茨は勢いをつけて辺りの塀に放り投げた。

頭から叩きつけられ、頭蓋すらもが割れて飛び散る——脳漿。

「三匹目」

それは、普通の人なら視線を逸らすことも禁じえない状況だろう。しかし、直己は決して目を背けることをしなかった。これが自分たちの仕事だ。ならば、それには誇りを持つくらいの気概でなければ。

三匹に引導を渡したところで、直己はふいに暗闇を突き破ってく何かの気配を感じ、前方へと飛び出した。

案の定、その何かは回転する二枚の斧だった。おそらく、三匹目を仕留め終えたばかりの夕莉の隙を狙ったものだ。それらを直己がイマジンによって弾くと、二枚の斧は左右に流れ、そのままコンクリートを滑っていく。

ちらりと背後を伺うと、夕莉がいつになく驚いて直己のことを見つめていた。

「油断するな、夕莉」

直己は似合わぬ台詞を口にすると、それがよほど気に障ったのか、「うるさいわね。分かってるわよ」

夕莉がムツとして上目遣いで睨み返してきた。しかし、その割に強く言い返して来ないのは、実際のところ助けてもらったのが事実だからだろう。唇を尖らせる彼女を見て、直己は薄っすらと苦笑を浮かべた。

それが余計に気に食わなかったのか、

「……あなた、今、私のこと馬鹿にしたわね？　そうよね？」

疑惑の目付きをした夕莉が畳み掛けてくる。

「いや、そんなことはないよ。……それより、あいつらを見るよ」

上手くはぐらかして、直己は視線を《レッド・キャップ血塗れの化身》の方へと向けた。先ほど、斧を投擲したこともあり、赤帽子たちは武器は持っていないかったが、さすがに不利を悟ったのか、この場から逃走し始めていた。

「逃がさない。そうでしょう？　直己」

背後からかけられた試すような問いに、直己は答える。

「ああ、奴らを逃がすわけにはいかない。殺しに行こう」

「合格。それでこそ執行者よ」

そう賞賛を口にした後、夕莉はまったくすりと含み笑って、直己の横へと並んだ。彼女が手中のリディを軽く振るってみせると、コンクリートを突き破って生えている茨が急速に伸び、《血塗れの化身^{レッド・キャップ}》たちの退路を塞いだ。

「これで、もう逃げられないわ」

そう横で夕莉が発した時、直己はすでに一步目を踏み出していた。「やれやれ、ずいぶんと頼もしくなったものね」

背後から聞こえる夕莉の言葉も、もはや直己の耳には届かない。逃げ場を失い、もはや恐慌状態となっている赤帽子たちが、その瞳に恐怖を浮かべて直己のことを見返していた。しかし、直己には止まる理由などありはしない。そんな絶望的な状況で、赤帽子たちはその醜い顔を、さらに醜く歪ませた。

たじろぐ四匹目に向け、迷うことなく振るったイマジンが、真横から胴体を分断する。未だに驚きの表情を浮かべたまま、しかし、重力には逆らえずに落下していく上半身。体液で滑っている臓物が、こんにちは、とでも言いたげに飛び出して、それから^{あか}赫を噴き上げる。

真つ二つになって絶命した赤帽子を冷淡に見下ろし、直己は一度だけ、こう言葉を漏らした。

「そういえば、幻想人を殺したのは初めてだったな」

感慨も何もない。だが、その一言を言葉にしてみても、急に現実を引き戻された気がした。恐怖はない。罪の意識もない。だけど、何かの一線を越えてしまったような気は、した。

「……考えるな」

心のどこかで生まれた問いを、しかし、直己はかなぐり捨てた。真下で血溜まりに沈んでいる死体を眺めて、直己は一度だけ頭を振る。これでいつも通り。そう、いつも通り。死体を歩き越え、ゆつくりと五匹目の方へと向かっていく。流れ出ている血液は踏み度、

ぬめぬめしていて不快だった。直己が近寄るにつれて、赤帽子が悲鳴を上げ始める。聞く者をぞわりをさせる悲鳴。これもまた不快。とうとう自分だけになってしまったからか、五匹目からは戦意の欠片も見えなかった。茨で退路が塞がれているのもお構いなしに、全身を血塗れにして、それでも茨を掻き分けようとしている。そんな幻想人の姿が、直己には酷く哀れに映った。

「直己」

背後から、夕莉の声がした。と思った刹那、直己の真横を銀光のようなものが突っ切っていく。よくよく見てみると、それは夕莉の投擲したリデイだった。

投擲されたリデイが、そのまま赤帽子の背中に突き刺さる。赤帽子は一度だけビクンと身悶えして、それからぱたりと倒れ込んだ。今の一撃は《血塗れの化身》^{レッド・キャップ}にとって他ならないものだったが、不運なことに、即死にはまだ少し足りていなかった。

聞くに堪えない断末魔を上げて、五匹目は血を吐いて足掻く。

「直己」

ああ、言わなくても分かっているさ――

直己は息も絶え絶えな五匹目に近寄ると、ふと軽く吐息。それからイマジンを逆手に握り変えると、ナイフを振り下ろすのと同じ要領で、それを振り下ろした。イマジンが赤帽子の背中に墓標よろしく突き立ち、とうとう五匹目の断末魔も、消える。

誰もいない住宅街に、ようやく沈黙が降りてきた。

「……これで終わり、か」

幻想人を殲滅し尽すと、直己はそんな意味のない言葉を口走っていた。辺りを見回せば、無惨な殺され方をした《血塗れの化身》^{レッド・キャップ}たちの骸が転がっている。夕莉がそれらを検分しつつ、

「雑魚のくせに手間取らせてくれるわ。でも、これで私たちの仕事は一つ終わった。直己、とりあえず先輩に連絡してくれないかしら。たぶん、この後は作戦会議でも言ってた通り、本来の目標に斥候するはずだけど、やっぱり先輩には連絡しておかないと」

「分かったよ」

直己は肩を竦めてそう返すと、制服のポケットから携帯電話を取り出した。連絡先から橘先輩のものを選び、通話ボタンを押し込む。呼び出し音で待っている間、先ほどのまでの戦場を見渡していると、幻想人の死体が粒子となつて消え去っていく途中だった。

電話が繋がり、向こうから「もしもし」という声が返る。

「あ、橘先輩ですか？」

「ああ、直己くんね。君から電話が来たってことは、《レッド・キヤ血塗れの化身》を殲滅したってことかな？」

先輩は相変わらずのんきそうだった。何も変わらない。

「ええ、そうです。ですから、次の作戦について聞きたいんだけど

——」
「その件なんだけどさ……」

そこで先輩はわずかに言葉を濁した。

「えっと、非常に言いにくいんだけど、今日の斥候は急遽中止することにした。別の方でまたイレギュラーが起きちゃってね……ああ、でも心配なくていいよ。新しい幻想人が出たとかじゃないから。ただ、そうだね、本格的に動いてもらうのは明日からになると思う。だから、今日の仕事は終わり。明日に備えて、今日はゆっくり休んでよ」

「ち、ちょっと待ってください。あの、どういことですか？ イレギュラーって……」

直己がそう尋ねると、電話口から微かな沈黙が伝わってきた。

「実は、あたしもちょっと把握しきれてはいないんだけど……さっきね、秋也くんが監視ポイントに着いたんだ。でも、そこでどうも例の幻想人の潜伏場所辺りから彼の姉——そう、日向春菜——が出てきたらしいんだよ。それが、どうも引つかかってね。色々とデリケートな部分がありそうだから、今日は持ち越そうかなと思って」

「え、春菜がですか？ あいつ、何か関係が……」

まさかだった。しかし、それが事実だとすれば、ある意味、事態

は最悪な方向に向かっているとと言っても過言ではない。直己としては、彼女が続く犠牲者になるようなことだけは……どうしてもあつてはならないと思う。

『そこが分かんないんだよ。でもさ、ほら、こっちは弟の秋也くんもいるし、とりあえず内部で調査して貰おうと思って。だから、今日は中止』

「……とりあえず、了解しました。切りますね」

青ざめた表情で先輩との通話を切る。と、先ほどまで消失していた死体を眺めていた夕莉が、何やら訝しげな表情をして、直己の方を見返していた。

「何か、あつたの？ そう見えたけど」

「今日の作戦は中止になったみたいだ」

直己は先輩から言われた事実を、とりあえずその通り口にする。

「……どういうこと？」

「実は、俺と先輩もよく分かってない。ただ、例の幻想人のところに秋也の弟の、春菜が現れたらしい。現状の把握ができないから、様子見と調査を合わせて今日の作戦は中止するんだとか。そういうわけで、今日の仕事はここで終わり。ゆっくり休めって言ってたよ」「なんだか、良く分からないわね……」

「それは俺も同じだ」

眉を寄せて考え込むような仕草をする夕莉だったが、実際、直己もそう返すしかない。

「……まあ、先輩が動くなど言っているなら仕方ないわね。私にそれに従うとするわ。どうせ、私たちが必要な場面になったら嫌でも連絡は来ると思うし」

ふう、と心底疲れたような溜息を漏らして、夕莉が颯爽と背を向けた。彼女はそのまま背中越しに手を振って、

「じゃあ、そういうことで。私は帰るわ」

「分かった。じゃあ、明日にでも、また”庭”で」

そうね、と夕莉が代わり映えしない台詞を返す。

そして、彼らは先ほどの戦いなどなかったかのように、また各自の生活へと戻っていった。

十

ふう、と息を吐くと、淡い紫煙が部屋に広がった。

あの”庭”での会議の後、例の幻想人のいる夢見ヶ丘埠頭を監視するため、付近のとあるビル屋上を監視ポイントとした秋也であったが、遅れて交代要因の橘先輩が到着したため、今はひとまず自宅の方へと戻ってきていた。

夢見ヶ丘西区にある自宅。自室の窓を開けてタバコを吸っていた秋也は、どうしても先ほど起こった事態についてを回想せずにはいられなかった。

「完全にはまだ分らないけど、それにしても……」

まさかこんなことになるとはな――

秋也は煙を吐き出しながら、胸中で苦い思いを浮かべざるを得ない。さすがに自分の姉が例の幻想人と関わりがあるという事実は、考えてもみなかった。いや、まだ決まったわけではないのだが……しかし、軽視するわけにもいかない。どうして、こんな面倒なことになったのだろう。秋也としては、これ以上、面倒な事にならないのを祈るばかりである。

どうか何かの間違いであれば、と秋也は願っていた。だが、心のどこかでは、そんな願いを否定している自分もいるのだ。言ってみれば、執行者としての直感というやつか。

「……はあ」

最後の一口を吸い終えて、秋也はタバコの吸殻を灰皿へと押し付ける。それから、おもむろに窓際まで歩いていくと、ガラリと窓を閉めた。中学生にあるまじき喫煙行為を行っておきながらも、今の彼に罪悪感はない。

今、秋也の頭を独占しちるのは、姉のことばかりだった。

姉のことばかり考えていると、ふいに「シスコン」と言われた気がした。今日、「庭」で出会った菅原直己とかいう奴を思い出してしまふ。ふざけるな、何でお前が出てくるんだ、クソが。

自室を出て、そのまま姉の部屋の方へと向かっていく。橘先輩に、探りを入れて来い、と言われたのだから、事情を探らないという選択肢は存在しない。にも関わらず、秋也はなんとなく姉の部屋に行く気がしなかった。姉とはいえ一応は女の子の部屋だから、かもしれない。

……いや、でも私情は抜かないと。これは仕事だ。

もう一本、タバコに火を付けたいという衝動に駆られたが——辛うじて自制する。口寂しさを覚えながらも、自室を後にした。足音を殺して、ゆつくりと姉の部屋の方へと近づいていく。

しかし、ふいに思った。

「……いや、オレが堂々としていないのはおかしい」

まるで自分が不審者になったかのようなだった。いくらなんでも、これはおかしい。

しかし、そう思いながらも、拳動不審のまま姉の部屋の前まで来てしまふ秋也であった。変にどぎまぎしつつ、何となく思う。そういえば、秋也はあまり姉の部屋に入ったことがなかった。あっちが秋也の部屋に来ることはよくあるのにも関わらず、だ。

……せめて、このどぎまぎはそのせいだと思いたい。

「また変に意識しちまったじゃねーか……」

ノックするだけでも関わらず、それを実行する勇気が出せなかった。

それから、しばらくの間、秋也はドアの前で懊悩することになる。しかし、その時、彼はあまりにも自らの思考に没頭しすぎて、一つ大事なことを忘れていた。それはこちらからノックしなくても、部屋には入ることのできるという——当たり前前的事实である。

姉の部屋から、どたどたと慌しい足音がした。それが徐々に近付

いてくる。マズい、と思った時には、何もかもが遅い。目のドアが勝手に開き、秋也の胸板に何かが突進してきた。

「んぎゃっ」

強烈な突進を食らい、秋也がのけぞる。すると、聞き慣れた声が出た。

「うわっ、あ、秋也っ……だったの？」

「……姉ちゃん」

しまった、と秋也は本気で後悔した。ドアはこちらから開く以外に、向こうからも開けることができるという当然のことを失念していた。

秋也の胸板にぶつかった後、驚いたような表情で見上げてくる春菜であったが――それは秋也にとっても同じだった。あまりに唐突のこと過ぎて、秋也はただ毒気が抜かれたように、姉の顔を見つめ返すことしかできない。

見つめ合う、姉と弟。

……何だか、すごく気まずい。

「あのさ……」

とりあえず、何か喋らないとマズい、と口を開いた秋也だったが、「にしても、秋也、ちょうどいいところにいるじゃない。わたし、今、そっちの部屋に行こうと思ってたんだよね。ほら、入って入って。ちよっと姉ちゃんの話相手になりなさい」

「え、あ、そう……じゃあ、邪魔するけど」

奇しくも姉も話したい何かがあったらしい。偶然に助けられたことに感謝しつつも、しかし、姉なら本当の不審者が部屋の前になつたとしても部屋に招きいれてしまいそうな気がして、少し心配になった。これで彼氏持ちにでもなったら、大丈夫なのだろうか。

と、ふいに春菜がくんと秋也の近くで鼻を動かした。そんな仕草にどきりとする。

「……秋也、なんかタバコ臭いけど」

「あゝ、実は吸ってきた……」

言ってから後悔した。春菜は不愉快そうな顔になって、

「タバコ吸うのはやめなよ？　それで女の子の部屋に入るのは嫌われちゃうぞ？」

「努力はしてみる……」

普段、秋也が両親の前や学校では口にできないくらい素直な返事だった。いつもは悪ぶっていても、姉の前ではどうしても悪ぶることができないのだ。

「まったく」

春菜が不満そうに頬を膨らませて、自らの部屋に戻っていく。それに秋也もどこかよそよそしく続いた。

片付いているかな、と軽く不安になったものの、意外にも姉の部屋は片付いていた。人の部屋を見れば性格が分かるとよく言うが、少なくとも姉は鈍くはあれど、ずぼらではなかったということか。ちなみに、秋也の部屋は全くと言っていいほど片付いていない。

姉の部屋にある本棚には、いつも読める小説やら童話やらがいっぱいあった。

「ねえねえ、昨日さ、なんかスイスだかドイツ辺りの名前について質問したよね？　わたしがさ、アイディアが出ないから手伝ってよって」

春菜が自らのベッドに腰を下ろして、そう話を切り出してきた。秋也も姉の部屋を見回すのは止めて、近くにあったクッションの上に座り込む。

「そういえば、そんなこと言ってたね」

昨日、姉があまりにも突飛な質問をしてきたものだから、秋也も覚えていた。

「……あれって結局は何だったの？」

「あれね、わたしがあある人に名前を付けてあげたかったから、秋也にも聞いたの。なんかね、その人は自分の名前がないって言ったの。それで出身地を教えてって言ったら、スイスカドイツの辺りかなって言ってたから、そこらへんから何かいいのなかった」

「なんだそれ」

姉の発想には大変驚いたが、その思考回路については秋也にも分からなかった。しかし、なんとなく会話内容から滲み出ている違和感。それには気付いた。

これは、先輩が秋也に探らせようとしている、幻想人の話題ではないか？

「あのさ、とりあえず聞くけど……それって、どこの人？」

「……う」

「あれ、分かんないの？」

秋也は冷静にそう返したが、春菜にとってはそれが面白くなかったらしい。

「う、うるさいなあ……！ と、ともかく、その人にわたしが名前あげたの！ 昨日、秋也が言ってたでしょ？ ヨハンってドイツの辺りの名前らしいって！」

「は、はあ……」

春菜の発言に気圧される形で、秋也の返答が小さくなる。結局、その名前をあげた人というのが、どこの誰なのか。それについてはゴリ押しされてしまっていた。

「あ、でもあのヨハンって名前、わたしも気に入ったんだよね。ありがとね、秋也」

「……そりゃどうも」

何か納得できないものを感じつつも、秋也はそう答える。

ちなみに、そのヨハンという名前について、秋也は深く考えたわけではなかった。というのも、昨日、部屋でゲームをしていたら姉が突然入ってきて、さっきのような外国人の名前——もとい、意味不明な質問をし始めたのである。あの時、秋也はあまりにゲームに夢中になっていて、適当な名前を口にしたただけだ。

自分が適当に口にした名前が採用されてしまうとは——と、秋也は妙な感慨を覚えた。が、そんなこと、姉の春菜にとっては知ったこっちゃなかったらしい。彼女は身を乗り出して、捲くし立てるよ

うに、こう続けてくる。

「でね、でねっ。その人と話してただけど、わたし、今度は弟も連れてくるって言っちゃったの？。だから、今度は秋也もわたしと一緒に来て、その人と会ってもらえないかなあと思って……。ほら、秋也は受験生だけどさ、もう部活も終わってるし暇人でしょ？」

「まあ、暇人なのは事実だけど……」

そう言っ、秋也はぱりぱりと頬の辺りを搔いて、苦笑した。

「でもさ、オレはその人のこと、やっぱ何も分らないよ。姉ちゃん、その人はどういう人なんだよ。それが分らないと、オレだつて何も言えないだろ？」

心の中で、我ながら改心の台詞だと思った。

「む、む……」

眉間の辺りを手で押さえながら、彫像のように動かなくなる春菜。「正直に言いなよ、本当は姉ちゃんも分かんないんじゃないの？その人のこと」

それに対して、秋也は極めて冷静に、それでいてゆっくりと諭すような言葉をかけた。すると、ふいに春菜はポーズを解いて、どこか気まずそうに視線を逸らしながら、答えた。

「……まあ、結構分らないところも、あるかな」

「だろうと思った」

呆れたように溜息する秋也に、だが春菜は少しだけ反論しようとする。

「で、でもねっ、わたしにも分かつてることもあるんだよ。これまで名前がなかったのは当然だけど——家族がいなくて一人ぼっちとか、人間が嫌いだとか、すごく方向音痴だとか、コーラが好きだとか、色々……」

「でも、やっぱりその人が何者なのかは、分らないんでしょ？」

秋也がそう問いかけると、春菜が一度押し黙り、

「……うん、まあ、確かに。姿も見たことないし——」

「えっ、ちょっと待って、姿も見たことないって？」

「う、うん……そうだけど」

そこでまた会話を一旦中断させると、先ほどまで強気だった姉もどことなく威勢がなくなってきた。秋也はというと、探せば探すほど姉のボロが出てくるような気がして、なんだか頭が痛かった。

「……あのさ、姉ちゃん。そんな人とともに会話してたのか？」

「お、おかしい？」

そりゃ、おかしいも何もあったもんじゃないだろ——そう秋也は思ったが、しかし、あえてそれは口にしなかった。いつも鈍い姉だとは思っていたが、まさかここまでだつとは。どこかで怪しいと思つたことはないのだろうか。

何もかもが謎に包まれた、素性の知れない人物。

「……オレだつたら、薄ら寒くて会話もしたくないけどな、そういう人」

そんな奴とともに会話できる姉も、よほど常識を逸脱している。

「ちなみに、姉ちゃんはどこでそいつと話してたんだよ。大体、仮にオレが行くとして、どこで待ち合わせる気なんだ？」

「埠頭の倉庫街だよ。秋也を連れて行くとしても、そこかな」

「……なんか、すごく人気のないところだな」

それにアリスから伝えられた例の幻想人の出現位置に、とてつもなく近い。今だつたら確信を持って言える。姉の言っている人物は、よほどのことがない限り、例の幻想人だ。改めて事実を突きつけられると、秋也の背筋をゾツとするものが通り抜けていった。

「……分かったよ。それだけ文句言ってるってことは、秋也は行かないんだ」

ふいに春菜が拗ねるような口調で、そう呟く。

「あ、いや、それなんだけど……」

これまで散々なことを言っておきながら、秋也はそこでお茶を濁した。

ここでノーと答えてしまえば、もちろん秋也は自由に動くことができる。しかし、問題はそこではないのだ。秋也が埠頭に行かなく

とも、この鈍い姉は、きつと一人でヨハンとやらに会いに行くことだろう。これは執行者としてではなく家族としてだったが、姉にそんな危険は冒させたくなかった。

かといって、イエスと答えればどうなるか。

秋也は姉に連れられるまま、こちらから例の幻想人と接触することになる。この時、最も問題なのは、姉がいることで不用意に幻想武器を出すことができないことだ。非常事態ならば出すことは辞さないつもりだが、それでも、自らの幻想武器《R04 Carlo^ス》を出すことができないのは、あまりに痛すぎる――

要するに、秋也は決断を迫られていた。

「なんだかんだ言つといてあれだけど……オレも行く」

「え、来てくれるのっ!？」

春菜が大きく目を見開いて、笑ってみせる。そんな姉と素直に笑い合えるほど、秋也には余裕も糞もなかったが……しかし、彼はあえてこれを最善策とした。

ただ一人、姉をその場所に行かせるよりは、こっちの方がずっといいと思ったからだ。

「……ああ、うん。行くよ」

「んじゃ、明日の放課後はよろしくねっ。わたしから秋也の携帯の方には連絡するからさ。そしたら、埠頭の倉庫街に行きましょ。ヨハンと合わせたげるから!」

この状況で、あえて頭が痛いことを挙げれば――その守るべき対象が、まったく自らの危険さを自覚していないところだろうか。

「……とりあえず、分かったよ」

終わってみれば、秋也が姉に話そうと思ってたことは、全て向こうから話されていた。よって、ここで姉の部屋に留まる理由はない。秋也はクッションから腰を浮かして、ゆっくりとドアの方へと歩いていった。

「オレ、部屋に戻るから。明日は頼んだ」

「はいはい」

背後の和やかそうな声を聞きながら、静かにドアを閉じる秋也であつた。

廊下を歩いて自室に戻る。と、秋也はすぐさま部屋の窓を開けて、転がっているタバコのパッケージを手に取った。一本取り出して、それを口に咥える。百円ライターで火を付けて、ふう、と一息。

「……先輩に連絡しとこうかな」

とりあえず、まだまだ落着とはいかないものの進展はあつた。明日の予定を組むためにも、現状を伝えておくことは重要だろう。そう考えて、秋也は自らの携帯電話を手に取ると、アドレス帳から橘先輩の電話番号を探して、それから通話ボタンを押し込む。

ブルルルル、と耳元で音が鳴り――それが唐突に終わる。

「あ、もしもし。橘先輩ですか、オレ、秋也ですけど。こっち、進展ありました」

タバコの煙を吸ったり吐いたりしながら、先ほどまでの事情を伝える秋也。それに対し、電話口の向こうにいる美鈴が、伝えられてくる情報にのんきな相槌を打っていた。

だが、その通話は長引くこともなく、わずか一分にも満たないうちに、終わる。

翌朝、教室に行くとき登校してきた祐二に話しかけられた。

「よつ、直己」

いつもと何ら変わりのない挨拶。しかし、昨日は休んでいた同級生に無駄に明るい声をかけられると、直己はいつものようにすぐに反応することができなかった。佐竹が死んでしまってから、今日で二日目。だがそれでも、教室には佐竹の話題は溢れているのだ。

一瞬は驚いた直己だったが、しかし、すぐに普段どおりに接するために笑みを浮かべる。

「よつ、昨日は休んでたみたいだったけど、大丈夫だったの？」

「ああ、まあな」

そこで一度、会話が切れた。なんとなく居心地の悪い空気が広がる。

直己はどうしても薄っぺらな同情は口にしたくなくて、違う話題を振ってみることにした。

「一時間目の数学、ダルくない？ あの先生、性格悪いじゃん？」

「ああ、それは同意だな。……でもよ、直己さ、お前ってあの授業ほとんど聞いてないんじゃないか？ 俺、窓側の席なのをいいことに上の空なの、よく見るぜ」

「だって、あの先生の授業は退屈じゃないか。話がつまらないくせに、性格も悪いんだから救えないよ」

「それにも同意だけど……でも、授業聞いてないでテストは大丈夫なのか？ 近いぞ」

「大丈夫だと思う？」

直己がおどけるような表情を浮かべると、祐二は呆れ顔を作って

見返していた。とはいえ、やはりいつもより元気がなさそうに見えるのは、今はいない友人のことがまだ引つかかっているからだろうか。

ちらり、と直己は感づかれないうちに視線を他へと投げる。

佐竹の机には、花瓶が置かれていた。よくドラマなどで目にするような光景だったが、こうして実際に見ると笑えなかった。クラスの各場所で生徒たちが会話を繰り広げているにも関わらず、どうしてもあの付近にだけは、ぽっかりと空洞ができていた。まるで時間が切り取られてしまったかのように。

ふと視線を戻すと、祐二が苦い顔のまま、こう言った。

「せいぜい、赤点は取らないようにしろよ？」

「そうだね。ま、祐二も赤点だけは取らないようにね」

実際のところ、まだ直己たちは入学したての高校一年生だ。だから、これまで受けたものと言えば中間テストぐらいである。しかし、あと一週間もすれば夏休み前の試験、期末テストが始まる。ここで赤点でも取れば、直己の両親もいい顔はしないはずである。

「こう見えても、俺は言うほど成績悪くないんだがね」

自信満々に言っただけの祐二に、直己は苦笑いを貼り付けて返した。

「それ、自分で言うのかよ」

「……ちえっ、分かったよ。だったら見てろって、この期末でいい成績叩き出してやるからさ」

「言っただけ？」

直己が笑いながら確認を求めると、祐二は「無論だ」と厳粛な面持ちで頷いてみせた。かなりの自信である。直己にも期末テストにささやかな楽しみができた。

と、そんな他愛のない会話をしている直己たちの下に、ふいに近付いてくる人影があった。

「あ、今日は二人ともいるんだ」

話に夢中になっていた直己が、ふいに視線を向ける。

見れば、やたらと間の抜けた少女、春菜がそこに立っていた。昨日は今にも泣きそうな顔をしていたものだが、今日は特にそんな様子はな。祐二が学校に来ているからかもしれない。

先ほどまで、期末テストの話題で盛り上がっていた祐二だったが……その視線が春菜の方を向き、そしてゆっくりと逸れた。

「あ、ちよつとお、祐二くんなんで無視するのよ〜！」

不服といった表情をしながら、春菜が祐二の肩を揺する。

「いや、何となくだよ……何となく」

「む、失礼しちゃうな。学校来てそうそう、そんなこと言われるとは思ってもみなかったよ。大体なんなのさ、いつも祐二くんはわたしに対する扱い悪い！」

頬を膨らませて子供のように主張する春菜であった。しかし、依然として肩を揺すられている祐二は、そんなことも意には介さず、呟く。

「こういう風に、朝っぱらからやけにテンション高いからだろ……」

「お前ら、仲いいよな」

目前でじゃれ合っている二人のことを眺めながら、直己は何気なくそう口にした。すると、春菜が嬉しそうに微笑みながら、

「でしょでしょ？」

「……勘弁してくれよ、そういうの」

苦りきった表情のまま、そう口にする祐二だった。

「でもさ、祐二くんも今日は学校に来てくれたわけだし、わたし、安心してゐるんだよ？ だからさ、今日ぐらいはテンション高くなるのも仕方ないよね？」

「さすがにそれは言い訳だろ……」

あっけらかんと言つてのける春菜に、祐二の苦笑いが返る。しかし、そんな祐二がいつになく真面目な表情をして、照れたように頭を掻いた。

「……でも、まあ、何だ、お前らには感謝してるよ」

「何言ってるのよ〜。わたしたち、トモダチじゃない。それくらい

当然だよ」

ねえ、直己くんもそうでしょ——と、春菜が直己に振ってくる。

「ああ、俺もそう思うよ。俺らは友達じゃないか、祐二」

直己は笑ってみせた。もちろん、友達という気持ちに偽りはない。しかし、先ほどの春菜の台詞は、今の直己にしてみれば眩しすぎた。後ろめたいものがあるのも事実だったからだ。

表面上では笑顔を作りながらも——心は軋んだ。

「なんつうか、照れ臭いけど、ありがとうな……二人とも」

こういうやり取りには慣れていないのか、相変わらず祐二は照れ臭そうだった。

薄っぺらな慰め合いと、そう切り捨ててしまえばそうなのかもしれない。でも、直己としては、今はそれでもいいように思えた。どれほど薄っぺらで、その場凌ぎのものだとしても……今の祐二が立ち直るためには必要なものだ。

と、教室で立ち話をしていた直己たちの下に、ふと授業開始の鐘が鳴り響く。

「やべえ……鐘だ」

辺りで会話していたクラスメートたちが、一斉に席へと戻っていく。それで気付いた。そういうば、一時間目はあの嫌味ったらしい数学教師である。こんなところでばやばやしていたら、きっと嫌味を言われることだろう。

「あつ、わ、わたしは席戻るね！」

春菜があわあわとしつつ、自らの席へと帰っていった。

もう時間がなかった。直己は今まさに席へと戻っていかうとする祐二に、こう言葉をかけた。

「また時間があつたら話そう、祐二」

「……そうだな」

ふつと微笑んだ祐二の表情を見て、直己はひとまず安心した。急いで自らの席へと戻る。着席して、机の中に入れっぱなしにしていた数学の教科書を引っ張り出す。

それと時を同じくとして――
ガラリ、と教室の引き戸が開けられ、あの嫌味ったらしい数学教師が入ってきた。

Chapter 2 - 03 : 日常の狭間（1）（後書き）

文章量が高んでいたので分けての投稿です。

午前中の授業は終わり、昼休みになった。

教室でいつものように弁当を広げ、友人たちとの昼食を楽しんだ直己であったが、それも終わると友人たちは各自どこかへと行ってしまった。暇を持て余すこととなった直己は、暇潰しも兼ねて図書室へと足を踏み入れていた。

夏も本番といったこの時期、しかも太陽が猛威を振るっている時間帯ともあれば、さすがに屋上へ行く理由はない。それならば、冷房の効いた図書室にでもいる方がよほど懸命だ。

何よりも、図書室の静けさはいつ来ても居心地がいい。

「……寝よう」

他の生徒が読書やら自習に励んでいる中、直己は人気のないテーブルに近寄り、傍にある椅子を引いて座った。そのままテーブルに身を預けて、うつ伏せになる。

まだ体力的には余裕があった。だが、それは放課後までならの話である。今日の夜、おそらく行われるであろう幻想人との戦いが控えている直己にしてみれば、ここらでの休止符を挟んでおかねば少々辛い。執行者は夜の活動が多いから、どうしても昼間は学生をしている直己としては、睡眠時間に不安が残るのだ。

このまま三十分ぐらい休むか——と、直己が思っていた矢先だった。

「あらら、珍しい人がいるね」

背後からかかった茶化すような言葉に、直己の意識が覚醒した。思わず、背後を振り返ったものの——その時には、すでにその人物はするりと隣の席に身を滑り込ませていた。

悠然とした、どこか人を食ったような態度の人物が、そこにはいた。

「……橘先輩」

「や、まさかこんなところで会うなんてね」

悪戯っぽく笑ってみせる先輩には、年上にも関わらず稚気のようなものが滲み出ていた。

「そういえば、”庭”ではよく会うけど、生徒として話したのは初めてだね」

「言われてみれば、そうですね。……ところで、何か用ですか？」

一応、ここが図書館ということもあったので、直己は小声で問いかけた。すると、そんな直己の反応を察したのか、先輩も顔を寄せてくる。

「別にそういうんじゃないってば。でもさ、こうして偶然にも学校で会ったわけだし……たまには暇潰しもいいかと思ってね。何よりも、ほら、直己くんは一角獣を倒した後から、”庭”に来なくなっちゃったじゃない。あたし、結構寂しかったんだよ？ 分かる？」

「……それについては、俺も悪かったとは思ってます」

「それならよろしい」

先輩はにっこりと笑みを浮かべてみせた。

「にしても、昨日は《血塗れの化身》レット・キャップの殲滅で活躍したそうじゃない。君の活躍、先輩は嬉しいぞ？」

「ありがとうございます……」

「ご褒美にぎゅっとしてあげようか。それとも、なでなでされるのがいいかな？」

「い、いや、別にそういうのは……」

「いらないんですけど——と言おうとしたのだが、それよりも先に先輩にハグされていた。慌てふためく直己のことなどお構いなしに、先輩はそのまま頭を胸元へと寄せて、撫で始める。

いくら静かな場所とはいえ、他の学生たちも利用する図書館だ。そこでこんなことをされると、恥ずかしくて堪らなくなる。しかし、赤面したのを先輩に悟られたくないのもまた事実だったので、直己は動揺を抑え込んで、こう返した。

「……け、結局、どっちもしてるじゃないですか」

「あたしは欲張りだから」

先輩がくすくすと笑いながら、耳元でそつと囁いてくる。

「ところで、昨日の《血塗れの化身》^{レッド・キャップ}だけど、君は何匹倒したの？」

「トドメを刺したのは、二匹……ですかね」

先輩に抱きしめられて耳まで真つ赤だったのだが、唐突に話題を戻されると、跳ね上がった鼓動が少しずつ収まってきた。というのも、心の奥で何かひやりとしたものを感じたからだ。思い出してしまったのだ。自分が幻想人にトドメを刺したという——あの事実を。

「直己くん。君は彼らを殺した時、どう思った？」

先輩からの問いかけ。それは相変わらず優しいままだ。

「特に何も」

「本当に？ 強がるのも、嘘つくのもしだよ。本当に、君は何も思わなかったの？」

「……実は、少しだけ」

先輩に身を預けたまま、直己はそう小さく呟いた。直前までは迷いなどなかったはずだ。だけど、敵にトドメを刺そうとした時、直己は改めて自分のしよつとしてこの重さを思い知ったのだ。誰かの命を奪う、ということ——

「それは何もおかしいことじゃないよ」

先輩の声が少し悲しげな響きに変わり、直己の耳元をくすぐった。

「そつ、何もおかしいことじゃないんだ……」

「先輩、俺は人殺しになっちゃんですか？ 幻想の何かとは言え、彼らだって”人”だ。幻想人って言うくらいなんだから、そうですよね」

「いいや」

これまでと同じように、先輩の手がそつと直己の髪を撫でた。まるで母親にでも抱きしめられているかのような不思議な心地の中で、先輩が続ける。

「……君は、とても優しい人間だよ」

「そんなことは、ないです」

「自分を卑下するのはやめなよ。君はちゃんと常識を知っているし、何よりも、とても優しく……思いやりのある人間だ。大丈夫、この世界ではそれが普通。正常な人間だよ」

「自分ではそう思っではいません。けど」

「けど？」

先輩がゆるやかに聞き返す。直己は臆せず続けた。

「仮にそうだとしたら、先輩は俺なんかよりも、ずっとずっと正常な人間ですよ」

「……そんなこと、ないけど。でも、ありがとう、直己くん」

先輩の口から、優しい言葉が漏れる。

と、ふいに先輩の抱擁が解かれた。耳元をくすぐっていた声が、ぬくもりが、匂いが離れていく。こういうのはどうかと思うが、直己としては少し名残惜しくもあった。照れているような先輩の顔が、ちょうど直己の正面に来た。

「やっぱり、直己くんは優しい人だね。あたし、君には壊れて欲しくないかな」

言っていることが良く分からず、直己は聞き返した。

「……どういう、ことですか？」

「あたしはね、こう思うんだ。直己くんはさ、このまま幻想人を殺し続けていたら……いつか心が壊れちゃうんじゃないって。だって、君はあまりにも純真すぎる。いつか耐え切れなくなるような、そんな気がしてならないんだよ」

「そんなこと……ないです」

「そうかな？　じゃあ聞くけど、直己くんはどうして執行者に戻ってきたんだい？」

「……どうしても、今回の幻想人のことが許せなかったからです」
それを口にする、ふいに直己の脳裏に同級生たちのことが思い浮かんだ。不幸になったのは佐竹だけではない。彼が死んだことに

よって、みんなが不幸になった。その事実だけは、どうしても許すことなんてできない――

今回の幻想人がいなければ、こんなことにはならなかったのだから。

「それは、正義感かい？」

「……自分でもよく分かりません」

「そっか……」

直己の言葉を噛み締めるかのように、一度、先輩が黙り込む。それから顔を上げて、

「ともかく、君は純真すぎるよ。君は優しい、だからこそ脆い。他人を抛り所にするってことはね、他人に命を預けるようなものだ。知っているかい、いつでも人を殺せる者は、いつでも自分勝手な人間なんだよ」

そんな先輩の言葉を、直己は何も言わずに聞いていた。

「でもね、実はコツがあるんだよ。自分を傷つけないようにするコツが」

「コツ、ですか」

うん、と先輩は頷いて、それから朗らかな笑みを浮かべた。

「仮面をね、被るんだ」

「か、仮面を……？」

「あ、もちろん、直接被るわけじゃないよ？ 勘違いしないでね。被るのはね、心にだよ。仮面のようなものを一枚、心に身に着けるんだ。自分の心が痛むことのないように、ね」

「それって――」

「うん、ある意味、理論武装ってやつかな？ まあ、でもね。これがあれば、どうにでもなるもんだよ。あとは目的を遂行するだけ。そうやってこれまで、あたしも、夕莉ちゃんも、アリスだって戦ってきた。実のところ、これが一番楽なんだ。自分を守ろうとすればさ」

先輩の言おうとしていることは、直己にも何となく分かった。だ

けど、それが中途半端に理解できてしまったから、直己は返す言葉を失った。だって、それは――

「君は、卑怯だと思うかな？ でもね、執行者を続けるためには必要なことだ、これは」

「先輩は……」

「うん？」

「先輩は、自分に嘘をついているんですか？ そうやって、仮面を被ることで」

すると、先ほどまで饒舌だった先輩の動きが、一瞬だけ、止まった。

「そう、かもね。でも、あたしはそう考えたくないな。なぜなら、それを認めてしまえば、今のあたしは執行者として戦えなくなるかもしれないからだ」

先輩は意地悪そうにくすりと笑って、直己の質問を受け流した。

「……そういう直己くんは、どうなの？ 自分を誤魔化したり、嘘をついたことはないの？」

「あります。でも、俺はできるだけ仮面は被りたくないって、そう思います……」

「そっか。なら、野暮用だったかな」

先輩は少しだけ悲しげにそう言って、直己の隣の席を立った。どうやら、お喋りの時間は終わりということらしい。直己も腰を浮かせて立ち上がる。

「あ、そうそう……今日の放課後だけど、すぐに”庭”に来てくれるかな。新しい任務だ。秋也くんがさ、日向春菜――彼女に連れられて、幻想人に会いに行くらしい。いわゆるスパイだね。というわけで、あたしたちはそのバックアップ」

「ってことは、やっぱり春菜は例の幻想人と関わりが――」

「ああ、うん。あつたらしいね」

先輩は何の気なしに頷いて、いつものように微笑んだ。

「ま、そういうこと。無理しない程度に、よろしく」

「橘先輩」

立ち去ろうとした先輩のことを、直己は声を抑えることなく呼び止めた。いくら人気のない図書室といっても、辺りにあった人の目が一斉に向くのが分かった。

「色々話してくれて、ありがとうございました」

「そんな大層なものじゃないよ。でも、どういたしまして。また会おうね」

先輩はそう答えると、何気なく手を振って図書室を後にしていった。

+

学校の授業が終わり、放課後。秋也は茹だるような暑さの中、夢見ヶ丘南の埠頭から——じつと海を眺めていた。

今日の空は、雲ひとつない快晴である。おかげで照り付けてくる日差しはいつにも増して強く、このまま外にいるのは苦痛としか言い様がない。だが、それでも彼がここに立っているのには訳があった。今日の放課後は、姉の春菜に連れられて約束の場所に行くことになっているのだ。

この夢見ヶ丘市に現れた、例の幻想人の下へと。

打ち寄せる波を眺めながら、秋也は口元からタバコの煙を吐き出した。暑さには嫌気が差すものの、それでも人気のない場所での一服はたまらなく美味い。

タバコが短くなってきたので、秋也はそれを捨てた。踏ん付けて火を消す。と、その時、秋也の背後から間の抜けた声が聞こえてきた。

「遅くなってごめん。秋也、もしかして結構待ってた？」

呼吸を荒げ、汗だくになりながら駆け寄ってきたのは、姉の春菜だった。高校の制服姿のままである。脇に抱えた学生用のカバンがやけにずっしりとしていた。

「いや、全然。そんなに長く待ってたわけじゃないよ」

「そっか、ならよかった」

和やかに笑ってみせる姉を見返してから、秋也は倉庫街の方を指差した。

「あっち……なんだよな、その例のヨハンとかって人は」

「うん。目的地に行けば、今日も来ると思う」

なるほどね、と秋也は倉庫街の方を眺めながら、そう呟いた。これから、例の幻想人と接触することになる。コレまで以上に気を引き締めねばならないだろう。一応、万が一に備えて応援の執行者たちは呼んでいるが……できるだけ、ヘマはしたくない。

と、そう人知れず決意を固める秋也であつたが——その横では、そんなことなどお構いなしに、春菜がペットボトルのコーラに口を付けていた。まったく、のんきなものである。

秋也は足元にあるタバコの吸殻を摘み上げると、それを携帯灰皿に投げ入れた。

「姉ちゃん、行こう。案内はできるんだろ？」

「もちろん。あ、もしかして秋也はわたしが案内もできないと思つてたわけ？」

「……まあ、うん」

秋也は微苦笑のようなものを浮かべながら、頬の辺りを搔く。これまで姉は何度か迷子になつてしまつた前科があつた。それを考えれば、当然のことである。

「失礼しちゃうわ、まったく」

ふん、と顔を逸らして春菜が不満を主張して、そのまま倉庫街の方へと歩き始める。対して、秋也は依然として苦笑を浮かべたまま、その背中を追つた。

倉庫街は人気がなく、街中の喧騒からは隔離されていた。あまりに人の気配がしないものだから、異世界に踏み入ってしまったのではないかと錯覚しそうになるほどである。アスファルトだけが相変わらず熱気を帯びていたが、真夏だというのに秋也は薄ら寒かつた。

「なあ、姉ちゃん」

倉庫街に入つて数ブロックほど歩いた頃だろうか、秋也はふと問いかけた。

「……で、倉庫街のどこで会う予定なわけ？」

「すぐそこだよ」

「すぐそこって、ここら辺、待ち合わせるになりそうところないけど……」

あまりに倉庫街に入るのを目的とし過ぎて、秋也は肝心なことを忘れていた。というのも、倉庫街のどこで出会うかだ。ブロックごとに整理された倉庫街では目立つようなものもないし、ここらが待ち合わせ場所だとすれば、ずいぶんと分かりにくく不適切だ。

信用してないわけではないが、姉の案内について少し不安になった。

「姉ちゃん、案内できそうになかったらちゃんとオレに言ってくれよ」

「またそんなこと言うっ」

まあ、わたしに信用ないのも分かるけどさあ——と、春菜がぷりぷりと頬を膨らませる。しかし、そんな彼女がふいに止まり、これまで進んでいた道と別の方向を指差した。釣られるように秋也の視線も、そちらへと向かう。

そっちの方は倉庫街での行き止まり、要するに壁だった。

「ほら、すぐそこって言ったじゃん。ここだよ、秋也くん？」

姉が膨れっ面のまま、不服そうな上目遣いで秋也のことを眺めていた。

「……ここ？」

「そうだよっ、ここ！」

地団太を踏む姉のことは無視して、秋也の眼差しは待ち合わせ場所……らしき、行き止まりの方へと向かっていた。

そこは倉庫の間にある、細い通路だった。袋小路ということもあってか、何やら資材のようなものが置き去りにされていたり、落書きがされていたりする。付け加えて言うならば、日当たりが最悪らしく、薄暗く何とも不気味な場所であった。

秋也は信じられないような目で、自らの姉のことを見返した。

「秋也、な、何よ、そんなまじまじ見ちゃって……」

「姉ちゃんは、ここを怪しい場所だとは思わなかったのか？」

「……うん」

秋也は心の底から溜息を吐いた。すると、そんな動作が春菜の逆鱗に触れたらしく、顔を真っ赤にしながらヤカンのように怒りはじめる。

「な、な、何よもうっ！ いいじゃない、ほら秋也っ、今すぐここに入りなさいよ！ 姉ちゃんの命令だから！ ここに入らないとヨハンが出てこないの！！」

「……は、はあ」

来てしまったことには変わりはないので、秋也は何も言わずに入ることにした。もう細かいことは気にしていられなかった。ただ一つだけ再確認したのは、やはりこの姉は目を離すと、何をやらすか分からない——ということである。

不気味な通路に入っていくと、同じく春菜も入ってきた。

「あ、そのままね。壁の方を向いてて、ヨハンは姿を見られたくないらしいから」

「……う、うん」

壁の方を向いて立っていると、春菜も秋也の横に並んだ。何の儀式だよ、これは。秋也は思わず口にしたくなかったが、それを胸中に引き止めた。

殺人的なまでに強かった日差しも、この薄暗い通路に入るとまったく届いていなかった。おかげで気温が全く違う。炎天下の中で薄ら寒い気分で歩いてきた秋也だったが、この場所だと確実に寒いと言いつ切れた。ここは寒い、寒すぎた。

ぶるり、と秋也は身を震わせる。

その瞬間、秋也たちの背後に何かが降り立った。その気配がした。「今日はずいぶん賑やかだと思ったが……そういうことか、春菜」背後からかけられた声に、ぞわり、と秋也は背筋を何かが這っていくのを覚えた。これが姉の言っていたヨハンという人物か。これがアリスの言っていた例の幻想人か。それを考えると、秋也は今の自分がとてつもなく無防備なことに、恐怖を覚えずにはいられなか

った。

これでは、いざという時に反撃などできるはずもない――

「うん、今日はわたしの弟も連れてきてみたの！」

秋也の心配などお構いなしに、春菜は樂觀的な言葉を発していた。怖いもの知らずなだけだろうが、今の秋也は姉のお気楽さが少し羨ましくなった。

春菜がちらりと秋也のことを横目で見て、それから小さく呟く。

「秋也、挨拶ぐらいしなさいよっ」

この状況でのそれは、いくらなんでも理不尽すぎやしないか。そう秋也は思ったが、

「弟の秋也だ、よろしく……」

「……ああ、よろしく」

背後の人物からは、男性的なバリトンボイスが返ってくる。しかし、秋也が思うに、その声にはどこか初対面の者に対する警戒が入り混じっているようだった。まあ確かに、あっちとしても秋也が来るのは予想外だったのかもしれない。

「……なあ、アンタさ、自己紹介の時ぐらいは名乗るべきだと思うんだけど」

「秋也！」

隣にいる春菜からバシツと頭を叩かれた。あんまり痛くない。

「ヨハン、前にも言った通りだけど、わたしの弟は生意気なの。すぐ思ったこと口にしちゃうし。でもさ、寛容に接してくれないかな……？」

「はは……春菜は気にしすぎじゃないのか。己は別に気にしていないよ」

「オレとしちゃ、そんなこと気にされても困るけどな」

二人のやり取りに、秋也がそう付け足す。すると、こらっ、と言われてまた姉に頭を叩かれた。今日は連れて来られた立場、云わばゲストのはずなのに、どうしてこんな損な役回りをしなければならぬのか。そのところだけは不満だった。

「……秋也は、とても物をはつきりと口にする男なのだな」
背後の人物が、ふっと笑う気配がした。

「いや、オレは回りくどいやり取りが苦手なだけだ」

「はは……だが、春菜の言っていた通りだよ。まるで正反対の姉弟なのだな、お前たちは——」

「秋也つてば生意気だし、ケンカばかりしてるし。手が付けられないの」

姉が横槍を入れてきた。秋也としては一向に構わないのだが、しかし、この姉に自分のことを棚に上げられると、さすがに反論を引っ込めるわけにはいかなかった。

呆れるように肩をすくめて、秋也はこう口にする。

「姉ちゃんだって、のろまでミスばかりするじゃん。フォローしきれないぜ、オレは」

「ちよつとお、何言つてくれちゃってるのよ」

「だって、事実じゃん」

ちらりと秋也が隣にいる姉を見ると、春菜は睨むようにして見返していた。すると、背後からさも楽しそうな笑い声が聞こえてきた。「やっぱり、二人とも仲がいいのではないか……羨ましいことだ、それは」

ひとしきり笑ってから、背後の人物はふとこう言った。

「ああ、そうだ……自己紹介を忘れていたな。秋也、己の名はヨハシだ。春菜から聞いたよ、春菜だけでなく秋也も考えてくれた名だそうだな」

「まあな……」

実際のところ、秋也が適当に口にしただけの名前なのだが——それは言わなかった。

「これからもよろしく、秋也」

「……ああ、よろしく」

心中にふと違和感のようなものが生まれたが、秋也はそれを封じ込めた。今ここで行われている穏やかな会話は、いつか無になる。

それを考えると数々の雑念が生まれた。

「自己紹介も済んだことだし、ほら。わたし、今日も持ってきたんだよ。」

春菜が自らのカバンを漁り始める。しばしの間、それをぼんやりと見つめている秋也だったが、その拍子にふと中身が見えてしまい、思わず目が点になった。やけにずっしりしていると思っていたカバンの中に、たくさんのコーラが入っているのを見てしまったからだ。中に入っていたのが全てそれだったかと思うと、秋也は呆れるほどできなかった。

一本、二本、三本——春菜がカバンからコーラを取り出しては、それを順当にアスファルトの上へと置いて行く。秋也はそれをずっと眺めているしかなかった。

「いつも済まないな、春菜……」

背後にいたヨハンが、徐々に秋也たちの方へと近付いてくる。秋也は心臓が止まりそうになった。人間を凌駕する能力を持つ幻想人が、そのまま彼を殺すことのできる位置にいる。執行者としての本能が、それはとてつもない恐怖だった。

しかし、ヨハンは足元にあったコーラを手に取り、ただ離れていくだけである。

「いいんだよ。わたしね、ヨハンが喜んでくれるのが嬉しいんだよ。」

何も分かっている春菜は、秋也の隣で笑っていた。

「ほら、秋也の分もあるのよ?」

姉が微笑みながら、コーラを秋也の方へと差し出していた。秋也はそれを受け取るために手を差し出そうとしたが——引っ込める。よくよく考えてみると、とてもじゃないが何かを口にできそうな余裕はなかった。

「あ、ごめん、やっぱオレは……いいや」

「そう? ならいいけど。でも、後で言ってももうあげないよ?」

「なんでだよ。いいじゃん、後でくれよ。それに、それ自分だけで

全部飲んだら太るぜ？」

「うるさいなあ……もう」

春菜が不満そうに唇を尖らせつつ、コーラを自らのカバンに戻した。それに続いて、背後からプシュツというペットボトルが空けられる音が聞こえてくる。

炭酸飲料を一気に飲み下す、しばしの沈黙――

何も口にする余裕のない秋也は、その間隙を縫うように台詞を口にする。頃合だった。

「ヨハンも、姉ちゃんも、和んでるところ悪いんだけどさ。オレ、今日は別に雑談をしに来たわけじゃないんだ。姉ちゃんの誘いに乗ってここに来たのは、理由があったからだ」

「秋也……？」

ペットボトルを手にしたままの春菜が、不思議そうな顔で秋也のことを見返してきた。だが、止めるわけにはいかなかった。一呼吸だけして、秋也はさらに続けた。

「ヨハン。オレはアンタの正体を確かめるために、ここに来たんだ」その言葉を口にした途端、これまで辺りに満ちていた和やかな雰囲気 が薄れていった。それに変わって流れ始めたのは、何とも言えない気まずさだ。何言ってるのよ、とばかりに春菜が睨んでくる。が、それに怖気づく秋也でもない。

もっと上手い言い方があったのかもしれない――秋也はそう思った。しかし、これ以上の台詞が思いつかなかったのも、また事実だった。秋也は回りくどいことが苦手だ。そんなことをするくらいなら、真正面から攻めた方がいいとさえ思っている。あえて堂々と話題を振ったのも、それが理由だった。

優しい雰囲気 を乱したことを、秋也は後悔していない。

秋也はただ指摘しただけである――これまで相手が避けてきた、ある一点を。

「ヨハン、オレは姉ちゃんからアンタの話を聞いた時、正直言っ て信じられなかった。だって、アンタは名前もない、どこの誰かも分

からない、そんな冗談みたいな人物だぜ。信じられるかよ。オレは、
アンタが何者なのかを確かめに来た。そして、それが分からない限
り、オレはアンタを信用できそうにない」

「……なら、信用してくれなくてもいいさ」

「そんなに姿を見せたくないのか？　どうして、そんなことを言う
んだよ」

すると、長い沈黙の末に、ヨハンはこう小さく返してきた。

「己が醜いからだ……」

「そんなこと——」

「そんなことだと！　秋也、よくもそんなことなどと言ったな！
己は自らの容姿のせいで常に苦しめられてきたというのに——それ
を、よくもそんなことなどツ！」

秋也の喋ろうとしたことを、ヨハンは声を荒げて撥ね付けた。

「秋也ッ」

先ほどまでは睨んでいただけの姉も、さすがに怒って秋也の頭を
叩いてくる。先ほどまでに比べれば威力が強くなっていた。地味に
痛い。

「……ヨハン、どうか怒らないで。わたしが、弟の代わりに謝るか
ら……」

しかし、そんな春菜の謝罪にも、ヨハンは反応しなかった。しば
らくして、

「いいや、春菜……そんなものはいらないさ。だが、ようやく、よ
うやく分かったよ。人間というものは不透明なものを信用できない
のだな。いや、それも当然のことか。はは……本当にそこにいるの
かも証明できぬ者など、一体どこの誰が愛してくれるというのだ……
……」

背後から悲しげな、どこか乾いた嗤い声が響いてくる。

「……秋也、もう一度聞きたい。どうしても、どうしても——なの
か？」

そこで秋也は一瞬だけ答えるのを躊躇した。

「己は、己はな……ずっと、このままでいいと思っていた。こうやって春菜や秋也が、己の下へと訪れてくれて、先ほどのような他愛ない話をする。それだけで、いいと思っていた。だが、どうしても、己は姿を晒さなければ駄目か？　己が誰かを証明しなければ駄目か？」

静まり返った袋小路。秋也はこの返答が、運命の分岐点であることを分かつていた。

「……ああ、駄目だ。それじゃ駄目なんだ、ヨハン」

何かに焦り、上擦っているヨハンの声が今度は矛先を変えた。

「春菜は、春菜はどう思っているんだ？」

秋也は姉のを見た。春菜は自分が責められているわけではないのにも関わらず、泣き出しそんな表情をして、何を言おうか迷っていた。

「分からない、分からないよ……でも、できるなら、わたしもヨハンの姿が見たい、かな。だって、ヨハンの笑ってる顔、わたし見たことないから……」

「……そう、か」

背後から返ってきた声は、沈んだ暗いものだった。

「ならば、お前たちに望む通り、己の姿を見せてやろう。ゆっくりと振り向け、ゆっくりとな……だが、一つだけ約束をしてくれないだろうか。例え、己の姿を見ても、嫌ったりしないでくれないか。たった一つの、そう、己からのたった一つだけの約束だ……」

「約束するよ、ヨハン」

胸中のどこかで罪悪感のようなものを感じながらも、それを押し殺し、秋也は淡々と答えた。それに合わせるように、春菜も小さく「……うん」と返事をする。

そして――

秋也はゆっくりと振り返ろうとした。背後の幻想人の姿を確かめるために。しかし、突如、傍らで何かが崩れ落ちた気配がして、思わず視線がそちらへと飛んだ。

何が起こったのか、全く分からなかった。

「姉さん！」

傍らで今まさに崩れ落ちた何かは、姉の春菜だった。全く状況が把握できなかったが、秋也は慌てて姉の下へと駆け寄った。起こそうとするものの、起きない。何度も姉の名前を呼び、肩を揺すつてはみるものの……起きる気配がない。

春菜は、気絶していた。

地べたに崩れ落ちた姉を抱えながら——背後を振り返り、秋也は見た。

それは一言で形容するならば、おぞましい怪物であった。

二本の足で自立している姿は、一見すれば人のようではあった。しかし、秋也がそう思ったのも一瞬だけだった。というのも、ヨハンの姿は人間のようにでありながら、何かが決定的に間違っていたのだ。まるで人体でも改造された、化け物のように。

ヨハンの背丈は、秋也のそれと比べても圧倒的に高かった。それに、もともとがしりとした体格も手伝ってか、まるで巨人のような威圧感があった。

身に着けているのは着古したジャケットとズボンだ。髪の毛は黒く艶やかに頭部を覆っている。覗けている皮膚は血色が悪そうで、別々の皮膚を繋ぎ合わせたかのような縫合の痕があった。それは衣服から見える肌だけに飽き足らず、顔面にすら走っていた。

それに加え、暗褐色のどんよりとした瞳である。しなびた肌である。どす黒い唇である——

それは、人間と表現するにはあまりにもかけ離れていた。あえて彼のことを表現するならば、人間というよりは”怪物”の方がよほど近い。

それほどまでに、ヨハンの容貌はおぞましかった。

「ヨハン、アンタは——」

秋也は姉を抱えたまま、金縛りにでもなったかのようにヨハンのことを見つめていた。

目前にいる巨人は、今まさに気絶している春菜のことを眺めて、その血色の悪い唇をニヒルに歪める。それから、突いて出たように身を折り、腹を抱えて笑い始めた。

「や、やはり……やはりなッ！ やはり、こうなるかつ……いや、こうなるはずだ！ いつも期待しては、これだからなあ！ ああ、嗚呼ッ！ 分かっていたさ、こうなることなど！ 最初から分かっていたさッ！ 上手くいったこと一度もないんだからなッ！」

そして、ヨハンは気が狂ったかのように笑い転げた後、ふと我に返ったか、その爆笑を徐々に泣き笑いのようなものへと変えていった。

ぼつり、とヨハンの言葉が静寂の中に落ちて、消える。

「だが、それでも期待せずにはいられなかったのだよ、己は……」

秋也は言葉もなく、ただヨハンのことを見つめ続けることしかできなかった。やがて、自ら作った沈黙に耐え切れなくなったのか、ふいにヨハンがこう言葉を紡いだ。

「秋也、もうお前らに二度と会うこともないだろう。もう、来るな。春菜にも言っておけ。嫌というほど分かっただろう？ この己がとんでもない化け物だということが……」

それが偽善だと分かっている、秋也は優しい嘘を口にせずにはいられなかった。

「ヨハン。お前は化け物なんかじゃ——」

「もう己をその名で呼ぶな、人間ッ！」

ヨハンは声を荒げて、秋也の見え透いた同情を振り払った。

「その名は捨てることにしよう。やはり、己は名もなき怪物のままがいい……」

「待ってくれ！」

倉庫街から立ち去って行こうとする怪物のことを、秋也は声を大きくして呼び止めた。あのおぞましい顔が、もう一度、秋也のこと

を凍えるような目付きで睥睨する。

「……結局、アンタは何者なんだよ」

そんな秋也の台詞に、怪物は嗤った。

「そうだな、もう会うこともあるまいし……ついだ、教えてやるう。この己はな、我が”父”、フランケンシュタインによって造り出された怪物なのだ。名は与えられなかった。だから、あえて己に呼び名を付けるとしたら、こうなるか。——『フランケンシュタインの怪物』と」

さすがに予想していなかった名前を言われて、秋也は呆然とした。そんな秋也の反応を見て、フランケンシュタインの怪物はもう一度だけ嗤い、今度こそ背中を向ける。

幻想人は最後に一度だけ、こういい残した。

「春菜を家へと帰してやれ。……では、今度こそ、さよならだ」

そして、怪物はひと蹴りによって跳躍すると、そのまま秋也の目の前から、消え失せた。

怪物の姿が見えなくなっても、秋也はヨハンの飛び去っていった方向をずっと見つめるしかなかった。ふいに気を失った姉に視線を落として、秋也は一言呟く。

「……馬鹿野郎」

それは誰に向けた言葉なのか、秋也自身にも分からなかった。

+

「ひとまず、作戦は無事完了と……そういうわけですね？」

「まあ、そうなるかな。一時はどうなることかと思っただけだね」

集会所にある焚き火の前。そこで重ねて問い返してきたアリスに、先輩が朗らかな表情のまま答えた。その返答を聞いて安心したのか、アリスの陰のある顔がふっと楽になる。

「……そうですか。とりあえず、誰も負傷することがなくてよかったです」

結局、例の護衛任務は終わり、直己たちは”庭”へと戻ってきていた。

放課後になり、あれから先輩に言われるまま日向姉弟たちの護衛に借り出された直己だったが、結局、大した事件には発展しないまま護衛は終了した。まあ、何も起こらなかったのなら、それに越したことはない。そういうわけで、今、直己は他の執行者たちと同様に、集会所にある焚き火を囲んでいた。

「これで、ようやく予定通りに事態を進めることができそうですね。やれやれ、今回も大変でした。いえ、まだ終わったわけではありませんが……ただ、ここ最近は本当にトラブルに見舞われてばかりで、ワタシとしても心配していたのですよ。……ほら、一角獣の時も、モノケロス夕莉の負傷があったでしょう？」

「ああ、そういえば、あの時も大変だったね……夕莉ちゃん以外でも」

先輩の困ったような視線が、ふいに焚き火を囲んでいる夕莉や直己の方をなぞって、それから溜息となる。話題に出た夕莉はともかくとしても、どうして自分まで同じ目で見られなければならないの

か、直己は少し納得がいかなかった。

「橘先輩は、何か私に不満でも？」

ほとんど喋らずに場を静観していたはずの夕莉が、眉をひそめて問い返した。

「とんでもない！ 夕莉ちゃんはいつだって可愛いよ？」

先輩から向けられたネガティブな反応を、先輩がわざとらしい愛想笑いで受け流した。お得意の人を食った対応に、夕莉は一瞬だけ鬱陶しそうな視線を向けたものの……結局、何も言わずにそっぽを向く。たぶん、何を言っても誤魔化されるに違いないと思ったのだろう。そう直己は邪推した。

「また始まりましたね……」

アリスが呆れたような表情で、そんなことを呟いた。しかし、明らかに聞こえているはずなのだが、先輩はその呟きを完璧に無視した。

「ねえ、直己くん。夕莉ちゃんはいつだって可愛いよね？」

「えっ！？ あ、はい」

あまりに突然だったので、直己は反射的にそう答えてしまった。すると、先輩がワンテンポを置いてから、これまた同じ質問を投げってくる。

「夕莉ちゃんはいつだって可愛いよね、君もそう思うよね？」

「……なんで同じこと聞いてきたんですか？」

何となく重ねて質問してきた意図は分かっていたが、直己はあえて聞き返してみた。

「そんなの、言わなくても分かるでしょ。もうっ……」

先輩がつまらないとでも言いたげに、ぷくぷくと頬を膨らませる。そのやり取りを眺めていたアリスが、何とも言えない表情を作成していた。そして、そっぽを向いたままの夕莉はあからさまに鼻を鳴らしてみせるだけだ。

「……でもまあ、あたしも今回の夕莉ちゃんにはお世話になってるわけだし、例は言わないとね。あたしは命令したわけじゃないし、

連れ戻す気もなかったけれど……夕莉ちゃんが直己くんを復帰させてくれた。人手が足りないこちらからすれば、ありがたいことだね。まあ、あたしは夕莉ちゃんがどうしてそんな独断をしたのか分からないところだけど――」

先ほどまで浮かべていた先輩の表情が一変して、意地悪そうなものになる。

「何か、心境の変化でもあったのかな？」

「……別に、ありませんけど」

夕莉から返ってきたのは、素っ気ない返事だった。しかし、肝心の本人がそっぽを向いたままだったので、何とも質問そのものから逃げているような構図である。

「素直じゃないなあ、夕莉ちゃんも……」

しかし、先輩は苦笑を浮かべているだけで、それ以上は何も言わなかった。おかげで傍から見ている直己には、何がだかさっぱり分からず、ただ見守ることしかできない。

夕莉の方を見つめていた先輩が、ふと直己の方へと振り向いた。

「まあ、でも直己くんは、夕莉ちゃんにいっぱい頼ればいいんじゃないかな。たぶん、彼女は素直じゃないだけだよ。ねえ、アリス？」

アリスもそう思うよね？」

「……ナチュラルにワタシまで巻き込むのは止めてくれませんか、美鈴」

「あら、これは釣れない発言」

アリスに冷たい言葉を返されて、先輩が何とも残念そうな顔をする。

「そもそも美鈴、あなたはどうしてもそっちの話題に持って行きたいようですが……あえて断言しましょう。そういうの、アナタの悪い癖です。直す努力をしてください」

「おまけに手厳しい」

反論できない点を指摘されたからか、先輩はそう言った後、すぐに口を噤んでしまう。もしかすると、少々口が過ぎたのだと反省し

ているのかもしれない。

「まったく……」

アリスが困ったような表情をして、一回だけ溜息を吐いた。この状況からして、直己も溜息ぐらいしたい気分だったが……夕莉の方から徐々に増してくる負のオーラを感じ取って、それは我慢した。何とも生きた心地がしない。

「本題を、早く本題を進めましょう……」

「進めたいところなんですけどね、直己。肝心の秋也が帰って来ないのでは——」

そう漏らしたアリスだったが、その言葉がふと途切れた。

「……来たみたいですよ」

これまであまり喋らなかった夕莉が、むすつとした声で呟く。その言葉を合図にして、焚き火を囲んでいた者たちの視線が、一斉に”庭”の入り口の方へと向かった。

もちろん、今まきに入ってきた人物ともあれば、執行者の秋也以外にはありえない。

「……戻ってきたっす」

入り口の方に立っていた秋也は、どこか疲れたような表情をしていた。そのまま言葉少なに帰還報告だけすると、ふらふらと集会所の方へと歩いてきて、切り株に座り込む。その拍子に、前回同様、直己は気にいらなといった目で一瞥されたが、あえて知らんぷりを貫いた。

「おかえり。今、ちょうど君が帰ってくるのを待ってたところだ」

「そりやどうも……」

直己と秋也の仲を取り持つように、先輩は薄っぺらな笑みを貼り付けていた。

「気絶した人を家まで運ぶの、大変だったでしょ？ あたしたちも手伝えはよかったのかもしれないけど……ほら、途中でバレちゃってもアレだし。ごめんね？」

「いえ、それでいいです。大変だったのは認めますけど、オレの姉

ですから……」

秋也は一仕事終えたとばかりにタバコの箱を取り出して、その一本を啜える。何気なく火を付けようとして、思い出したように、

「あ、吸ってもいいですか？　なんかつい反射的に出しちゃって……」

「普段は認めてませんけど、まあいいでしょう……たまには」

アリスが苦々しい表情を浮かべていたが、喫煙を許可した。夕莉は一瞬だけ嫌そうな顔をしたが、何も言わなかった。そんな後輩の態度に呆れ返ったが、くだらないやり取りをするのも癪だったので、直己は無言を貫き通すことにした。

秋也がタバコに着火して、ふうつと紫煙を吐く。不快な香りが漂う。

「……とりあえず、改めてご苦労様です。それで秋也、手柄はありましたか？」

辺りに漂っている煙を手で払い除けながら、アリスが尋ねた。

「幻想人の正体を掴んだ」

秋也は煙を吐き出しながら、そう淡々と語った。幻想人の正体を突き止めたという割には、どこか高揚に欠けた態度。直己にとっては、それが少し引かかった。

焚き火を囲んでいる面子が、興味津々といった様子で秋也の方を注視する。

「では聞きますが。秋也、その正体は？」

「……あいつは『フランケンシュタインの怪物』だ。本人がそう言っていた」

「フランケンシュタインの怪物！」

傍で聞いていた先輩が、やけに大げさに驚いてみせた。

「確かに、あたしたちが事前に掴んでいた人型っていう情報とも合致するね。それに《具現する憎悪の刃》とか《不滅縫合体》の字面

ヘイトレッド・エッジ

ジャンク・ボデー

から見ても、あまり違和感はない。……まあ、最後のはあたしのイメージなんだけどさ」

「先輩。有力情報だとは思いますが、確定させるには少し早いかと」
「夕莉の言う通りです、美鈴」

楽しげに語った先輩の言葉の後に、すぐさま夕莉とアリスの横槍が入る。夕莉の発言が多少厳しかったので、もしやまだ先ほどの件を根に持っているのでは——と直己は一瞬だけ勘繰ってしまったものの、よくよく考えてみればいつもの夕莉だった。

先ほどの雑談とは打って変わって、先輩も一見すれば真剣そうだが……うん、まあ確かに二人の言う通りだね。じゃあ、秋也くん。とりあえず、例の幻想人がフランケンシュタインの怪物だと判明したところまでの流れ、教えてくれないかな？」

「流れっすか……」

話題を振られた秋也は煙を吐き出して、その時のことを思い起すかのように宙へと視線を飛ばす。それから何秒かして、秋也の口が静かに開かれた。

「……幻想人が現れたのは、オレが姉に連れられて倉庫街の路地裏に入った時っす。オレたちは背中を向けていたんで、最初はいいつの姿を見ることはできなかった。それから、しばらくは適当な会話をしていたんですけど……ここはあんまり重要じゃないで省きます」
うん、と先輩がゆっくりと頷きを返す。

「会話が一段落したあたりで、オレは幻想人に姿を見せてくれないかと提案したんです。向こうは全然乗り気じゃなかった。でも、うちの姉も幻想人の姿を見たことがなくて、興味はあったと言いついで。それで、結局、姿を見せるような流れになっ——」

「……ふむ、これまた不思議な話ですが」
アリスが何とも言えない複雑そうな表情をしていた。同じように共に焚き火を囲んでいる夕莉も怪訝そうだった。本人を知っている直己は、別に意味で複雑な心境だったが。

「で、まあ、晴れて幻想人の姿を見ることができたんですけど……その時、うちの姉が気絶してしまって。それでショックを受けた幻想人は、立ち去ろうとした。でも、そこをオレが辛うじて呼び止め

て、正体を教えると迫った」

「そこで、ようやくカミングアウトというわけか」

先輩の何気ない言葉に、秋也がゆっくりと頷いた。

「秋也。フランケンシュタインの怪物の容姿を覚えていますか？」

「……覚えてます。無駄に図体がでかくて、血色の悪い肌色をして、体中に縫合したような肌があった。とにかく異様でした。ぶっちゃけ、オレはあの幻想人がフランケンシュタインの怪物であることを露ほども疑ってないです」

「なるほど……」

アリスが首肯すると、秋也はもう短くなったタバコを踏ん付けて火を消した。直己はこれまでの話を無言のままに吟味していたが、聞いていた限りでは、やはり例の幻想人がフランケンシュタインの怪物である可能性は高そうだと思った。

秋也側からの情報が出切ったのを見計らって、先輩が付け足すように言った。

「ああ、そうだ。それとだけどさ。『フランケンシュタイン』の本を読んだことある人、いるかな？　こういう物語上の幻想人が出た場合、本を読んだ人がいると助かるんだよね」

その言葉の意味が一瞬分からず、直己は眉をひそめてしまった。だが、よくよく考えてみて、直己は「なるほど」と納得する。確かに幻想人が空想から生まれた産物だとすれば、その空想の原点である”原作”は、覆すことのできない事実の一部だ。

つまり、原作には幻想人の全てが記されていたとしても不思議ではない。

「……和訳版でしたら、少し前に」

でも、さすがに原作を読んだことはないな——などと直己が考えていると、意外なところから手が上がる。これまでほとんど喋ることのなかった夕莉だった。

「結構。じゃあ、夕莉ちゃんに聞こうか。秋也くんの話聞いて、どう思う？」

そういえば、夕莉は結構前にも図書室で何かを読んでいた気がする。確か『不思議の国のアリス』だっただろうか。先輩からもよく図書室に入り浸っていると聞かし、もしかすると、そういった空想物を読んでいたのかもしれない。直己はそんなことを思った。

先輩の問いに応じるため、夕莉は珍しく慚然とした態度を改めた。「そうですね。さっきの秋也の話を聞いている限りでは、フランケンシュタインの怪物だとしても不思議はないです。私の読んだ『フランケンシュタイン』でも、怪物を見て気分を悪くしたり、気絶する人がいるような描写はありましたし……」

もしかすると、夕莉は自分の得意分野を語る時に熱のこもるタイプなのかもしれない——これといった理由はなかったが、直己は何となくそう思った。

「ふむ。とすれば、やっぱりこの線は濃いんじゃないかな？」

「合致する部分は多いですね」

先輩の考察に合いの手を差し伸べるように、アリスがそう言った。「じゃあ、確認を取ってみようかな。フランケンシュタインの怪物で確定。……いいかな？」

「無論、ワタシは確定でいいかと」

アリスが致し方ないといった様子で頷く。

「オレは情報提供者みたいなもんですから」

秋也は特に面白くもなさそうだった。

「私も言うことはありません」

よく横槍を入れてくる夕莉も、さすがにこれ以上の文句は言わなかった。

「直己くんは？」

焚き火を囲んでいる者たちの意見を聞いた後、先輩が微笑しながら促してくる。

「俺も、同じ意見です」

執行者たちの中でも最も経験の浅い直己など、発言力も高が知れていたが——それでも、直己は今回自分なりに思考して、そう結論

付けた。

幻想人の正体については一段落して、先輩がそつと溜息を吐いた。「じゃあ、みんなの意見も揃ったし確定でいいね。さて、第二段階と行きますか。……では、引き続きみんなに意見を求めたい。フレンジンシユタインの怪物の幻想能力《不滅縫合体》ジャンク・ボディとは、果たしていかなる能力か？」

静まり返った集会所に、先輩の問いが余韻となって広がる。

「ワタシは幻想人の肉体そのものに宿った能力だと推測します」
それに真つ先に反応したのはアリスだった。

「そうだね。あたしもその線を推したいところだけど……他に意見はあるかな？ 一応、他にも何かありそうなら、そっちの方も聞いてみたい。ほら、秋也くんとかどう？」

「……難しいっすね。でも強いて言うなら、オレもアリスの意見に賛同します」

秋也は思いつかないといった様子だった。しかし、だからといって《不滅縫合体》ジャンク・ボディの能力について、他から有力な意見が出てくるわけでもない。そういう直己も、アリスの言ったアイディアは出たものの、能力の内容までは想像が及ばなかった。

「問題はここなんだよねえ。ただ身体能力が高いただけなら、固有の能力名にはならないはずだから、やっぱり何かがあるはずなんだけど……」

先輩が困ったような顔をして溜息を漏らした。傍にいたアリスがすかさず引き継ぐ。

「夕莉。読んだ立場からして何か分かりませんか？」

「……読んだ立場から、ですか。身体能力そのものについては強調されて描写されている気はしますが、幻想能力となるとちよつと特に明示されているわけでもないですし——」

どうも夕莉の反応も確証を得なかった。

「……治癒能力とか、どうですかね。いや、あの、作品を読んだわけじゃないんですけど」

明確な何かがあるわけではなかったが、直己はひとまずアイディアを口にしてみた。やはり《不滅縫合体》^{ジャンク・ボディ}が、幻想人の肉体そのものに宿った何かである可能性は高い。おそらく、この場にいる全員もそう判断していると踏んだのだ。

「確証がないからね。あたしには分からない。でも、ありえない話でもないね」

先輩はそれ以上でもそれ以下でもないというスタンスを崩さなかった。直己の話を聞いていたアリスが、さすがに潮時だと思ったのか、こう話題を切り出した。

「一旦、この部分は保留にしましょうか。結論を出すことはできそうにありませんが、とりあえず肉体に宿った何かというのは間違いないさそうですし」

「……そだね、一度まとめようか」

先輩が苦笑いを浮かべながらも、アリスの提案に乗った。

——と、その時だった。

直己はふいにポケットの中で震えている何かを感じ取って、携帯電話を取り出した。そのディスプレイに映っている着信相手の名前を見咎めて、直己は集会所にいる者たちのことを見返す。すでに焚き火を囲んでいた者たちの視線は、自然と直己の方へと向けられていた。

「先輩、すみません。俺、ちょっと席外します。すぐ戻ってきますから——」

「……誰からのの？」

先輩を差し置いて、夕莉が厳しい目付きのまま問い返してきた。

「有馬祐二。俺のクラスメイトで、今回、フランケンシュタインの怪物に殺された佐竹伸彦の友人だよ。……ちょっと、俺もあいつとは色々と話してて、さ」

「なるほどね。話してきていいよ。あたしたち、待つてるからさ」先輩が手をひらひらさせながら、友人との電話を了承した。その気遣いに感謝して「ありがとうございます」と頭を下げると、直己

は集会所の切り株から立ち上がって、辺りにある茂みの方へと向かっていく。

直己としては、このタイミングでの友人の電話に、何となく嫌な予感がしていた。

Chapter 2 - 03 : 終局への一手(1)(後書き)

分量が嵩んでいたので分けての投稿です。

集会所から離れた茂みの近くで、直己は先ほど切れたばかりの着信にかけ直していた。コールはたった一度ほどで、着信相手にはすぐに繋がった。

「もしもし？」

そう電話口が発すると、向こうからも「もしもし」と返ってきた。「悪いな、すぐに出られなくて。それより祐二、何か用事でもあったのか？」

「……まあな。というか、そうじゃなきゃ電話なんてかけないぜ？ まあ、用事って言っても大したことじゃないんだけど……」

祐二はそう言って、何となく言葉の終わりを濁す。

「それで、用事って何だ？」

「ああ、それなんだけどな。お前さ、二日前に佐竹が死んじまった場所……分かるか？ 大体の場所でもいいけど、できれば正確な場所を知っていてくれたなら助かる」

その質問があまりにも触れにくい話題だっただけに——直己はすぐさま返答することを躊躇った。それよりも、どうしてそんな質問をしてきたのかの方が気になった。

直己は出来るだけ自然を装って、問いかけてみることにした。

「祐二、どうしてそんなこと聞いてくるんだ？」

「いや、大したことじゃない……」

祐二の言葉はどこか不透明なままで、要領を得なかった。おそらく、直己にも隠しておきたい何かがあるのだろう。直己は内心で溜息を吐きながら、あえて糾すように言った。

「そんなことないだろ。だって、同級生が殺されちゃった場所だ。俺だって大体の場所しか分からないけどさ……その理由を曖昧にするのは間違ってるんじゃないか」

『……済まん』

「別に謝る必要はない。でも、教えてくれよ。俺は、お前の友達だろ」

すると、祐二の方から返ってきたのは、何とも言えないような震えた声だった。

『直己、俺はさ……あいつの死んだ事実から目を背けっぱなしなんだ。やっぱり、それじゃ駄目だ。俺はあいつの死んだ場所に行かないやならない。まだ信じられなくて、逃げたままみたいで……このままじゃいけないって、そう思うんだよ。それが辛いことでも、納得しきれないと俺は前に進めない。だから、どうしても知りたいんだ』

「……そうか」

友人の率直な言葉を聞いて、直己はそう答える他なかった。

「ちなみに……場所だけだな、夢見ヶ丘南区の二番地だったはずだ。それ以上の詳しい場所は、ちょっと分からない。そこはどうかしてくれ」

『……恩に切る』

「祐二、ちよつと待て。まだ言いたいことがある」

通話が切られる前に、直己には言わなければならないことがあった。

「祐二、今日は事件現場には絶対に行くな。ほら、犯人はまだ見つかってないだろ？ いや、犯人が同じ事件現場に来るなんて思っちゃいけないけどさ……でも、今日は止めとけ」

それに、もう夜だろ——直己は付け足すように電話口に呟いた。

どうしても、今日、祐二が外出する可能性はなくしておかなければならなかった。何故なら、佐竹伸彦の殺された現場は、夢見ヶ丘埠頭にはあまりにも近すぎた。今日、執行者たちの作戦が行われるのであれば、不確定なリスクは減らしておくに越したことはない。

「それにさ、ほとぼりが冷めたころには俺も一緒に行くよ。できるなら、春菜も呼ぼう。たぶん、いや、きっと。人数が多い方がいい

んじゃないか、一人で行くよりは」

『……そう、だな』

祐二が弱々しく笑ったような、そんな気配がした。

『分かったよ……後で一緒に行こう。もちろん、誘えるならあいつも誘ってな』

「ああ、そういうことだ」

電話口に向かって、直己も笑い返した。すると、祐二が他愛ない返事をして「じゃあ、切るぞ」と言った。電話が切られる際、その最後に、ありがとな、と一言を付け足して。

友人との電話が終わり、直己は携帯をポケットに戻しつつ集会所の方を向き直った。雑談をしているものとはばかり思っていたのだが、意外にも焚き火を囲んでいる者たちは会議の静けさを保っていた。彼らの視線が、一斉に直己の方へと向いた。

「どういふ話をしてたんだい？」

集会所の方へと近寄っていくと、先輩が何気なく尋ねてきた。

「今日、友人が事件現場の詳細を教えて欲しいと……そう、言っていました。でも、あえて正確な場所は教えませんでしたし、一応は止めてみましたけど……」

「あらら、それはいけないね。しかし、なんだか、ややこしいことになってきたなあ……これから決戦だつてのにさ」

先輩は困ったと言わんばかりに、眉間の辺りを指で揉んでいた。

おそらく、会議も長引いて疲れているのだろう。同じように、アリスも面白そうな顔はしていなかった。

「大事な場面で介入されるのは勘弁して欲しいところですね。まあ、滅多にないことだとは思いますが。ワタシたちも出来るだけリスクは減らすため、作戦の時間帯は深夜にしていますし。……でも、まあ対策くらいはする必要がありますか」

「まあ、そうだろうね。直己くんの友人ともなれば、尚更か」

未だに目のあたりを揉んでいる先輩が、そんな無難なコメントを返す。一応、祐二が巻き込まれないようには配慮する気にいるらし

い。直己としてはひとまず安心である。

「……橘先輩」

焚き火を囲んでいる者たちの様子を眺めながら、ふと夕莉が一言を發した。

「みんな疲れているようですし、そろそろまとめませんか。お願いします」

「……そうだね、いい加減、そろそろまとめようか」

先輩が疲れたような声をしながらも、姿勢を正した。まとめというのは、おそらく、これから行われる作戦の役割分担についてだろう。

茂みの方から戻ってきた直己も、集会所の切り株にしっかりと座り込んだ。

「じゃあ、作戦について解説しよう。あたしの考えたプランでは、日付が変わった午前零時に例の幻想人『フランケンシュタインの怪物』を襲撃することになってる。作戦中のおおまかな役割分担については、これから説明するからちゃんと聞いてね？」

ちゃんと聞いてね。そこで先輩の視線が、直己と秋也の方へと一瞬向いた。なんだか一緒にされたような気がして、直己は内心でムツとした。

「幻想人を襲撃するのは、直己ちゃんと夕莉ちゃんの二人だ。プランとしては奇襲が理想系だね。おそらく、向こうはこちらの存在を知らないだろうし——この場で勝負を決めた欲しいところだけど、でも未確定の部分もあるし、無理はしないこと。ちなみに、あたしは作戦指揮として第二線で待機している。そして、秋也くんだけど――」

どうやら、直己は夕莉と共に前衛として借り出されるらしい。予想はしていたが、直己としては特に異論もなかった。もともと覚悟していたことだ。

「秋也くんは、後方から戦闘地域の一帯を監視していること。もし、辺りに何か近付いてくる人影を発見したら、すぐにあたしに連絡し

て」

「いいんすか？ オレだけそんな役で」

秋也が驚いたような顔をして、先輩のことを見つめていた。

「問題ないよ。どちらにせよ、そういう役割の人は欲しかったところだし。……それにこう言っちゃ難だけど、君は怪物と面識があるだろう？ だから、今回は数に入れないことにした」

「……というと、先輩はオレを信用してない？」

秋也の表情がどことなく疑わしげなものに変わり、先輩のことをじつくりと睨み付ける。しかし、それに対して先輩は全く動じなかった。

「違う違う。ただ、そうだね……君はあまりにも一直線すぎるからさ。酷い言い方かもしれないけど、あたしは秋也くんがこのまま怪物と戦えるのか、少し不安なんだよ」

「……情には流されませんよ、オレは。それでも執行者つすから」

自分は足手まといではないと言い切った秋也であったが、

「それでもだよ。それに、どちらにせよ戦うための環境を作り上げるためには、君の幻想武器の力は必要なんだ。適任なことには変わりはないよ」

「……それなら、まあ。仕方ないつすね」

采配を覆す気はないという先輩の判断に、秋也は苦い顔をしつつも言葉を引つ込めた。

「ともかく、そういうわけだ。作戦開始まで、あと三時間弱。それまでは君らの自由行動を許す。開始時間の十五分前までには、またここまで戻ってくること。あたしから伝えるべきことは以上。何か意見などがあつたら今ここで言つてね」

先輩の視線が、焚き火を囲んでいる面子をゆつくりと一巡する。しかし、その間にも、これまでの話に関する意見や不満は出ることはなかった。

その場にいる者たちの沈黙を無言の了承と受け取ったらしく、先輩はほっと一息。

「……異論はないね。それじゃ、後はみんなの健闘を祈る」
そして、その締め言葉を持って、決戦前の作戦会議は終わりを告げた。

生まれたのは、十一月のあるわびしい夜だった。

雨が陰気にも窓ガラスを叩き、蠟燭の火もほとんど消えかけた部屋の中。そこで造物主であるフランケンシュタイン青年の手によって、“彼”は生み出された。死体の部位を繋ぎ合わせた、醜悪しか言いようのない怪物として、である。

しかし、“彼”はその時のことをよく覚えてはいなかった。というのも、生まれたばかりの“彼”は、言ってみれば赤子も同然だったのだ。それが狂気の末に生み出された化け物だったとしても、赤子がすぐに何かをすることなど不可能だろう。だから、“彼”が当時のことをよく覚えていないのも無理はない。

一人では何もすることできない赤子――

普通に考えれば、それを世話するのは両親の役目だ。付け加えるならば、赤子は世話をしてもらわねば死に絶えてしまうはずだ。この世に生を受けたばかりの赤子は、まだあまりにもか弱い存在である。それを庇護するのは、普通のことだ。

だが、あの男は、そんな普通のことさえしなかった。全てを放棄した。

造物主であるフランケンシュタイン青年は、“彼”のことを部屋の中に放置したまま、あるうことか姿を消してしまったのだ。放置された赤子は死んでしまうはずだ。そう、本来であれば、“彼”もそうなるはずだった。しかし、そうはならなかった。

むべなるかな、“彼”は人間ではなく怪物だったのだ。だから、その生命力も人間以上のものを持っていた。これは、今の“彼”にとっては最大の悲劇でもあるう。

あの時に死んでしまえたならば、生きる苦しみを味わうこともなかっただろうから――

夢見ヶ丘南区にある埠頭、その近くにある倉庫街。そのとある倉庫の中に『フランケンシュタインの怪物』こと、ヨハンは潜んでいた。

四方を壁に囲まれた倉庫内には、昼も夜も存在しない。常に暗闇の蔓延っている倉庫の中では、常人は数日で精神が参ってしまうことだろう。しかし、人々に忌み嫌われた化け物――フランケンシュタインの怪物にとっては、この暗闇は誰にも侵されることのない聖地だった。もともと夜目が利く彼だからということもあるだろうが、誰も踏み入らない倉庫の中は、今の彼にとっては天国に近い。

今、ヨハンは身を潜めている倉庫は、人間たちの食料を保管している倉庫だった。なので、これまでの彼が食料で困ったことはない。セメントで固められた地面は硬かったが、工夫すれば寝れないこともなかった。あえて不満を口にするならば、用を足す場所が確保されてことだろうか。だが、それ以外には文句の付けようもなかった。そんな巨大な倉庫の片隅で、ヨハンは壁にもたれながらずっと思案を繰り返していた。

――どうして、こんなことになってしまったのか。

無音の静けさに満ち溢れた空間で、ヨハンは無意識的にそんなことを考えていた。しかし、その次の瞬間には、ぽっかりと生まれた問いに自分自身が答えていた。声を上げて。

「……何を考えているんだ、己は」

静寂に包まれた倉庫内に一度だけ彼の声が響き渡って、消えた。まったく、何を考えていたのだろう。そんなもの考えるだけだろうに――ヨハンは自らの思考を嘲笑う。そんな問いは馬鹿げている。何故ならば、その問いの行き着く先は、彼が“怪物”として誕生した時まで遡ってしまうからだ。それは愚問という他ない。

――どうして、こんなことになってしまったのか？

とても簡単なことだ。これまでのことが全て間違いだったただけなのだから。

「……ああ、そうさ、全てが間違いだったに違いないのだ」

春菜たちに本性を知られてしまったことも、言ってしまうえばその一つでしかない。そこに至るまで、彼は数え切れないほどの間違いを犯してきたのだから。野垂れ死ぬことなく生き延びてしまったことも、そもそも誕生してしまったことすらもが間違いだ。

フランケンシュタインの怪物。”父”にすら存在を受け入れてもらえなかった化け物。

「何故、己のことを造ろうとした……無責任な造物主よ」

否、無責任という言葉すら生温いだろう。造物主フランケンシュタイン——奴はあまりにも傲慢で身勝手な野心家であつたのだから生命の謎などというくだらない野望に取り付かれ、『理想の人間』を作り出そうと躍起になった。それがどれほど神を冒瀆した行為なのか、あの者には分からなかったのだろう。

だから、彼は人々が忌み嫌うような怪物として造られた。造られてしまった。その呪われた体躯に、決して他人とは理解し合うことのできない呪いを宿して。

——そんなことがあるだろうか、あつていいだろうか？

それに関しては、ヨハンも自信を持って否だと断言できる。決して許されることではない。百歩譲って是だとしても、それはあまりにも自分勝手な考えではないか。ならば、どうして己は造られねばならなかったのだ。こんな誰にも望まれぬ怪物を、呪われた存在をどうして造り出さねばならなかったのだ、造物主よ！

この己を造り出した貴様のことを——己は恨む。

これは、復讐だ。

フランケンシュタイン青年の幸福は全て奪い取ることに決めた。奴の弟を絞殺した。その罪を擦り付けて女中を死刑にした。奴の親友を殺した。奴と結ばれるはずだった婚約者すらも殺した。奴の持っている幸福を全て剥ぎ取って、不幸の只中へと陥れてやった。

あの時の精神の高揚ぶりは、今でも忘れ難い。

全てを喪ったフランケンシュタインは、彼のことを必死で追跡してきた。怪物はこの世に残してはいけない生命だと、人間もろくに住み着けない北極まで追って来た。それは初めから何も手にすることのできなかった彼にしてみれば、笑い事にも等しい理由だった。しかし、この結末は、怪物である彼自身もまた望んでいたものではあったのだ。

最後に造物主である”父”を殺せば、復讐は完遂する。

そして、初めから絶望しかない怪物もまた、そこで生きる意味を失うのだから。

「……そして、己は奴の死を見届けた」

フランケンシュタインも体力の限界を迎えたのか、奴は北極に向かう船上で病に臥して、息を引き取った。本来ならば、もっと苦しめてから殺すはずだったのだが、その死は彼の予想していたものよりも呆気なかった。それだけが心残りだった。

そして、復讐の終わりに——彼も死ぬことになった。そうなるはずだった。

「だが、己はまた、生き延びてしまったわけだ……」

倉庫内に蔓延っている暗闇の中で、ヨハンは自嘲するように嗤い、頭を抱える。

あれから船を後にした彼は、死ぬために北極の海に飛び込んだ。そこまではよかった。だが、その次の瞬間、彼は極寒の海の中に生まれた、不可思議な”穴”を目にしていたのだ。

あれは一体——何だ？

それが何であるかを理解するより早く、彼はその穴に吸い込まれていた。その穴はまるで異次元でも繋がっているか如く、彼のことを縦横無尽に蹂躪し尽くした。これまで生きてきて体験することのなかった感覚に、三半規管が狂っていくのが分かった。

そして、訳の分からぬ耳鳴りが止んだ時——彼は異世界にいた。飛び込んだはずの極寒の海はもはやどこにもなく、辺りは穏やか

な気配に満ちていた。背後で消え行く”穴”を見届けて、彼は何も分からぬままに新世界を目にした。ふいに、もしかすると、という淡い期待が湧いた。もしかすると、この世界には自分の居場所があるのではないかと、あるはずのない”幻想”を見た気がした。

だが、それも所詮は、ただの幻想でしかなかった。

手にすることができないから”幻想”なのだと――改めて思い知らされてしまった。

「だが、それでも。己は自分の居場所を探さずにはいらなかったのだ……」

ヨハンは頭を抱えながら、自らの黒髪を掻き毟る。

そうだ、それでも心のどこかでは、いつも信じ続けてきたのだ。この自分を受け入れてくれる者がいることを。だから、いつもそれを信じようとしてきた。いつかは叶うと、きつと理解者が現れるものと――

なのに、運命はいつも裏切るのだ。それはもう無情なほどに。

「……やはり、己は死ぬべきだったのかもしれない」

否、今からでも遅くはないか――ヨハンは口元に皮肉を作り、ふと暗闇の倉庫内で立ち上がった。そうだ死のう。死ぬことにしよう。死こそが全てを癒してくれるはずだ。

一人で苦悩することは耐え難い苦痛だ。それをしていくくらいなら死んだ方が有意義というものだ。幸いにも近くには海がある。そこで海水をがぶ飲みでもすれば、いくら死ににくい体をしている自分でも溺死ぐらいはできるだろう。そうヨハンは考えた。

早速、ヨハンは自殺を実行に移すため、倉庫内を歩いて出口の方へと向かう。

シャッターを持ち上げて、その隙間に体を潜らせた。その途端、むわりと夏の熱気がヨハンの肌に触れる。しかし、それも夜間の今とあつては昼間ほど厳しいものでもなかった。

「さて……」

ヨハンが空虚が面持ちのまま、そう小さく呟いた時だった。

それが起こったのは突然だった。何故なら、それは彼の意表を突いたタイミングで行われたものだったからだ。倉庫から出たヨハンの背後で、何か落下した気配がした。軽やかな着地音。振り向く余裕すらもなく、彼の右腕を通り抜けていった殺意の感触。

その始まりは、あまりにも唐突だった。

ワンテンポ遅れて彼の右腕に線が走り——その腕が落ちた。嘔き上がる血潮と共に。

「が、あアッ……！」

完全に予想外だったこともあり、腕の斬り落とされた痛みは想像を絶するものだった。血塗れになるのも厭わず、ヨハンは自らの切断された腕を押さえて、振り向いた。

背後には目をギラつかせた、一人の少年が立っていた。

「多くは語らない。俺はお前を、殺しに来た」

「……ハッ。舐めた事情だな、人間！」

なるほどな——先ほどまでの空虚な感情は去り、ヨハンは高ぶる殺意と共に納得した。理由は良く分からないが、どうやらこの少年は本当に自分のことを殺しに来たらしい。少年の瞳に映る狂わしいまでの熱情が、そう告げていた。

つまりは、そういうことらしい。

いいだろう、そういう理由ならば応戦するだけの話だ。確かに自分は死にたがりかもしれないが、だからといって殺されてやるほどお人好しでもない。それに彼としては、人間に殺されるのは癪だった。殺されるくらいならば、むしろ殺してやるというものだ。

人間への嫌悪と怒りが相まって、ヨハンはどす黒い感情が湧いてくるのを感じた。

「そうか、ならばこちらも戦ってやろう……自衛は何も人間だけの特権ではないからな……」

失った右腕の切断面を押さえるのを止め、ヨハンは左腕を一度だけ、振るった。その手に付着していた血液が、飛沫となって辺りのコンクリを汚した。

目前の少年が、その手に握っていた武器を握り直して、構える。

——執行者と幻想人の、狂おしいまでの宿命が始まった。

Chapter 2 - 04 : Man-like creatures

ここにちょっと書き溜めようかとも思います。

第21部のサブタイ変更しました。一応補足。

十

日付が変わった深夜、午前零時ぴったり。

夢見ヶ丘南にある埠頭。その倉庫街にて、直己は自らの幻想武器《S09 Image^{イマジン}》を握り締めながら、目前にいる怪物と無言のまま睨み合っていた。

雲もなく晴れ渡った、星空の綺麗な夜だった。しかし、そんな美しい夜だからだろうか。直己は目前にいる幻想人のことを、心底おぞましいものだと感じてならなかった。月明かりに照らされたそれは、確かに怪物と形容されるに値する容姿をしている。できれば、こんな夜には出会いたくない代物だった。

事前の打ち合わせによれば、この幻想人は『フランケンシュタインの怪物』らしい。なるほど、確かに今となつては疑うべくもないだろう。こうして合間見えている限りでは、この幻想人に対しての『怪物』という評価は、あまりにも適切すぎるものだ。

そして、幻想人から放たれる気配もまた、文字通り人外のものだった。

「どうした。かかってくるんじゃないのか、人間よ」

怪物が挑発するように言ってくる。しかし、それに対して直己は微動だにしなかった。別に恐怖で身が竦んでいたわけではない、ただ彼は待っていたのだ——その時が来るのを。

それが訪れるまでは、そう長くはからなかった。

「……何だっ？」

怪物が驚いたような声を上げ、その視線を路上へと向ける。今、直己たちが睨み合っている場所から一ブロックほど離れた路上、そこから強烈な光が発生したのだ。それは幻想武器《S27 Ride^{リデ}》

『Y』が能力を解放した証だった。そして、それは直己にとっても待ち望んでいた合図だ。

隣のブロックの方から、夕莉が太々しい笑みを浮かべていた。

夕莉の背後から、彼女の幻想武器に秘められた能力——”茨”がコンクリを突き破って発現する。出現した茨は次第に絡み合いながら、電柱ほどの太さまで一気に成長した。

「……なるほど、二人相手というわけか」

倉庫街に現れた闖入者のことを一瞥して、怪物は暗く嗤った。

「上等だ。いいだろう、まとめて相手をしてやる。だが二人相手だからといって、己のことを楽に斃せるなどとは思わないことだなッ

！」

「……もとより、俺たちはそのつもりだ」

直己は静かにそう宣言して、遠くにいる夕莉のことを流し見る。

それはしっかりと聞こえていたらしく、夕莉もこくりと頷いて反応を返してきた。

すると、怪物はその顔を憎悪で歪ませ、それから自由な左手で何かを生み出す。薄っすらと何かが現れて、それが凝固して形を成していく。その一連の流れは、直己たちが幻想武器を出現させる時のそれに似ていた。

そして、怪物の手中に生み出されたのは——手斧だった。

それは刃物らしい光沢とは無縁の代物だった。普通ならば磨き上げられるはずの刃先は、赤錆に塗れたままで手入れもされていない。まるで血塗れの斧を手になっているかのようだった。否、実際にあの手斧は人間の血を吸っているのだから、事実そうなのかもしれないが。

「それがあんたの武器……『具現する憎悪の刃』ってわけか」

背筋にぞつとするものを感じながら、直己はそう口にする。どう

＜イトレッツ・ド・エッジ＞

やら『具現する憎悪の刃』は、幻想人にとっての武器を生み出す能力らしい。事前の情報でも聞き及んではいたが、こうして改めて目にする感慨も一入^{ひとしほ}だった。

それに幻想人の生み出した武器ともなれば、ただの武器ではあるまい――

直己は手中にある幻想武器《S09 Imagine^{イマジン}》を、先ほどより強く握り締めていた。そうしなければ、突き上がってきた恐怖に体が震えてしまいそうだったからだ。

「……ははっ」

微かに自嘲した。こんな状況にもなつて、まだ幻想人と戦うことに恐怖を感じている。そんな自分が情けなくて、直己は自嘲せずにはいられなかった。

でも、逃げるわけにはいかないのだ。

元から選ばれた立場にしながら、それを放棄して逃げた。逃げたことにより、助けられるかもしれない人を救えなかった。それによって悲しむ人を見た。あんなことはもう御免だった。救えるはずの力を持ちながら、それを行使せずに誰かを死なせてしまうなど。

だから――戦うのだ。

「……いや」

だが、直己は恐怖に疎んでいるはずなのに、どこか高揚も感じていた。だから、これまで考えていたことを、ふと否定してみたくなった。

ただ単に戦いを求めていただけではないのかと。

結局のところ、ほとんど話したこともない同級生の死など関係なくて。友人たちの悲しみにも何も感じてなくて。あの時に感じた無力感は全て気まぐれで。ここに戻ってきたのは、単に幻想人との戦いが忘れられなくて仕方なかったからではないか――直己は一瞬そう思った。

所詮、力を振るうための口実が欲しかっただけではないのか、と――でもそう考えた方が、気持ちとしては楽だった。

だとしたら、この体が震えているのは恐怖ではなく武者震いで、強敵を目にした興奮が抑えきれないだけなのだ。きっとそうだ。そう考えている方が楽なのだから。

「どうした？ さつきからぶつぶつと。かかって来ないのなら、こちらから行くぞ」

先ほどまで乗り気だった怪物も、さすがに呆れたような表情をしていた。

どちらが本当の自分なのか、正直なところ直己にも良く分からな
い。だが、そのどちらも本当の自分のようには感じていた。幻想人
に誅伐を加える自分。ただ戦いを望んでいるだけの自分。どちらに
せよ、同じなのは——この幻想人を殺すという目的だけだ。

「……直己」

一ブロックほど離れた位置から、夕莉が促すように言ってくる。
それに、直己は頷いた。

次の瞬間、直己は地面を蹴って飛び出していた。もう覚悟は決
まっていた。自らの幻想武器であるイマジンを握り締め、真正面から策
もなしに斬りかかる。それが予期せぬタイミングだったからか、怪
物は緩み始めていた表情を正すのが遅れた。イマジンの一撃が体を
決る寸前のところで、惜しくも受け止められる。

剣と手斧が軋りを上げながら拮抗、怪物がようやく憤怒の表情を
作成する。

「貴様……！」

怪物の防御したタイミングは、言ってしまうえば完全に遅かった。
にも関わらず、そのまま押し込められるはずの一撃が、わずかに押
し戻される。相手が片腕だからと高をくくっていたのだが、膂力に
関しては隻腕の怪物は何一つ劣っていなかった。

……こいつ、半端じゃない膂力だっ。

内心で歯噛みしつつ、罅迫り合いを避けるため、直己は一旦イマ
ジンを引いて後退した。この怪物との力比べには分がないと判断し
たのだ。だとすれば、手数が多さで攻めるのが常道だろう。次の一
撃を放つため、すぐさま直己は半歩踏み込む。

次の一手として選択したのは、下段からの逆袈裟斬り——
「甘いな、その程度で己を倒そうなどッ！」

しかし、直己の放った一撃は、怪物の胴体を切り捨てるまでもなく往なされる。片腕を失くすという負傷をしながらも、怪物の動きが曇る気配は全くなかった。

次手すら防がれてしまった以上、ともかく直己は防御に回らざるを得ない。

「……今度は、こちらから行くぞ」

これまでの激情からは考えられないほど、怪物が冷淡な一言を発した——と思った瞬間、直己の目前にはすでに手斧が迫っていた。辛うじて振るわれた手斧を受け止めた直己であったが、その一撃の重さに意識が飛びかけた。火花が散り、手が痺れる。

……畜生、片腕でこれかつ。

その威力を身を持って体感していると、すぐさま次の一撃が来た。反撃する暇などなく、さらに一撃。怪物の振るっている手斧の威力に圧倒され、直己は攻めに転じることもできず、ただ防戦一方の展開を強いられつつあった。

思わず、直己の背中を冷たいものが通り過ぎていく。

しばし遠方で静観していた夕莉も、さすがに見ていられないといった様子だった。

「あなたが戦いたいというから、任せたつもりだったけど……」

夕莉が静かに嘆息しながら、幻想武器《S27 リテイ R i d y》を軽く振るってみせる。

「さすがに、これ以上は見られないわね」

その言葉に呼応するように、夕莉の背後で待機していた茨が鳴動した。それから茨は鞭のように撓って、怪物の体を締め上げんと戦場に向かって猛進し出す。

今まさに熾烈な攻撃の真っ只中にいる直己には、これほどない救いの手だった。

「……ふん、やはりそう来るか。ならば」

半ば戦闘にすらなっていない直己のことは捨て置いて、怪物は酷薄に嗤う。

今まさに向かってきた茨を躲すため、怪物が瞬時に飛び退いた。先ほどいた位置を、夕莉の茨が掠めていく。ものの、その時すでに怪物は倉庫の壁を蹴って、さらに対角の壁へと飛び移ろうとしている最中だった。

どう考えても、常人離れした動きである。

夕莉の茨が目標を見失いながら、それでもしつこく怪物の方へと追い続ける。その蛇にも似た動きには卓越した技量が伴っていたが――如何せん、それが怪物に対しての決定打になることはなかった。茨の追いかける速度が、怪物のそれを上回らなかったからだ。それほどまでに、怪物の反応速度は常識を逸脱していた。

「こいつ……！」

ありえない、と直己は呻くように漏らしていた。

倉庫街の壁を蹴りながら、怪物は信じられない速度で移動を繰り返している。が、とある拍子に、怪物はその方向を一転させ、まるで砲弾のように夕莉の方へと跳躍――

「夕莉！」

直己の声をハツとしたのか、夕莉は瞬時に横っ飛びしていた。

間一髪のところ回避したこともあり、夕莉が両断されることは免れた。刃は煌きを残して、先ほど夕莉がいた位置を通過していくだけに留まる。夕莉が顔を強張らせつつも、すぐさま追撃してくるだろう怪物に備え、距離を取るために後退する。

案の定、怪物は折り返して突撃してきた。

怪物の握っている手斧が、唸りを上げて振るわれる。夕莉はそれをリデイによって防ぐ。幻想武器が軋んだ。反撃する暇などなしに次々と怪物の手斧が浴びせかけられる。決して壊れることはないものの、伝わる衝撃は、確実に彼女を磨耗させていた。夕莉が後退しながらも防衛するが――それは先ほどの再演である。

しかし、そんな攻防戦の折に、夕莉の狙いは潜んでいた。

「……そう来たか」

いつの間にか、怪物は動きを止めていた。

よくよく見てみると、夕莉たちが戦っていた周囲のコンクリから、新たに数本の茨が発生していた。それが怪物の四肢を絡め取っていたのである。この熾烈な攻防戦の間にも、密やかに夕莉の茨は操作されていたのだ。

兎にも角にも、怪物の動きは止まった。夕莉が一瞬の隙を突いて戦場から離脱、すぐさま直己の方へと駆け寄ると、耳元へと囁いてくる。

「直己。長くは持たない、トドメを」

夕莉の囁きを聞いて、すぐさま怪物の方へと視線を戻す。見れば、夕莉の茨は確かに怪物の動きを止めてはいるものの、今にも食い破りそうな気配も醸し出していた。要するに、一時的に封じてはいるが――長くは持ちそうになかった。

言葉少なではあったが、直己は夕莉の意図を汲み取り、頷いた。

「任せてくれ」

直己は自らの幻想武器《S09 Imagine》イマジンに心を通わせた。想像力。そう、想像力なのだと――直己は頭のどこかでひっそりと繰り返した。結局のところ、まだ自分の幻想武器の本来の力さえ分かっていない彼には、想像力こそが全てだった。

幻想は明確な形を持たない。それを前提だとすれば、この”想像”を関する幻想武器に明確な何かなど、実はありはしないのではないか？ 直己は常日頃からそう思っていた。

だとすれば、この幻想武器には剣以外の何かにもなり得るのではないかと。

そう考える直己が想像したのは――長弓だった。

モノケロス一角獣の時に発現した、あの骨組みだけの弓である。緩やかに弦を引き絞ることを想像した。矢を射った瞬間のことを想像した。矢が怪物をどう射抜くかまで想像した。幻想武器の全てを支配下に置くかの如く、想像を広げてみせた。

――直己の手にしていたイマジンが変質する。

剣の形をしていたそれが、ぐにやりと歪んで別のものへと作り変

わつていった。それは彼の想像した通りの姿、幻想武器《S09
イマジン
Imagine》の長弓形態である。

イマジンを手にしながら、直己の肩の力は抜けていた。目標である『フランケンシュタインの怪物』へと向けて、生み出された骨組みの矢を引き絞る。感情をフラットに。自身を矢を射るためのだけの機械と認識する。呼吸を整える。無心のままに。指を離す。

そして、一射絶命の矢が放たれた。

直己の解き放った矢は、これまでの攻撃とは段違いの破壊力を有していた。大気すら焦がさんばかりの一射は、通り過ぎていった後に強烈な風圧を残し、その威力を十二分に証明している。例え『怪物』と言えど、直撃すれば致命傷は免れまい――

目も開けていられないほど風が荒れ狂う中、直己は確かな手ごたえを感じていた。

「……直己、手ごたえは？」

風圧の中で目を逸らしながら、夕莉が問いかけてきた。

「手ごたえは、十分だった」

無言のままに、夕莉の視線が怪物の方へと戻る。

先ほどの一射によって、怪物に絡み付いていたはずの茨はなくなっていた。余波によって微塵に帰ったのだ。さらに付近のコンクリが粉碎され、それが一種の煙幕のように辺りに漂っていた。よって、すぐさま現状を把握することは困難だった。

傍で眺めていた夕莉が、ごくり、と唾を飲んだ気配がした。

「……フ、ハハッ、面白じゃあないか」

地を這うように低い嗤い声が、倉庫街にこだまする。それがあまりにも背筋を凍らせる声色だったこともあって、直己たちは一瞬身を竦ませた。

辺りに浮遊していた粉塵が晴れて、徐々に見渡せるようになった。依然として、そこに怪物は立っていた。

「やれやれ、少々血を流しすぎたか。足元が軽くふらつくな。それにさっきの矢もまともに受けていればマズかった……斧で軌道を逸

らさなければ、やられていたぞ」

怪物は自らの衣服に付いた埃を、ばんばんと叩いて落としていた。それから軽く溜息。その視線を、足元に転がっている切り落とされた右腕へと向ける。どうやら、先ほど直己の放った矢の余波によって、吹き飛ばされてきたものらしい。

「それに、先ほどの茨の圧力にも参った……」

だがな。怪物はそう言つて、その口元に獰猛な笑みを浮かべてみせた。

怪物は姿勢を屈めて、足元に落ちている右腕を拾い上げる。そして、どうするのかと見守る直己たちの前で、怪物はあるうことが――それを自らの右腕の切断面にくっつけた。

次の瞬間、怪物の体から何か糸のようなものが数本飛び出していた。その糸のようなものが、くっつけた右腕と本体の切断面を、何度も何度も、まるで縫合するかのように往復していく。さすがの直己たちも、呆氣に取られた。

「……ふん、こんなものか」

怪物は忌々しげに呟いた後、何事もなかったかのように、断ち切られ、動かなくなったはずの右拳を開いたり握ったりしている。まるで悪夢のような光景だった。

だが、それとは別に直己は確信していた。

先ほどのアレは、おそらく怪物の幻想能力に違いないだろうと――

「《不滅縫合体》……！」
ジャンク・ボディ

直己にだけ聞こえる声で、夕莉はそう呻いていた。やはり、夕莉も同じ結論に達していたらしい。自分の判断が間違っていなかったことに安堵を覚えた。

「……ああ、どうやらそうらしいな」

直己が静かに首肯すると、夕莉はさらに囁いてきた。

「今見た限りでは、私は再生能力だと思っただけ……直己、あなたの意見は？ 原作にはそれらしい描写はなかったから――おそらく独自の何かでしょうけど。とにかく、今はあなたの意見を聞いて

みたい」

「俺も夕莉ので同意見だ。あれを見ちゃあ、そうしか考えられないよ」

先ほど腕を縫合してのけた光景——あれを見た限りでは、そう結論するしかないだろう。ただあえて言うならば、直己はもっと限定的な能力だと推測していた。『フランケンシュタインの怪物』は、もともと死体を繋ぎ合わせて造られた化け物である。だとすれば、再生にしても”縫合”こそが、この能力の本来のものではないかと。

しかし、状況も状況である。作戦会議の時とは違い、この時点で限定させる必要もないだろう。直己はそうも判断していた。ここはもっと広い視野で戦うべきだ。視野搾取した状態で当てが外れれば、そのまま死に直結する。

「何か言いたそうな顔をしてるわね」

夕莉がまじまじと見返してくる。こんな状況だというのに、直己は少しどきりとした。

「……いや、そんなことはない」

「そう？　ならいいけど」

別段気にした様子もなく、夕莉はその視線を怪物へと戻した。

「じゃあ、あの《不滅縫合体》ジャンク・ボディを再生能力だとして話を進めるけど。

……私、実はああいう再生能力持ちとは以前にも戦ったことがあるわああいうのってね、言ってしまうえば部分を弱めたところで意味がないのよ。重要部分を潰さないことにはね」

「なるほどね。それで重要部分ってどこだ？」

「よく見なさい。相手は人型よ、普通に考えれば分かるものじゃない？」

視線の先で仁王立ちしている怪物のことを眺めて、直己は感慨もなく答えた。

「——頭、ってことか」

「そういうこと」

「頭を潰す策はあるのか？」

「それは……今考えてるところよ」

なぜか夕莉は不機嫌そうに答える。要するに、現時点では手がないということらしい。しかし、この状況で考え中ともなると酷である。さすがに怪物もこれ以上は待ってくれそうにないし、睨み合いもそろそろ限界だろう。

案の定、怪物も業を煮やしたか、こんなことを口に始めた。

「どうした、人間。……いい加減、作戦会議が長いぞッ！」

依然として、夕莉はどうやってこの状況を切り抜けるかを考えている。直己の頭の中に、一瞬だけ『撤退』の二文字が思い浮かんだ。ここは出直すべきではないのかと考えた。が、次の瞬間には、自らの思考を打ち消していた。

せつかくここで合間見えたのだ、聞けることは聞いておく必要がある――

「夕莉。できるか分からないが、時間を稼ぐようにしてみる。その間に考えてくれ」

夕莉が驚いたような面持ちで、直己のことを見上げてきた。

「……どうということ？」

「別に。ただ怪物と会話してみるだけさ、個人的な事情つてやつだよ。だから、それを時間稼ぎにしてくれないかってこと。まあ、相手に会話する気があればの話だけど」

「そういうこと。いいわ、なら出来るだけやってみなさい。私は期待してないけれど」

まったく、言ってくれるよな――直己は内心で一度だけ苦笑した。それから、直己は声を張り上げて、

「フランケンシュタインの怪物！ こうして合間見えた縁だ。これは俺の個人的な事情だけ……殺し合う前に少しでも話したい」「ハッ、何を言うかと思いきや！ 多くは語らないのではなかったか？」

「悪いが、それは止めだ」

直己が嘯いてみせると、怪物は心底皮肉そうな表情を作成していた。

「……ふん、まあいいさ。己としても、ただお前らを殺すだけなど何も面白くはない。お前らは、その当てにしている策とやらを潰して、絶望の淵を見せてから……殺してやるッ！ だから、お前のつまらない事情とやらにも一応は付き合ってやろうじゃないか」

「そうかい。なら、よかった」

内に秘めた憎悪を発露させる怪物に対して、直己の心情はどこまでも冷め切っていた。

「俺が聞きたいのは、お前が殺した人間のことだ。怪物、お前はこの世界に来て一人殺したはずだが——その時、何を考えていた？

罪悪感があったのか？」

「なんだ、あの人間のことが」

怪物は面白くもなさそうに、そう答えた。

あの人間——怪物の言っている人物は、直己にもよく分かった。何故なら、それは佐竹伸彦という直己のクラスメイトだったからだ。個人的にあまり付き合いがあったわけではないが、身近な人間であることに変わりはない。直己にとっては顔見知り程度でしかないが、祐二には掛け替えのない友人だった。

彼を殺した時の気分どうだったのか。直己はそれを知りたかった。

「……罪悪感がなかったか？ そう問われれば、なかった、とはい切れないな。ただ、奴が愚かな人間であったことには違いない。はつきり言おう、己があの人を殺した理由は……拒絶されたからだよ。だから、殺した。ただそれだけのことだ」

倉庫街を流れていく微風に、怪物の言葉がすつと溶けて、消えていった。

「最悪の気分だったよ。それに悲しかった。たまらなく悲しくて、虚しかった」

「……お前の感傷なんて、どうでもいいよ」

この怪物が同級生を殺したには違いないのだ。そんな奴の感傷な

ど知りたくもなかった。考えただけで反吐が出る。直己がもつと知りたいのは、事実だ。

「それよりも、お前、何か会話でもしたのか？　したのなら、その内容はこういうものだ？　その後、どうやって殺した？　全て教える」

すると、怪物は一瞬だけ訳の分からぬような顔をして、

「なんだ、お前。奇妙な人間だな……そんなことを知ってどうする？」

それについて、あえて直己は何も言わなかった。

「だんまりか。……まあいい、これも余興だからな。聞きたいというのなら、聞かせてやろうじゃないか。あの愚かな人間と何を話したのか、どうやって殺したのか。全てな。……ただその前に、己からも一っだけ質問させてくれないか。己ばかりが質問を答えさせられるのは、少しばかり酷だと思うのだが？」

「……いいだろう、答えてやるよ」

不承不承という感じではあったが、直己はそれを承諾した。

「では問うが。お前らは、一体何者だ？」

「お前らを裁く執行者だよ。まあ、言っても分からないとは思っけどな」

「まったくだ。何だそれは」

怪物は訳が分からないという至極当然の表情をしていた。

「なら、ご丁寧にも教えてやるか。理解できるかは別だけどな。……」

「この世界には、お前のような化け物がわんさか来る。言ってしまうえば異世界人。俺たちはお前らのことを”幻想人”と呼んでいるんだよ。信じられない能力を宿した、化け物としてな」

怪物は面白くもなさそうに、ふん、と鼻を鳴らした。

「でもな、俺たちは人間だ。どうしてもお前らのような脅威を見過ぎすわけにはいかない。そのために生まれたのが執行者ってわけさ。俺たちの役目は、怪物であるお前を駆除することだ。言ってしまうばゴミ処理係ってところか」

以前とは違い、それを口することに何の抵抗も感じなかった。

「説明、足りてるか？」

直己は肩を竦めながら、そう問い返した。しかし、最後の問いかけは向こうには届かなかったらしい。怪物はくつくつと肩を揺らし、ただ嗤うばかりだった。

「……なるほどな。己はこの世界に期待するだけ無駄だったというわけか」

怪物が明らかな憎悪を湛えながら、ゆっくりとその面を上げた。まるで地獄から噴き上がったかのような悪意が、奔流となって直己へと浴びせかけられる。今この時になって、直己は目前にいる怪物が、狂気の末に生み出されたものだということを再認識した。

「ふん、なら今度は己の番か。語ってやるさ。お待ちかねと話題とやらをな——」

そして、怪物は皮肉げな笑みを浮かべ、その口を静かに開いた。

Chapter 2 - 04 : 死闘の始まり（後書き）

忘れ去られないうちにアップ。

書き溜めるって話はどこいったんだろう。

十

夢見ヶ丘西区の外れ、南区との境界にある電波塔。その中程にある設置された足場から、秋也は倉庫街における戦いの一部始終を目にしていた。

雲もなく晴れ渡った、星空の綺麗な夜だった。しかし、そんな美しい夜にも関わらず、秋也は一瞬たりともそれを意識することはなかった。それも彼の暗視^{ナイトビジョン}双眼鏡の奥——倉庫街で行われている戦いが、あまりにも熾烈を極めていたからだ。到底、他のことに意識を向けることなど、できなかった。

ちなみに、軍事転用できるため購入制限のかかっているこの暗視双眼鏡は、秋也が橘先輩から譲り受けたものだ。彼女がどういう経緯で手に入れたのかは、秋也も気になるところだったが……この際、疑問は飲み込んだ。

口に咥えているタバコを一度吸って吐く。それから暗視双眼鏡を外す。

「……未だに反応はなし、か」

秋也の視線は、傍らに放置されている幻想武器へと向かっていた。彼の所持している幻想武器は、赤色の宝石を載せた杖型の《R04 ^{カルロス} Carlos》だ。一応、杖先が刃になっているため近接戦闘もこなせるが、そもそもは後方支援に特化したタイプの幻想武器である。事実、秘められた能力が証明していた。

このカルロスに秘められた能力は、幻想世界にしかない物質に干渉するものだ。秋也はそれによって”黒い手”と呼ばれるものを作り出し、操ることができた。さながら、ファンタジー物に登場する魔術や魔法のようなものだろうか。

また、物質を操れるということは、別の用途にも使えるということであり――

夢見ヶ丘市に拡散すれば、それは幻想人に対する探知能力としても運用できるというわけだ。実際、秋也が今やっているのもこれである。南区全土に広げた物質によって、秋也は動かずとも怪物の位置を把握することができた。執行者内で、秋也が斥候やら偵察任務を多く指示されるのも、ここに理由がある。

これを使用する上で、最大の欠点は人間を探知できないことだが――

「まあ、今のところ状況は好し、と」

秋也は暗視双眼鏡を付け直し、その視線を倉庫街へと戻した。人間を探知することはできないが、それは何も遠方から監視していればいいだけの話だ。もともと、この時間であれば倉庫街を出入りする者たちは限られる。

それよりも問題なのは、もっと別のことだった。

「……どうも、あっちはマズそうだな」

秋也は口に咥えているタバコを、近くの足場へと押し付けた。

見ている限りでは、あの怪物に対して、執行者側は攻めあぐねているようだった。怪物の腕を落としたという当初の優位性^{アドバンテージ}は、もはや失われてしまっている。付け加えるならば、一通りの戦法が通用しない以上、これから好ましい戦いが演じられるとも思えなかった。どちらにせよ、状況は芳しくない――

そう冷静に判断してから、秋也は少し胸が苦しくなった。

なぜだろうか。今時になって、秋也は怪物と出会った昼間のことを思い出していた。

『だが、それでも期待せずにはいらなかったのだよ、己は……』
気が狂ったかのように笑い転げた後、ぽつりと呟かれた言葉。

秋也には、フランケンシュタインの怪物が、これまでどのような人生を歩んできたのか分からない。だが、ある程度の予想はすることができた。あの怪物は、これまできつと誰からも好意を向けられ

たことがなく、また受け入れてもらったこともないのだろう。

もことから、秋也は怪物を陥れるためのスパイとして、あの場に赴いたはずだ。なのに、こんな状況になって、秋也の感情はどこか揺らいでいた。

——本当にこれでよかったのか、と。

考えれば考えるほど、深みに嵌っていくような気がした。だといいのに、思考を停止することはできず、秋也の迷いは強くなる一方だった。

秋也は苛立たしげにタバコを口に咥え、ライターで火をつけようとして――

そのタバコを口元から、ぽろり、と落とした。

「……あ？」

ふと、目を凝らす。秋也の監視していた倉庫街の入り口に、何者かが近づいてきていた。否、そんな事実が重要だったのではない。倉庫街に足を踏み入れようとしている人物、それこそが秋也にとつては重要だった。

何故なら、それは彼の良く知る人物だったから。

「姉さん……？」

秋也は全く無意識のまま、そう呟いていた。

何者かが倉庫街を出入りする可能性。確かに考慮はされていた。だからこそ、こうして秋也は監視役を任されたのだ。しかし、すでに怪物の正体が露見してしまった今、まさか姉が再びここへと訪れようなどとは、さすがに考えてもみなかった。

ともかく先輩に連絡しなければ——秋也は懐の携帯へと手を伸ばした。

「橘先輩、倉庫街に人が現れました！」

秋也が焦りを滲ませて叫ぶと、先輩が極めて落ち着いた声を返してきた。

『……とりあえず落ち着こうか、秋也くん』

「落ち着いてられませんか。だって、うちの姉ですよ、うちの姉

！ オレも今すぐそっちに向かいます。先輩もどうにか止めてやってください」

『あ、待ちなさい。秋也くん、別に君は動かなくても——』

秋也は先輩の言葉を待たずして、通話を断ち切っていた。こんな会話をしている間にも、時間は過ぎ去っていく。あまり無駄な話はしていられなかった。

電波塔を下るための準備を整えて、秋也はすぐに梯子へと向かう。奇妙な確信があった。

今の姉を止められるのは、きっと自分だけだろうと。

あの時、あの場所で、あの怪物の正体を一緒に目撃した自分であれば、きっと姉は止まらないだろう。だって、あの時の感情を共有できるのは、あの場にいた者たちだけなのだから。だから、先輩には悪いけれど、秋也が行かなくてはならないのだ。

あの時、あの場所にあった、ささやかな幸福を台無しにした——
決着として。

「……そう、決着を付けなきゃならないんだ、自分の手で」

秋也は去り際にそう一言だけ呟いて、すぐに電波塔を下っていった。

Chapter 2 - 04 : 星降る夜になったら

十

雲もなく晴れ渡った、星空の綺麗な夜だった。

日付の変わった深夜。この時間帯ともなれば、もはや昼間のような活気は存在しない。今、この夢見ヶ丘市に流れているのは心地よい静寂のみだ。先日、夢見ヶ丘市で殺人事件が起きたことも関係しているのか、街には人の気配など全くなかった。一種、異世界の中に踏み込んでしまったような錯覚さえある。

そんな真夜中の街を、春菜は駆け抜けていた。

昼間の一件から自宅のベッドで目を覚ました春菜であったが、当初は何が何だか理解することもできなかった。一緒に倉庫街へと赴いたはずの秋也が、いなくなっていたからだ。言ってしまうえば、彼女は何の説明もなく自室へと連れ戻されてしまったわけであり——だから、自身の置かれている状況を瞬時に把握することも、また困難であった。

一応、春菜もあの時どうだったのかは回想してみたのだが、よく思い出すことはできなかった。ヨハンの姿を直視するまでは覚えていても、それは以降は全く思い出せないのだ。

ただ何となく、恐ろしいものを見た気はしていた。

「ヨハンは……」

静まり返った道路を走りながら、春菜はふと漏らす。

正直に言えば、春菜はまたヨハンと会うことが怖かった。何故ならば、春菜の回想が正しければ、あの恐ろしい姿をしていたのはヨハン自身だったからだ。あの時のことを思い出そうとすると、今でも春菜の体には怖気が走ってしまう。

でも、それじゃ駄目だと思っっている自分も、またどこかにはいた。

例え、己の姿を見ても、決して嫌ったりしないでくれないか——ヨハンはそう言っていたはずである。それなのに、春菜はその約束を破ってしまったていた。

「わたしは……」

ふと、そうに口に出して、春菜はぐつと歯を噛み締める。

「わたしは、ヨハんに謝らなきゃいけないんだ」

だから、会いに行かなくちゃ。

春菜はよりいっそうの力を込めて、次の一步を踏み出した。びゅんと体が夜風を切る。息が荒げる。髪型が乱れる。でも、そんなものはどれだけ乱れたって構わなかった。

——わたしは、ヨハんに会いたい。

春菜は自宅のある西区を抜けて、埠頭のある南区の方へと向かっていく。そこに向かうまでの道のりは、街灯しかない寂しいものだったが、不思議と恐怖心はなかった。それは夜空に浮かんでいる星々が、いつもより燦々と煌いていたからかもしれない。

まるでプラネタリウムでも見ているかのようだった。

こんな美しい夜ならば、もう何も隠さずに話せるのではないか。これまで姿を隠し続けてきたヨハンとも、面と向かって話すことができるのではないか——そう春菜は思った。

そうだ、きつとできるはずだ——

夜の爽気を駆け抜けて、春菜はとうとう倉庫街の入り口へと辿り着いた。

相変わらず、倉庫街には人の気配がなかった。もともと人通りの少ない場所だけあって、街灯もこれまでに比べればずっと少なくなっている。事実、春菜の目の前に広がっているのは、先も見えぬ闇ばかりだった。しかし、春菜は恐れなかった。

この暗がりの中であっても、夜空に浮かんでいる星々の光は絶えないのだから。

「……行こう」

春菜は静かにそう呟き、すぐ先にある闇へと飛び込もうとして——

「君、ちょっと待ってくれるかな？」

ふいに何者かによって呼び止められた。

「何、ですか……？」

春菜はゆつくりと、その声がした方向へと振り返った。その声の主は、今まさに倉庫街へと飛び込もうとした春菜のすぐ近く、街灯に照らされた歩道の下に立っていた。

街灯の下に立っていたのは、少女だった。肩までかかる栗色の髪をして、今の季節に相応しい夏服を着こなしている。その少女の服装自体は特に洒落たものでもなかったが、春菜はその少女から、何か名状しがたいものをひしひしと感じ取っていた。人を惹き付ける魅力とでも言うのだろうか。とにかく、そういった類の何かである。

「君、日向春菜ちゃんだよね？ 夢見ヶ丘高校の一年生」

少女がつらつらと語ってくる。その情報は、まさに春菜本人のものであった。

「……なんで、わたしのことが分かったんですか？ あなたは誰なんでしょうか！？」

相手は何者か分からなかったこともあり、春菜は怪訝さを隠さずに問い返した。すると、少女は軽く笑って返してきた。

「ああ、君は私のことが分からなかったんだね……まあ、それも仕方ないか。あたしはね、春菜ちゃんと同じ夢見ヶ丘高校の三年生、橘美鈴って人だよ」

「ってことは、わたしの高校の先輩、ですか……？」

春菜は恐るおそる聞き返す。同じ高校の先輩だと名乗った美鈴という人物は、それに極めて超然とした態度で頷いた。

「そういうこと。ま、そんな話はどうでもいいんだけどね。ところで、君、これからどこに行こうとしてたの？ どうも倉庫街に入っ
ていこうとしてみたいだけ……」

「と、特に理由はないです」

何とも痛いところを突かれてしまい、春菜は思わず動揺して答え
てしまっていた。本来ならば、こういう時には感情を表に出したく

ないと常々思っているのだが、どうも春菜はそうだったことが苦手だった。さすがに問いを投げた美鈴の顔にも、苦笑が過ぎっている。

「……ほんとに？」

「ほ、本当ですっ」

春菜は必死で誤魔化そうとして、そう力強く返答する。しかし、それがさらに美鈴の疑いを深めているだけだということには、今の春菜は一切気付いていない。

「ほんとの、ほんとに？」

「ほ、本当ですってば！」

「ふうん……」

美鈴が意味ありげに納得してみせた。その時になって、春菜は初めて彼女の術中に嵌っているのだと確信したが、しかし、実際にはすでに遅すぎた。

「春菜ちゃん、今日は帰った方がいいよ。何なら、あたしが家まで送ってあげるから」

「……え？」

「だって、特に理由もないんでしょ？ こんな時間に女の子が一人で街をうろついていたんじゃないじゃない。だから、あたしが送ってあげる。感謝してよね」

それを言うなら、先輩だって女の人じゃないですか——春菜はそう言いかけたのだが、年上相手だというのもあって切り返す勇気が出ず、そこで口を噤んでしまう。

「先輩。ありがたい申し出ですけど、いいです……そういうの、いいです」

「そりやまたどうして」

聞き返してくる美鈴に対して、春菜は今度こそ迷うことなく言い切った。

「どうしても、行かなきゃならない場所があるから……です」

「それは駄目だね」

美鈴は一度だけ深い溜息を吐いて、それからかつかつと春菜の方

へと近寄ってくる。それを春菜はただ呆然としたまま、見守っていることしかできなかった。

ふいに美鈴によつて、春菜の腕が強引に掴まれる。

「な、何するんですかっ!？」

「……いいから。君は帰るべきだ」

「そんなこと知りません。帰りたいなら、あなただけで帰ればいいじゃないですかっ!」

思わず、春菜は語調を強くしてそう返していた。すると、そんな言葉を受けた美鈴は、少しだけ悲しげな表情を作り、それから腕にかける握力を強めた。どうやら、あくまでも有無を言わせないつもりらしい。春菜もさすがにムツとした。

「ふ、ふさけないでください……!」

実力行使をするなら徹底抗戦するまでだと、春菜が意識を切り替えた——その時だった。

「……姉さん」

諍いを起こしていた春菜たちの背後から、ふと新たな声がした。

その声の主を確かめるため、春菜と美鈴は一切の動きを止め、新たに現れた人物へと視線を飛ばしていた。否、春菜はその声に聞き覚えがあつた故——

「秋也? どうして、ここに、いるの……?」

春菜は驚きに満ちた表情のまま、そう問いを発するしかなかった。今、まさにこの倉庫街へと辿り着いた秋也は、よほど必死に彼女のことを追つてきたからか、その総身を汗で濡らしていた。さらに言えば、いつになく真剣な目付きをしている。さすがに鈍い秋也にも、それが普通の状況ではないことは理解できた。

春菜の腕を掴んでいた美鈴は言葉もなく、するりとその手を離す。「オレは姉さんのことを追いかけてきたんだよ。ったくもう、こんな時間にどこ行こうとしてるんだよ……ほら帰ろっぜ、危ないだろ?」

倉庫街の前にいるのにも関わらず、秋也はヨハンのことに全く触

れなかった。それがあまりにも意図的なようで、春菜は違和感を覚えずにはいられなかった。そして、その最初に覚えた違和感は、少しずつ春菜にとっての焦燥感へと変わりつつあった。

何故だか、とても重要なことを隠蔽されているような——そんな気がした。

「わたし、帰らないよ」

春菜は弟に向けて、きっぱりと言い放った。

「わたしは、ヨハンに会いに来たんだから」

それには、これまで姉弟の会話を眺めていた美鈴だけでなく、秋也ですらも悲しげな表情をしていた。どうして、二人ともそんな顔をしているのか、春菜には分からなかった。

積もり積もった焦燥感が、春菜の語尾を震わせる。

「……ねえ、二人ともおかしいよ。どうして、どうしてそんな顔をするの？ わたしには、会いたい人がいるだけなのに、どうして、二人ともそんな顔をするの……？」

春菜の問いに対して、返ってきたのは無言だった。

先輩である美鈴も、彼女の弟である秋也すらもが、沈痛な表情をしたまま黙りこくっていた。この時点になって、ようやく春菜は目の前にいる者たちが他人同士ではないのでは、という疑いを持った。どうも連携が取れすぎているのだ。しかし、そうだとすれば、この美鈴という人物は秋也と面識があったことになってしまっわけだが

春菜はふと頭を振って、その思考を追い出す。

今の彼女にとっては、そんなことはどうでもよかった。

「……ねえ、秋也なら」

二人から向けられる無言の圧力に耐え切れず、春菜は秋也へと話しかけた。

「秋也なら、わたしの気持ちを分かってくれるでしょ？ わたし、ヨハンとの約束を破っちゃったから、だから謝らなきゃならないって、そう思って……だから、だからどうしても、わたしは行きたい

の！ 行かなくちゃならないの……！」

感情の高ぶった春菜の両目からは、自然と涙が溢れていた。

「それだけなのに、駄目、なの……？」

春菜はそうぽつりと呟いて、秋也のことを真正面に見返す。だが、秋也は依然として悲しみを湛えたままで、それ以外の表情は作れないロボットのようになり、固まっていた。

返答は、ない。

これ以上は話したって無駄だ——春菜はそこで見切りを付けた。ぐずりと鼻をすすって、目の前で悲しげな表情をしている二人のことを一瞥する。彼らが何を言おうと、今の彼女には関係ない。だから、それでも止めるというのなら実力行使に出るだけだ。

とぼとぼと倉庫街の方へと足を進め、ふいに強く踏み出そうとして――

「待ちなさい！」

案の定、春菜は美鈴によって腕を掴まれていた。

「何が何でも、あたしは春菜ちゃんを行かせる気はないよ。それだけは言っておく」

「う、うるさいうるさいつ、全部、わたしの勝手じゃないですか……！」

春菜はそれを振り払うため、ぶんぶんと力任せに体を動かした。いくら成人未満の体付きとは言え、ほとんど大人のようなものである。そんな春菜のことを押さえ込むためには、美鈴一人だけでは役不足も甚だしい。

事実、それは美鈴も理解していたらしい。すぐに増援の声はかかった。

「秋也くん！」

その声に応じるように、秋也が春菜の下へと駆け寄ってくる。やはり、秋也と美鈴の間には何らかの面識があったらしい。しかし、今の彼女にはそれすらどうでもよかった。

問題は、如何にして状況を切り抜けるかである。

「来ないで！」

駆け寄ってくる弟へと向けて、春菜は反射的に平手打ちを放っていた。

乾いた音が響き渡る。秋也が頬を押さえながら、呆然とした面持ちで、たじろいだ。そんな光景に意表を突かれたか、傍で眺めていた美鈴の目も点になっていた。引き止めるため掴まれていた春菜の腕が、その時、ふいに軽くなる。

それは一瞬の出来事だった。

しかし、春菜は見逃さなかった。今しかないと思った。

「あ、こら……！」

春菜は一瞬の隙を突いて、美鈴の傍から脱出していた。驚きの表情を浮かべる美鈴に対して、春菜は何も言わずに二人のことを一瞥、すぐにまた背中を向ける。

そして、彼女は迷うことなく倉庫街の方へと駆け出していた。

背後からかけられる制止の声にも振り向かず、ペース配分すらろくに考えず、彼女はただ目前にある暗闇へと向けて飛び込んでいく。追っ手から逃れるために。一刻も早く辿り着くために。目的の人と会ったために――

「……行かなくちゃ」

頭上にある星空を見上げながら、春菜はそう呟く。

夜空に浮かんでいる星々は、まるで彼女を出迎えているかのように微笑んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8318m/>

幻想のナラトロジー

2011年3月29日15時55分発行